

仙台市文化財調査報告書第297集

仙台城跡 6

—平成17年度 調査報告書—



2006年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第297集

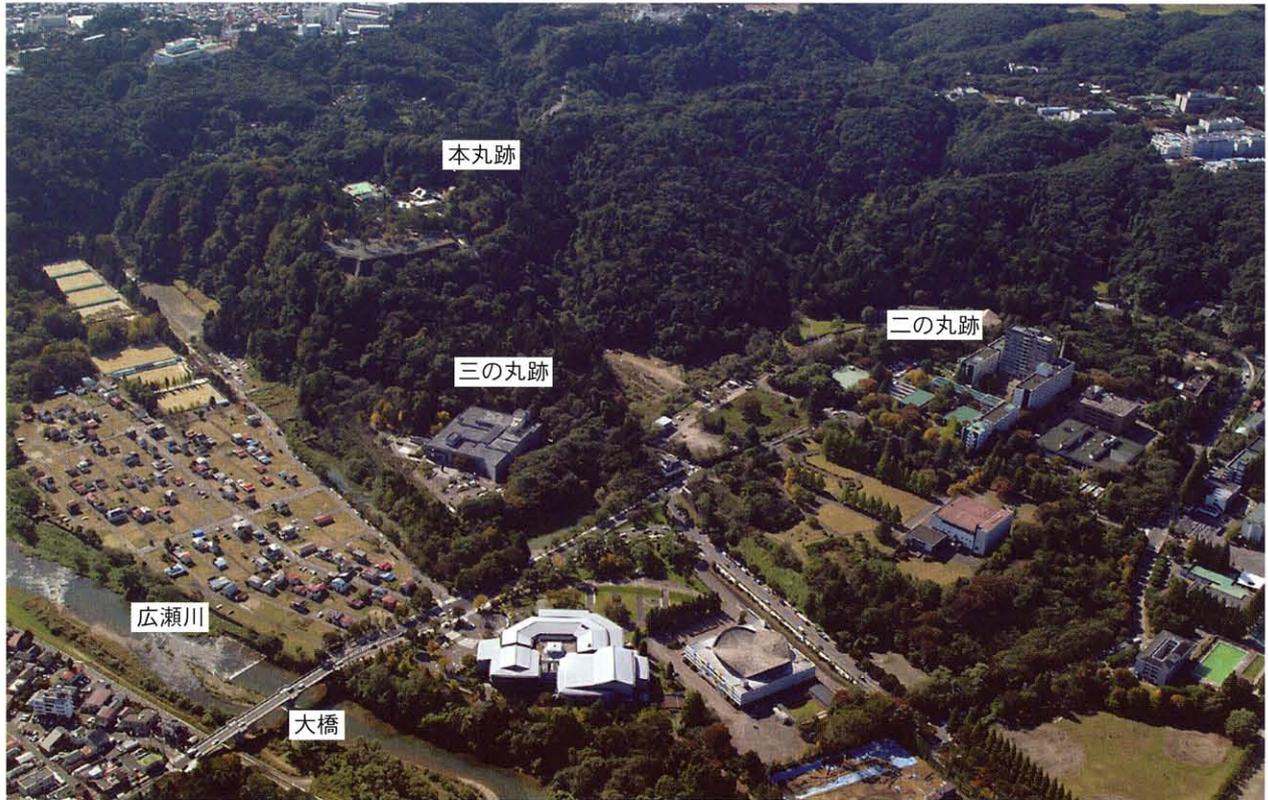
仙 台 城 跡 6

—平成17年度 調査報告書—



2006年3月

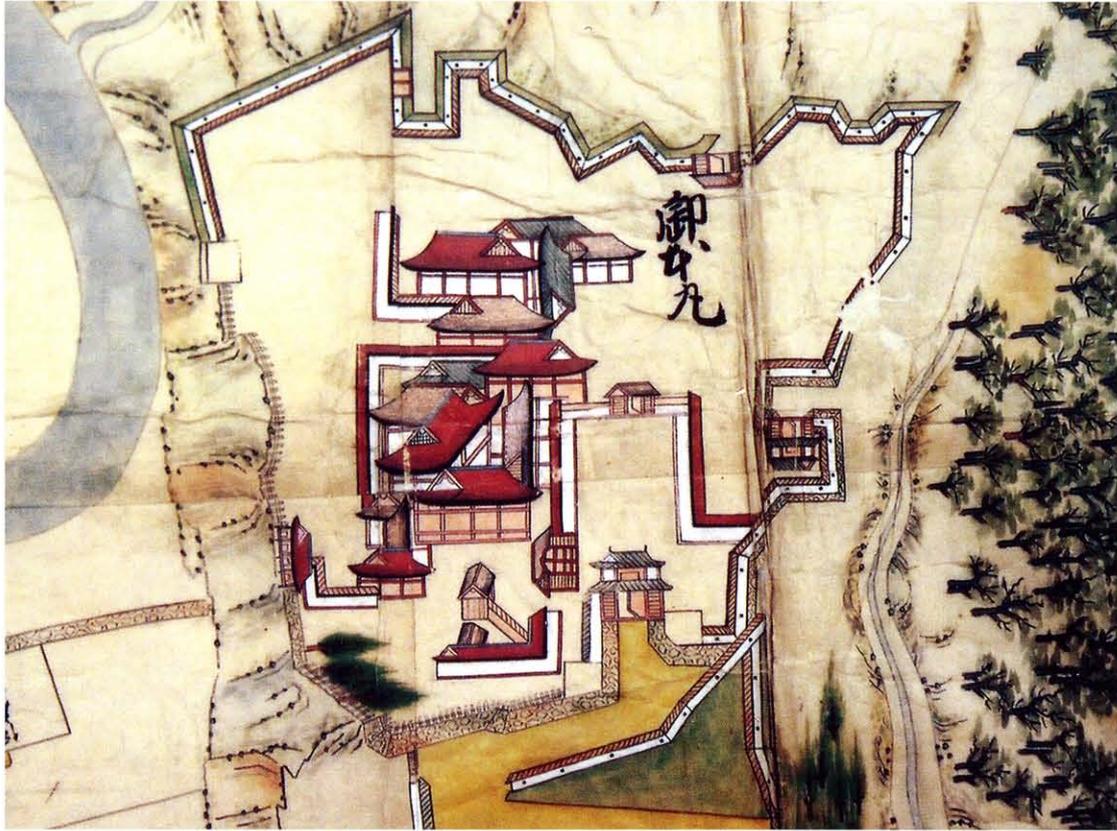
仙台市教育委員会



仙台城跡鳥瞰写真（北東より・2005年10月撮影）



仙台城跡航空写真（北が上・2002年1月撮影・赤ラインは国史跡指定範囲）



仙台城下絵図（南が上・本丸部分・寛文4年〔1664〕）宮城県図書館蔵



肯山公造制城郭木写之略図（南が上・本丸部分・17世紀後半～18世紀）宮城県図書館蔵



12次 礎石建物跡検出状況（北から）



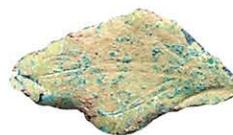
12次 遺構検出状況（南から）



12次 KS-53（雨落ち溝跡）・KS-353（暗渠状遺構）
検出状況（から）



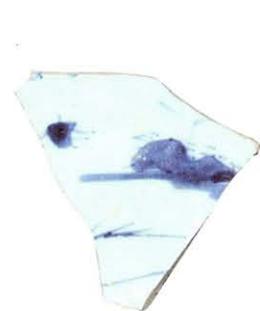
12次 KS-251（近代溝状遺構）検出状況（北から）



金銅金具〔No.18〕
縮尺 約1/1



銅釘〔No.20・55・56・57・58〕
縮尺 約1/1



染付皿〔No.7〕縮尺 約1/4



印判手染付皿〔No.7〕縮尺 約1/4



12次調査区位置図（1/10,000）



13次 堀跡検出状況（南東から）



13次 石組側溝検出状況（南東から）



14次 広瀬川護岸石垣（大橋南側）全景（東から）



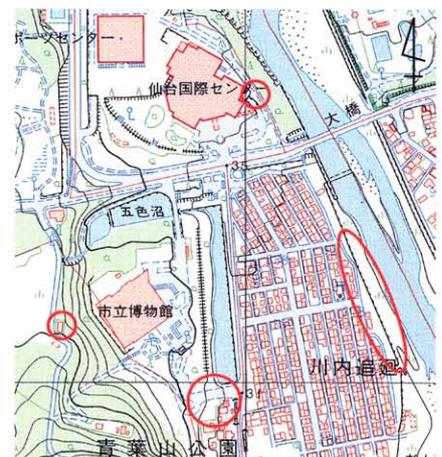
14次 広瀬川護岸石垣（大橋南側）近景（北東から）



14次 広瀬川護岸石垣（大橋北側）（南東から）



14次 中門跡北側石垣（東から）



13・14次調査区位置図（1/10,000）

序 文

慶長5年〔1600〕、初代仙台藩主伊達政宗が仙台城の縄張り始めを行い、城下に仙台のまちづくりを行い、四百年余りが過ぎ、仙台市は人口100万人を超える東北地方の中心都市となりました。市の中心部が、近代的なビルの林立する都市化の波にさらされていく中において、仙台城跡は市街地から最も近い緑豊かな場所として、青葉城や天守台といった愛称で、市民から親しまれてきました。

遺跡としての仙台城は、平成9年度から15年度まで行われた本丸石垣修復工事に伴う発掘調査や平成13年度から始められた国庫補助による学術調査によって、中世の山城であった千代城、そして伊達氏の居城として、その全容が徐々に明らかとなってきました。

これらの発掘で新たに判明した複数の時期に渡る石垣構築の変遷や、ヨーロッパ産のガラスや金銅金具等の貴重な出土品などから、仙台城跡は平成15年8月、我が国の近世を代表する城郭遺跡であることが評価され、国の史跡に指定されました。これを契機として、仙台城跡の保存管理及び整備に向けた、仙台城跡整備基本計画が策定される等、仙台城跡の様々な魅力を引き出すための取り組みが始まっております。

こうした中で、平成17年度は本丸御殿の主要な建物である大広間跡の周辺を中心とした発掘調査、三の丸巽門跡周辺の発掘調査、城内3箇所の石垣測量調査などが行われました。大広間跡に関する調査は今年度で5年目を迎え、雨落ち溝跡の改修を始め大広間周辺における、藩政期の整備の実態が明らかになりました。また、大広間跡より古い玉石敷きを伴う礎石建物跡を発見しました。巽門跡周辺の調査では、近代に埋没したとみられる堀跡の一部や登城路の脇につくられた石組側溝などを発見することができました。

今回の調査事業及び調査報告書の刊行にあたり、多くの方々からご指導、ご協力を賜りましたことを深く感謝申し上げますとともに、本報告書が研究者のみならず市民の皆様に広く活用され、文化財保護の一助となれば幸いです。

平成18年3月

仙台市教育委員会
教育長 奥山 恵美子

例 言

1. 本書は、仙台城跡の平成17年度遺構確認調査及び遺構測量調査の報告書である。
2. 本調査は、国庫補助事業である。
3. 本報告書の作成にあたり、次のとおり分担した。
本文執筆 鈴木 隆
編集は、渡部 紀・鈴木がこれにあたった。
4. 土壌サンプル分析は(株)古環境研究所、石垣測量は(株)東北パシフィックに委託した。
5. 本書中の地形図は、国土地理院発行の1:50,000『仙台』と1:10,000地形図『青葉山』の一部を使用している。
6. 遺構図の平面位置図は平面直角座標系X（日本測地系）を用いており、文中で記した方位角は真北線を基準とし、高さは標高値で記した。
7. 遺構略号は、全遺構に通し番号（国庫補助調査による検出遺構番号：KS- ）を付した。
8. 本報告書の土色については、『新版標準土色帳』（古山・佐藤：1970）を使用した。

目 次

序 文	V	第13次調査
例 言		1. 調査目的及び調査経過……………40
I はじめに……………	1	2. 旧地形及び基本層序……………41
II 仙台城跡の概要……………	3	3. 検出遺構……………43
III 調査計画と実績……………	6	4. 出土遺物 ……………50
IV 第12次調査		5. 絵図・地図からみた堀の変遷 ……………55
1. 調査目的及び調査経過……………	8	7. まとめ ……………56
2. 旧地形及び基本層序……………	9	VI 第14次調査 ……………57
3. 検出遺構……………	10	VII まとめ……………59
4. 出土遺物……………	29	
5. 理化学分析……………	33	
6. 伊達治家記録にみる能関連記事について ……………	35	
7. 考察……………	37	
8. まとめ……………	39	

I はじめに

平成17年度は、仙台北城跡遺構確認調査5ヵ年計画の5年次にあたり、下記の体制で臨んだ。(敬称略・順不同)

調査主体 仙台北城跡遺構確認調査室(生涯学習部文化財課仙台北城跡調査室)

発掘調査、整理を適正に実施するために調査指導委員会を設置し、指導・助言を受けた。

委員長 齋藤 鋭雄(宮城県農業短期大学名誉教授 近世史)

副委員長 岡田 清一(東北福祉大学教授 中世史)

委員 鈴木 啓(福島県考古学会会長 考古学)

西 和夫(神奈川大学教授 建築史)

北垣聰一郎(奈良県立橿原考古学研究所共同研究員 石垣・城郭研究)

千田 嘉博(奈良大学文学部助教授 城郭考古学)

仙台北城跡調査指導委員会開催日

第13回：平成17年7月22日 第12次調査中間報告・第13次調査計画・地震災害復旧に伴う調査中間報告

第14回：平成18年3月17日 第12・13・14次調査最終報告・地震災害石垣復旧に伴う調査最終報告

発掘調査及び遺物整理にあたり、次の方々から御協力をいただいた。

宮城県護国神社

資料提供 宮城県図書館、(財)齋藤報恩会、仙台北城跡博物館

さらに、下記の諸機関の方々から適切な御教示・御協力をいただいた。

本中 眞、坂井秀弥、白崎恵介(文化庁文化財保護部記念物課)、

後藤秀一、笠原信男(宮城県教育庁文化財保護課)、久保智康(京都国立博物館)、佐藤巧(東北大学名誉教授)、

須藤 隆(東北大学)、北野博司(東北芸術工科大学)、

藤沢 敦、高木暢亮、柴田恵子(東北大学埋蔵文化財調査研究センター)、乗岡 実(岡山市デジタルミュージアム)、

山本博利、工藤茂博(姫路市立城郭研究室)、齋藤 望(彦根城博物館)、追川吉生(東京大学埋蔵文化財調査室)、

富田和気夫(石川県教育委員会)、佐藤 洋、菅野正道(仙台北城跡博物館)

調査担当 文化財課 課長 阿部 功

仙台北城跡調査室長 金森 安孝

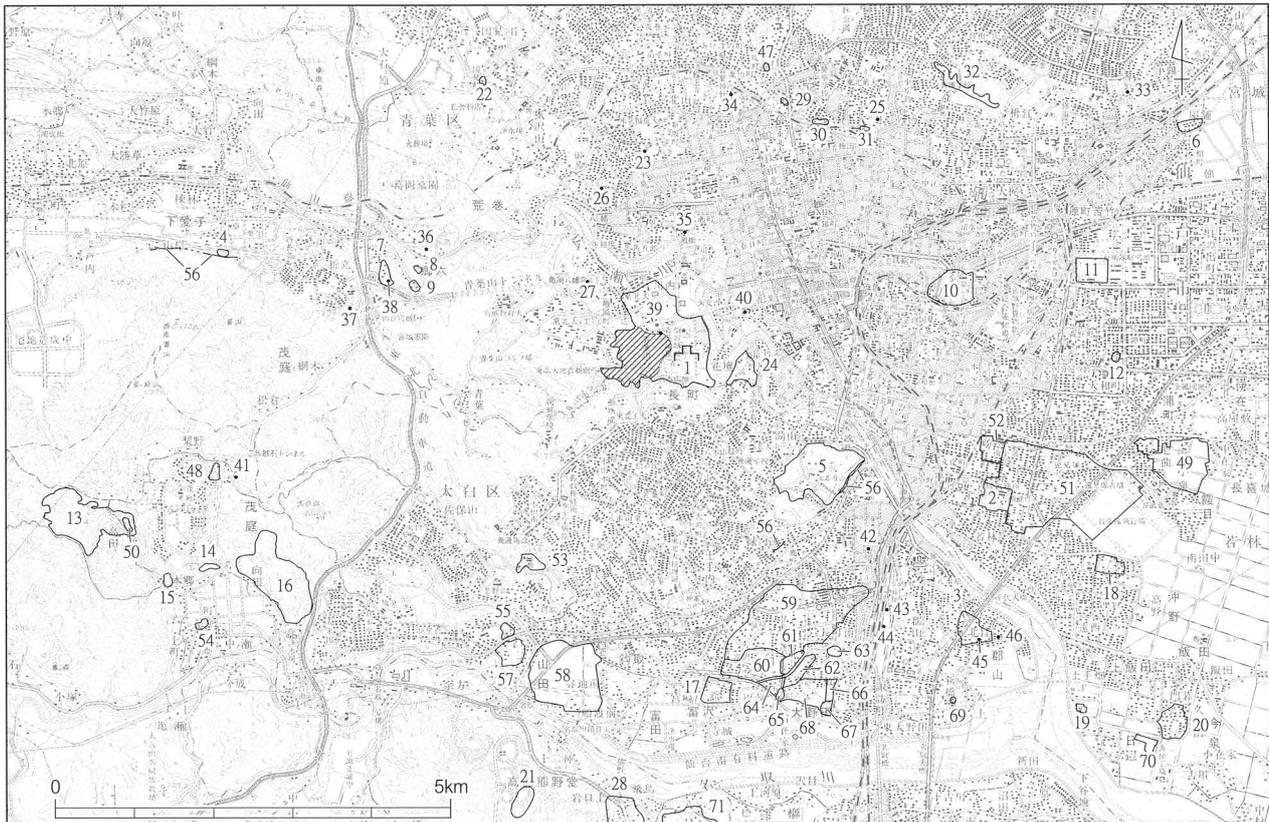
主任 熊谷 俊朗

主任 渡部 紀

主事 鈴木 隆

文化財教諭 橋本 顕嗣

調査参加者 相澤 守、安倍奈々子、天野美津枝、石河智章、市川健夫、伊藤美代子、内山陽子、遠藤誠子、大庭英佑、小野寺美智子、小原一成、小山政志、菅家婦美子、木幡真喜子、小林正夫、古山友子、佐藤公美、里見千絵、庄司明美、菅野 元、鈴木啓兼、鈴木 雅、瀬川和代、高野誠一、竹内美江子、田中世津子、田中春美、対馬悦子、久末恵輔、菱沼みのり、藤崎文恵、星野宗行、堀内泰子、本間綾子、三上 剛、三嶋典子、森田賢司、山田君代、結城龍子、吉田秘紹子、渡邊 優



1	仙台城跡	15	茂庭西館跡	29	荒巻杉添竈跡	43	西台畑板碑群	58	山田糸里遺跡
2	若林城跡	16	茂庭けんとう城跡	30	杉添東竈跡	44	長町駅裏古碑	59	富沢遺跡
3	北目城跡	17	富沢館跡	31	五城中学校北竈跡	45	宅地古碑群	60	山口遺跡
4	西館跡	18	沖野城跡	32	与兵衛沼竈跡	46	古峯神社板碑	61	下ノ内浦遺跡
5	茂ヶ崎城跡	19	日辺館跡	33	板碑・石碑	47	山田団地東南遺跡	62	六反田遺跡
6	小鶴城跡	20	今泉遺跡	34	燕沢蒙古の碑	48	梨野A遺跡	63	元袋遺跡
7	郷六城跡	21	小館(古館)跡	35	東昌寺裏経石出土地	49	仙台東郊糸里跡	64	下ノ内遺跡
8	葛岡城跡	22	寺院・墓所	36	瀬不動尊文永十年板碑	50	カナクソ遺跡	65	伊古田遺跡
9	郷六御殿跡	23	臨濟院跡	37	郷六六日如来の碑	51	南小泉遺跡	66	王ノ壇遺跡
10	国分鞭館跡	24	林子平墓	38	大梅寺建武の碑	52	養種園遺跡	67	皿屋敷遺跡
11	南目城跡	25	経ヶ峯伊達家墓所	39	郷六建武碑	53	御堂平遺跡	68	大野田古墳群
12	谷地館跡	26	神社	40	川内古碑群	54	町田遺跡	69	矢ノ上I遺跡
13	茂庭大館跡	27	東照宮	41	片平仙台大神宮の板碑	55	北前遺跡	70	高田B遺跡
14	峯館跡	28	大崎八幡宮	42	馬越石塚	56	杉土手(鹿除土手)	71	ハツ口遺跡
			熊野新宮社宿坊跡		蛸薬師古碑群	57	山田上ノ台遺跡		

第1図 仙台城跡と周辺の遺跡

II 仙台城跡の概要

1. 仙台城跡の地理的環境と現況

仙台城跡は仙台市街地の西方に位置し、青葉山丘陵及びその麓の河岸段丘部分を中心に城域が形成されている。青葉山丘陵は東を流れる広瀬川に向かい迫り出し、広瀬川とその支流の竜ノ口溪谷の浸食により高さ70mほどの断崖を形成しており、その丘陵上の平場（標高115～117m）に仙台城の本丸は位置する。本丸の規模は、東西245m、南北267mを計り、南側は落差約40mの竜ノ口溪谷、東側は広瀬川に落ちる高さ約70mの断崖に守られた天然の要害となっており、比較的傾斜の緩やかな本丸北側には約17mの高さを有する石垣が築かれている。尾根続きとなっている本丸西側には御裏林と呼ばれた森林が広がり、貴重な自然が残るために国指定天然記念物青葉山となっている。御裏林跡では、3条の大規模な堀切などが確認されている。本丸跡の麓部の河岸段丘には二の丸跡と三の丸跡が位置しており、二の丸跡は仙台上町段丘面、三の丸跡は仙台下町段丘面と高度を下げている。蛇行する広瀬川に西から二本の大きな沢が走り、この沢に挟まれ御裏林を背にした場所に二の丸跡が位置する。二の丸跡東側に位置する大手門跡付近には、約9mの高さの石垣が残り、その南側には大手門脇櫓が昭和42年に復元されている。さらに低位に位置する三の丸跡は、外郭を水堀と土塁に囲まれ、門跡付近には石垣が残存している。三の丸跡の東側、河岸段丘の最も低位に位置する追廻地区の広瀬川護岸部分には、260mに及ぶ石垣が残存している。

2. 仙台城跡の歴史的背景

仙台城は、初代仙台藩主伊達政宗によって造営された城である。関ヶ原の戦い直後の慶長5年〔1600〕12月24日、城の縄張り開始され、翌年1月から普請に着手、工事は慶長7年〔1602〕5月には一応の完成をみたとされている。築城当初は「山城」である本丸を中心とする城郭であったが、政宗の死後、二代藩主忠宗が山麓部に二の丸の造営を開始する。寛永年間以降はこの二の丸が藩政の中心となり、三の丸・勘定所・重臣武家屋敷などが一体となって城域を形成していた。残された絵図などからみると、本丸への登城路は、大手門を通過して中門を経て本丸詰門に至るものと、巽門、清水門、沢門を通るものがある。

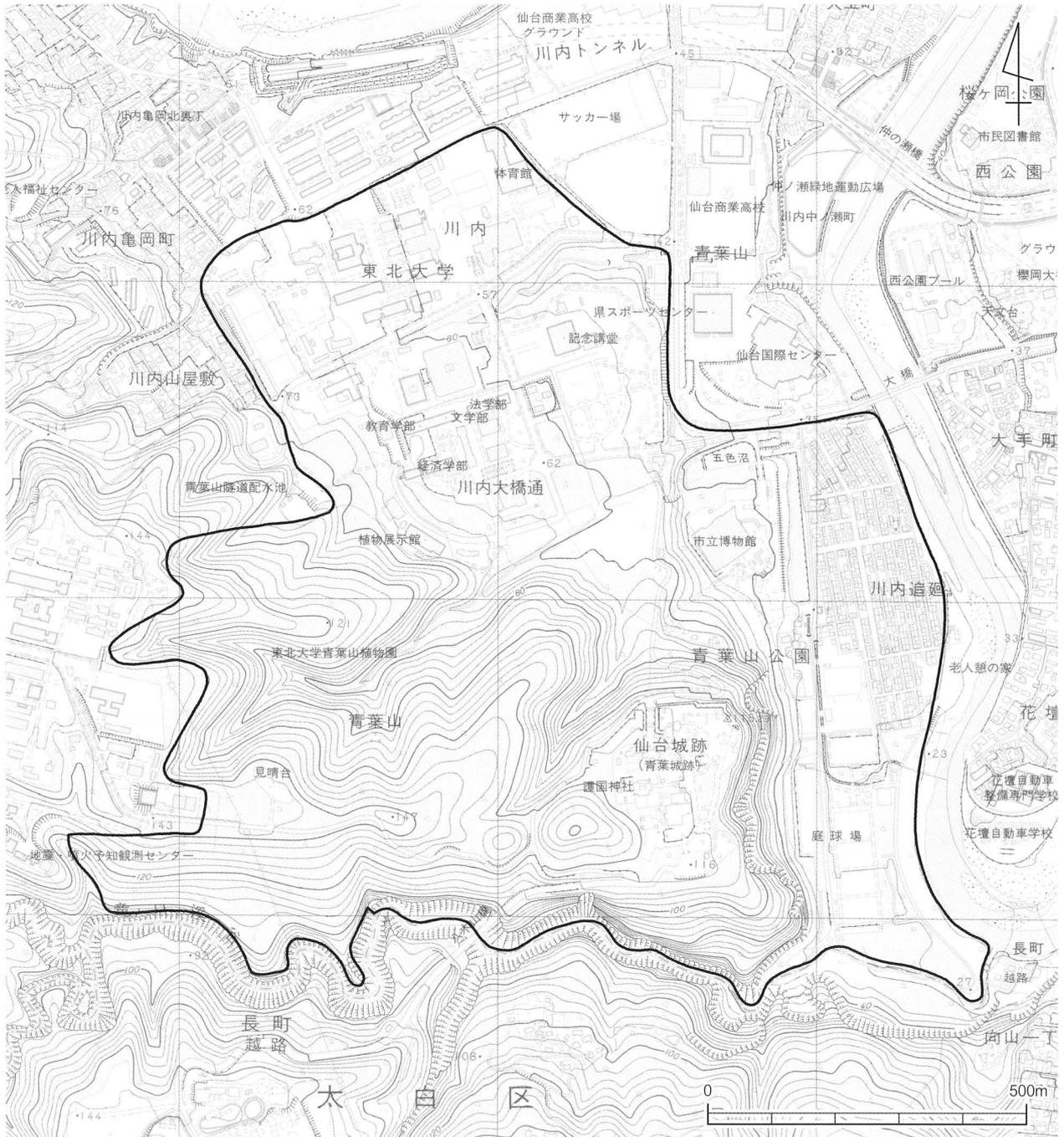
絵図や文献などによれば（註1）、本丸には詰門を入った東側に天皇家や将軍家を迎えるための御成門があり、華麗な障壁画や欄間彫刻に彩られた大広間を中心とする御殿建物が存在していた。東側の城下を見下ろす崖面に造られた懸造、さらには能舞台・書院など、上方から招いた当代一流の大工棟梁・工匠・画工等によって造られた桃山文化の集大成といえる建物が威容を誇っていたと考えられている。西脇櫓・東脇櫓・長櫓・巽櫓は三重の櫓であったが、正保3年〔1646〕4月の地震によって倒壊したとする記事がみられ（註2）、以後復興されずに明治を迎えたものとされている。

本丸の建物は江戸時代の度重なる災害に加え、明治維新後の取り壊しなどにより失われ、二の丸の御殿群も明治15年〔1882〕の大火によって焼失した。唯一仙台城の面影を伝えていた国宝の大手門及び脇櫓も昭和20年〔1945〕

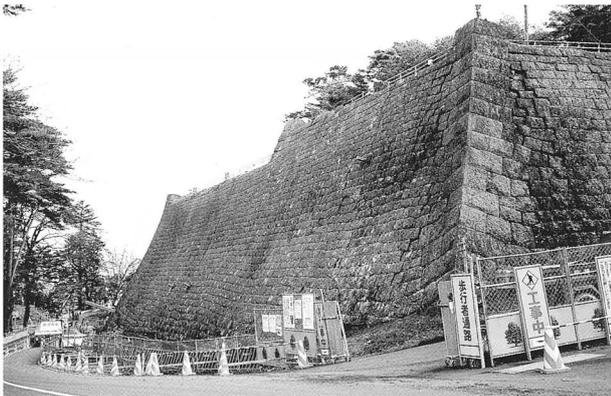
7月、太平洋戦争による米軍の空襲によって焼失した。現在では、本丸北壁や随所に点在する石垣、本丸西側の堀切、三の丸の周囲を囲む堀と土塁などが往時の仙台城を偲ぶ貴重な遺構となっている。また、伊達氏による仙台城築城以前にこの地域をおさめていた国分氏の居城「千代城」に関する16世紀代の文献記録も残っており（註3）、中世山城が存在していた可能性も指摘されている。



第2図 焼失以前の大手門と脇櫓（1935年頃）



第3図 仙台城跡 (現況地形図と遺跡範囲・1/10,000)



第4図 仙台城本丸現存(Ⅲ期)石垣
解体修復工事前(北西から)



第5図 仙台城本丸現存(Ⅲ期)石垣
解体修復工事前(北東から)

3. 仙名城跡の発掘調査

仙名城跡のこれまでの調査には、昭和58年〔1983〕から継続的に実施されている東北大学構内の施設整備に伴う二の丸跡の発掘調査（註4）と、仙台市博物館の新築工事に伴って昭和58・59年〔1983・1984〕に実施された三の丸跡の発掘調査（註5）があり、本丸跡では石垣修復工事に伴う発掘調査が第1次発掘調査である。

本丸北壁の石垣は昭和30年代から変形が目立ち始め、防災上の観点から石垣修復工事が平成9年〔1997〕度から実施されている。（註6）この石垣修復工事に伴う本丸1次発掘調査は、平成9年〔1997〕7月から石垣解体に先行する事前調査と、翌年10月から開始した解体工事と並行する発掘調査からなっている。解体工事は平成12年〔2000〕9月に石材9,106石と、Ⅱ期石垣124石の解体をもって終了し、石積工事を同年12月から開始し、平成16年〔2004〕3月に工事が終了した。

石垣解体に伴う発掘調査により、現存石垣（Ⅲ期石垣）背面より二時期にわたる旧石垣（Ⅰ期・Ⅱ期石垣）が検出され、石垣基部の調査や石垣断面構造の記録化により、Ⅰ期からⅢ期までの石垣の変遷や構造を確認した。石材調査では各種の刻印や朱書、墨書などを多数検出し、矢穴や石材加工技術の変化も確認している。石垣は表面の「石積み」様式の変化とともに、背面の土木工法の変容が顕著であり、発掘調査で石垣背面の土木工事の痕跡を考古学的な手法によって層位的に精査し、盛土の重複関係や採集遺物の分析からみた石垣変遷を、文献調査との照合により大別している。築城期には、旧地形や中世山城「千代城」の縄張りを利用して斜面を切り土しながら石垣を構築（Ⅰ期）し、地震によりこの石垣が倒壊した後、築城期の石垣形状を一新する修復工事が行われて石垣が再構築（Ⅱ期）され、その後の地震によりこのⅡ期石垣も倒壊し、現存石垣に全面改築（Ⅲ期）されたとして検討を重ねている。（註7）

註1 『仙台下絵図』（寛文4年〔1664〕宮城県図書館蔵）や『青山公造制城郭木写之略図』（四代藩主綱村時代、17世紀後半（推定）宮城県図書館蔵）には本丸御殿の建物群が描かれ、『貞山公治家記録』にも大広間の記事が散見できる。建物群の考察については、佐藤巧「仙名城の建築」（仙台市教育委員会『仙名城』1967）・「仙名城館および周辺建物復元考」（仙台市博物館『調査研究報告第6号』1986）・伊東信雄「仙名城の歴史」・三原良吉「仙名城年表」（仙台市教育委員会『仙名城』1967）などがある。

註2 義山公治家記録、正保3年〔1646〕4月28日條

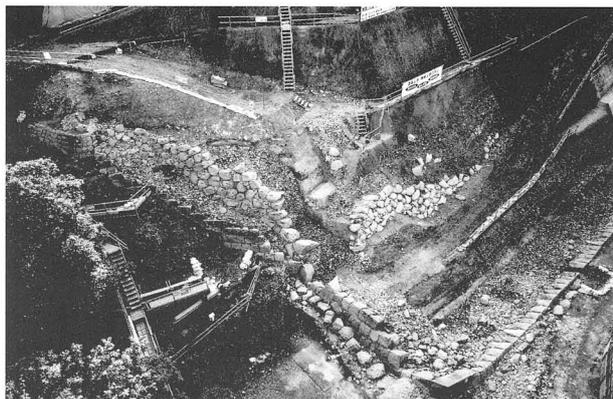
註3 貞山公治家記録、慶長5年〔1600〕12月24日條

註4 東北大学埋蔵文化財調査年報1～17（東北大学埋蔵文化財調査センター1985～2002）

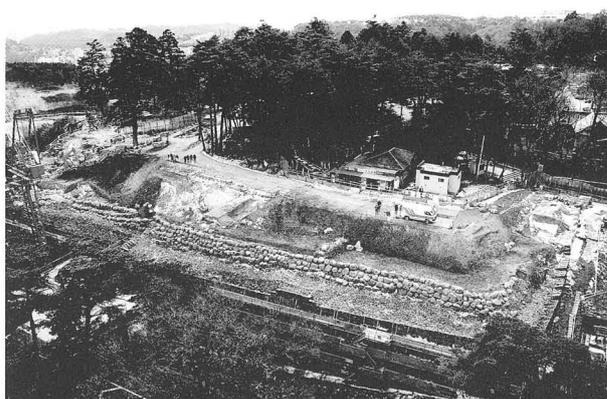
註5 発掘調査報告書『仙台城三ノ丸跡』（仙台市教育委員会1983）

註6 仙名城跡石垣修復等調査指導委員会（平成13年度に仙名城石垣修復工事専門委員会と改編）資料・議事録（仙台市建設局1997～2003）

註7 本丸1次発掘調査成果に係る主な参考文献 金森安孝「仙台城本丸跡の発掘調査」（『考古学ジャーナル442号』1999）・金森「仙台城本丸の発掘と出土陶磁」（『貿易陶磁研究No.19』1999）・金森/我妻仁「仙台城本丸跡 築城期及び修復石垣の発見」（『考古学ジャーナル456号』2000）・我妻「仙台城本丸跡石垣の背面構造と変遷」（『宮城考古学第2号』2000）・金森「仙台城本丸跡石垣修復に伴う発掘調査」（『日本歴史第626号』2000）・我妻「仙台城本丸跡石垣における階段状石列の構造と役割（予察）」（『宮城考古学第3号』2001）・金森/我妻「仙台城本丸跡Ⅲ期石垣の発掘調査－現存石垣の構築技術－」（『考古学ジャーナル474号』2001）・金森/根本光一「仙台城石垣の石材調査」（『考古学ジャーナル484号』2002）・伊藤隆「仙台城石垣の石材調査」（東北芸術工科大学『石垣普請の風景を読む』2003）・金森『仙台城本丸跡、1次調査 第4分冊 石垣図版編』（仙台市教育委員会 2004）



第6図 本丸北壁石垣北東角部
旧石垣（Ⅰ・Ⅱ期）検出状況（北東から）



第7図 本丸北壁石垣背面
階段状石列検出状況（北西から）

Ⅲ 調査計画と実績

平成17年度は、仙台北城跡遺構確認調査の第1次5ヵ年計画の5年次である。5ヵ年計画では、国指定史跡仙台北城跡の全体像を把握することを目的として、遺構の遺存状況、種類、規模、配置等の確認を目的とする遺構確認調査と、石垣の破損状況や石積みの特徴を確認していくことを目的とする石垣現況調査、測量調査を実施している。これまで4年次にわたる調査により、本丸大広間跡や巽櫓跡、本丸での遺構現況調査などを行ってきた。

第1表 これまでの調査実績

調査回数	調査地区	調査面積	調査期間
第1次	大広間跡（1次）	185㎡	平成13年9月17日～12月27日
第2次	清水門跡付近石垣	210㎡（立面）	平成13年11月30日～平成14年2月13日
第3次	大番土土手跡・御守殿跡・懸造跡	1,400㎡	平成14年5月20日～平成15年1月31日
第4次	巽櫓跡	110㎡	平成14年5月20日～8月31日
第5次	大広間跡（2次）	470㎡	平成14年8月5日～12月20日
第6次	仙台北城跡（全域）	約145ha	平成15年5月7日～8月8日
第7次	大広間跡（3次）	258㎡	平成15年8月4日～12月25日
第8次	登城路跡	58㎡	平成15年11月12日～12月25日
第9次	広瀬川護岸石垣	50㎡（立面）	平成15年12月9日～平成16年2月5日
第10次	大広間跡（4次）	397㎡	平成16年7月20日～12月24日
第11次	登城路跡・広瀬川護岸石垣	349㎡（立面）	平成16年12月18日～平成17年3月31日

今年度は、本丸大広間跡周辺および三の丸巽門跡周辺における遺構確認調査と石垣2箇所の測量調査を実施した。発掘調査費については総経費5,277万円、国庫補助額2,639万円との内示を受けたことから、以下の調査計画を立案した。

第2表 調査計画表

調査回数	調査地区	調査予定面積	調査予定期間
第12次	大広間跡（5次）	440㎡	平成17年5月26日～10月19日
第13次	三の丸堀跡（1次）	77㎡	平成17年11月1日～12月22日
第14次	中門北側・広瀬川護岸石垣	627㎡	平成18年1月16日～1月20日

これまで本丸では4次にわたる調査により、仙台北城本丸御殿の中心的建物である大広間の礎石跡や雨落ち溝跡などを検出し、大広間建物跡の位置および規模（東西33.5m、南北26.3m）を確認した。また、大広間の西側に位置する御成門跡の礎石や、そこから大広間跡に伸びる通路跡と考えられる石敷き遺構等を検出した。

第12次調査は、主に大広間跡北側周辺を対象とし、絵図に描かれた能舞台に関連する遺構の確認や本丸石垣解体以前の調査で検出された堀跡等の延長部分の確認等を目的として実施した。大広間跡の北側では礎石建物跡を1棟検出した。礎石は計4基がL字型に検出され、柱間は約1.5mである。また、この建物跡に伴い径5～30mmの玉石による石敷きが検出された。この礎石建物跡は、遺構の切り合い関係から大広間に先行するものと考えられる。大広間の遺構としては、礎石根固め跡を1基検出した他、雨落ち溝が藩政期において改修を受け、それと同時期に雨落ち溝に直交する暗渠状遺構が形成されるなど、大広間周辺における遺構の変遷が明らかとなった。遺物は瓦・磁器・陶器・金銅金具・銅釘などが出土した。

第13次調査は、三の丸巽門跡東側周辺の遺構確認を目的として実施した。巽門東脇土塁裾部の調査では、長沼へと続く石組側溝を検出した。また、長沼の南側に位置し明治時代末に埋没した堀跡の調査では、落ち際に暗渠状遺構を伴う堀の上端を一部確認した。遺物は瓦・磁器・陶器・鉄製品などが出土した。

第14次調査は、広瀬川護岸石垣（大橋北側、南側）、中門北側石垣の3箇所について石垣の測量を行い、石積状況を調査した。中門北側石垣は、今年度修復工事を行った南側石垣とは異なる切石積みの石垣である。広瀬川護岸石垣は、大橋の南側で約260mにわたり築かれた野面積みの石垣であるが、第9次調査により石垣長にして約20m、第11次調査により約30mを測量済みである。今回は、引き続き約70mを測量調査した。

第3表 調査実績表

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間
第12次	大広間跡（5次）	446㎡	平成17年5月26日～10月19日
第13次	三の丸堀跡（1次）	86㎡	平成17年11月1日～12月22日
第14次	中門北側・広瀬川護岸石垣	627㎡	平成18年1月16日～3月17日



第8図 仙台城跡遺構確認調査・調査区位置図（1/5,000）

IV 第12次調査

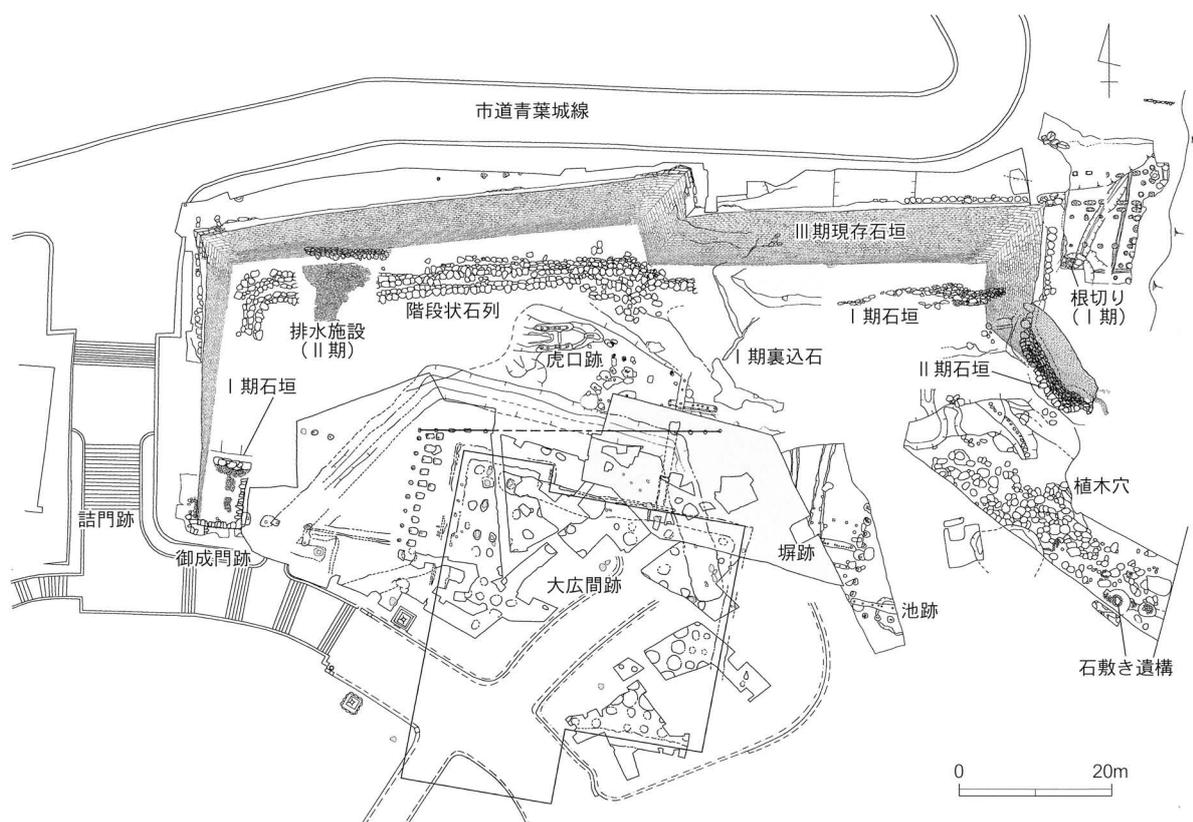
1. 調査目的及び調査経過

第12次調査は、本丸大広間跡の北側周辺を主な対象として、平成17〔2005〕年5月26日から同年10月19日まで遺構確認のための発掘調査を実施した。調査面積は、青葉山公園として管理されている仙台市有地内の440㎡である。大広間跡に関する調査としては第5次にあたる。

調査目的は、①大広間北側において、寛文4（1664）年製作の「仙台北城下絵図」等に描かれた能舞台に関する遺構の確認、②大広間北東側周辺における遺構確認の2点である。この内②については、本丸石垣解体前の調査で検出された柱列等の延長部分を確認することが主な目的であったが、この対象となる調査区東半部については、ほぼ攪乱を除去し、その断面観察を行うに止め、来年度以降、再度調査を実施する事とした。

調査区の設定や調査前の現況写真撮影、遺物の表面採集等の後、5月26日から安全フェンスを設置し、5月30日から重機による表土の除去作業を開始した。6月1日から人力による遺構面の検出作業を開始した。電気ケーブルや水道管を埋設した際の掘り方などの攪乱部分の除去作業に伴い、その壁面および平面の精査を行いながら明治時代以降の整地層であるⅡ層を除去し、江戸時代の盛土層または整地層であるⅢ層の上面で遺構検出作業を行った。

大広間雨落ち溝跡北辺の北3mの箇所礎石建物跡を1棟検出した。礎石は計4基がL字型に検出され、柱間は1.48～1.54mである。礎石の周囲には、粘質土の上面に径5～30mm程度の玉石が敷かれており、検出層位やその平面分布から礎石建物跡に伴うものと考えられる。この玉石敷きと雨落ち溝跡掘り方の切り合い関係から、礎石建物は大広間跡に先行するものと考えられる。大広間に関連した成果としては、礎石根固め跡を1基検出した他、雨落ち溝が藩政期において改修を受け、それと同時期に雨落ち溝跡に直交する暗渠状遺構が形成されるなど、大広間周



第9図 仙台北城跡北部・大広間跡調査区位置図 (1/1,000)

辺における遺構の変遷が明らかとなった。

第12次調査は、平成17年3月23日の第12回仙台北城跡調査指導委員会において、調査箇所や目的、方法について了承を得て実施した。



第10図 調査前現況（東から）



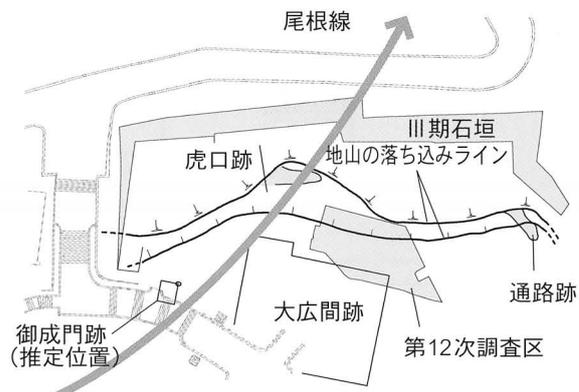
第11図 調査前現況（北西から）

また平成17年7月22日に開催され

た第13回仙台北城跡調査指導委員会では、調査成果の中間報告を行い、了承を得た。調査の進展に伴い、8月9日に宮城県、8月23日に文化庁、9月5日に仙台北城跡調査指導委員会委員の現地指導を受けた上で、9月15日に記者発表、9月17日に現地説明会（324名参加）を実施した。10月3日、10月7日に再び仙台北城跡調査指導委員会委員の現地指導を受けた後、10月20日には調査区の埋め戻しやフェンス撤去等の作業を終え、調査箇所を現状に復した。平成18年3月17日に第14回仙台北城跡調査指導委員会を開催し、調査成果の最終的な確認を行った上で、本報告書を刊行するに至った。

2. 旧地形及び基本層序

大広間周辺の原地形をみると、その北側前方に中世千代城の虎口跡が検出された尾根の張り出しがある（第12図）。この尾根線は、御成門跡付近から大広間跡の北西角部を通り北東方向へ延びるもので、大広間のある平場の地形は、本来東へ向けて緩やかに傾斜していたものと考えられる。実際、近世の整地層は、尾根上にあたる大広間跡北西角部ではほとんど見られず、東側に、より厚く堆積している。第12次調査区は、大広間跡の北側及び北東側に位置しており、調査区の北端は大規模な石垣工事に伴う盛土以前の、自然地形の落ち際にあたる。



※虎口跡・通路跡は千代城期の遺構

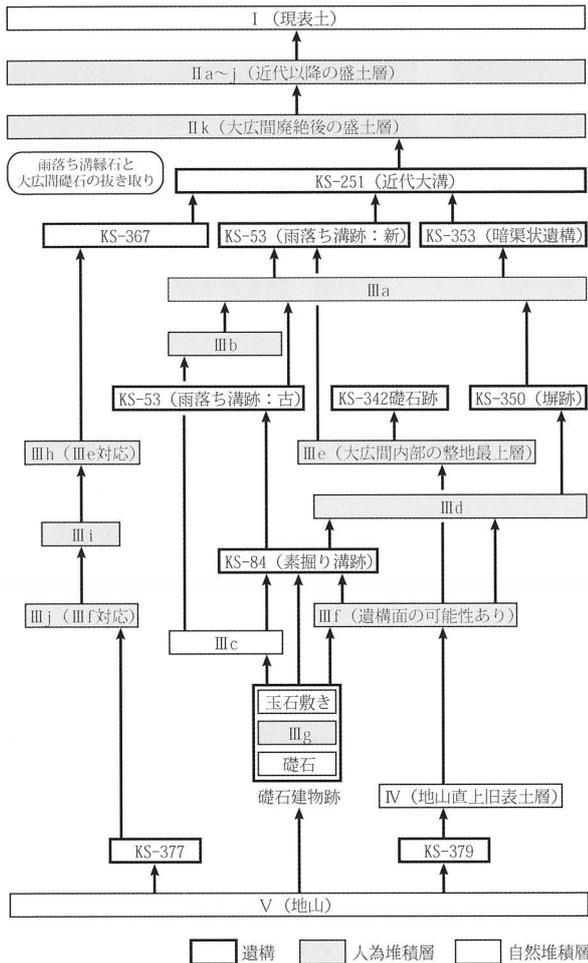
第12図 本丸跡北部平面模式図（旧地形と検出遺構）

基本層は、Ⅰ層（現表土）、Ⅱ層（近代以降の整地層）、Ⅲ層（近世の整地層）、Ⅳ層（地山直上の旧表土層）、Ⅴ層（地山）に大別される（第4表、第13図）。以下、Ⅱ層より概要を記す。

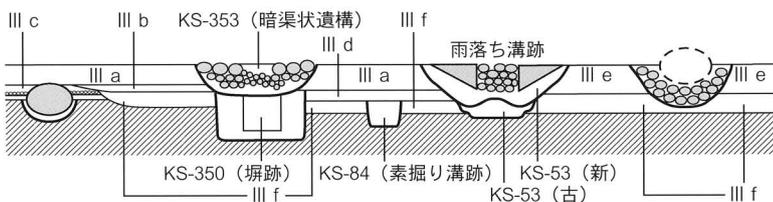
Ⅱ層はa～k層に細分した。このうちⅡa～Ⅱj層は、KS-251（近代溝状遺構）埋没後の凹地に堆積した土層で、黄褐色の人為堆積層と褐色の自然堆積層とが互層をなしている。Ⅱk層は、大広間の廃絶からKS-251の掘削及び埋没の

第4表 基本層序

遺構・層位	土色		土質	土性		備考
	土色No	土色		粘性	しまり	
Ⅰ	10YR3/2	黒褐色	シルト	無し	無し	表土層
Ⅱa～i	10YR5/6	黄褐色	砂質シルト	有り	有り	Ⅱj層と同様の自然堆積層をラミナ状に4枚含む
Ⅱj	10YR4/4	褐色	シルト質砂	無し	有り	KS-251埋没直後の旧表土層
Ⅱk	10YR5/8	黄褐色	シルト質粘土	有り	有り	径1～2cmの円礫を少量含む 雨落ち溝縁石抜き後の盛土
Ⅲa	10YR4/4	褐色	砂質シルト	有り	有り	石敷き起源の円礫及び径1～3cmの凝灰岩粒を多量含む
Ⅲb	10YR4/6	褐色	粘質シルト	有り	有り	径1～3cmの円礫を少量含む 地山ブロックを含む
Ⅲc	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂質シルト	有り	有り	石敷き直上の自然堆積層
Ⅲd	10YR4/4	褐色	砂質シルト	有り	有り	地山土を径5～15mmの粒状に多量含む KS-353より東側に分布
Ⅲe	7.5YR4/6	褐色	粘質シルト	有り	有り	径1～3mmの凝灰岩粒を含む 大広間跡を中心に分布
Ⅲf	7.5YR4/6	褐色	粘質シルト	有り	有り	地山土を1～5cmのブロック状に多量含む 調査区東半に分布する地山直上整地層
Ⅲg	10YR5/6	黄褐色	シルト質粘土	有り	有り	石敷き直下の整地層 礎石設置後の化粧土か 年代測定（C-1～3）
Ⅲh	7.5YR4/6	褐色	粘質シルト	有り	やや有り	Ⅲc層に類似 大広間北東部の北側のみ分布
Ⅲi	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	無し	有り	径1～2mmの凝灰岩粒をやや多く含む 分布はⅢh層と同じ
Ⅲj	10YR4/4	にぶい黄褐色	砂質シルト	有り	有り	径1～3cmの礫を多く含む 地山ブロックをやや多く含む 地山直上整地層 Ⅲf層対応
Ⅳ	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘質シルト	有り	無し	地山土を径5～10mmの粒状に少量含む KS-378の上を覆う 旧表土か
Ⅴ	10YR6/4	にぶい黄褐色	シルト質粘土	有り	有り	鉄分をまだら状に含む 地山土



第13図 層序概念図



第14図 断面模式図 (石敷き・堀跡・暗渠状遺構・雨落ち・根固め)

IV層はV層(地山)上面に堆積した旧表土層とみられ、その直下からKS-379が検出された。この遺構は、KS-377と共にV層上面から掘り込まれたものであるが、礎石建物跡との直接的な前後関係については不明である。

3. 検出遺構

(1) 大広間跡及び関連遺構

ここでは、大広間跡の軸線を基軸として構築された遺構群を一括した。大広間礎石跡(KS-342)、雨落ち溝跡(KS-53)、そして関連性が強いと思われる素掘り溝跡(KS-84)、堀跡(KS-350)、暗渠状遺構(KS-353)について記述する。

・KS-342礎石跡 上々段ノ間西辺の北側延長線上に位置し、落縁の最も外側の柱を支えた礎石跡である。礎石は無く、根固めのみが検出された。検出面はIIIe層上面である。平面形は、一部攪乱に切られるがほぼ円形である。規模は、東西112cm以上、南北100cm以上、深さ23cm以上である。根固めは、粘土質の埋土に径5~10cmの円礫が充填されている。礎石抜き取り後の埋土中からは銅釘が2点出土している。また、その直上にはIIk層が堆積している。

過程を考える上で鍵となる層である。その分布はほぼ雨落ち溝跡の範囲に重なり、雨落ち溝の縁石と大広間の礎石が抜き取られた後に堆積している。また、IIk層はKS-251の埋没直後に堆積している。

III層はa~j層に細分した。IIIa層は近世期の最も新しい盛土層で、その上面はKS-53(雨落ち溝跡:新)やKS-353(暗渠状遺構)の検出面である。KS-251(近代溝状遺構)が掘られ、II層が堆積するまでは、この面が地表面であったと考えられる。IIIe層は大広間跡内部の整地最上層で、KS-53(新)に切られるがKS-53(古)との前後関係は不明である。大広間跡北東側周辺に分布するIIIh層は、このIIIe層に対応する。IIId層は、その上面がKS-350(堀跡)の検出面である。IIId層とKS-53(古)の前後関係は不明だが、いずれもKS-84(素掘り溝跡)より新しい。また、IIId層は大広間跡の外側に分布しているため、IIIe層との前後関係は不明である。

III f層は、少なくとも大広間跡内部においては地山直上に堆積する最古の整地層である。来年度以降の調査対象とした調査区東半の断面観察では、このIII f層上面に、根固め跡等の可能性がある円礫集中箇所があり、III e層整地以前における古い遺構面の存在が推測される。III j層は、III h層と同様の分布をもちIII f層に対応する。III g層は礎石建物跡に伴う粘土質の整地層で、この上面に玉石が敷かれている。III f層は玉石敷きの一部が除去された後に堆積している。また、III c層は玉石敷きの直上に堆積した自然堆積層である。

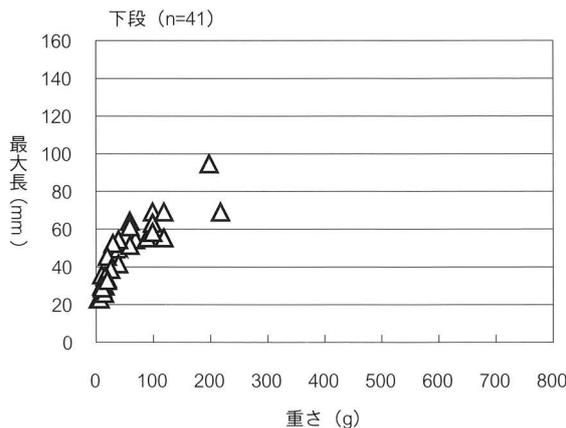
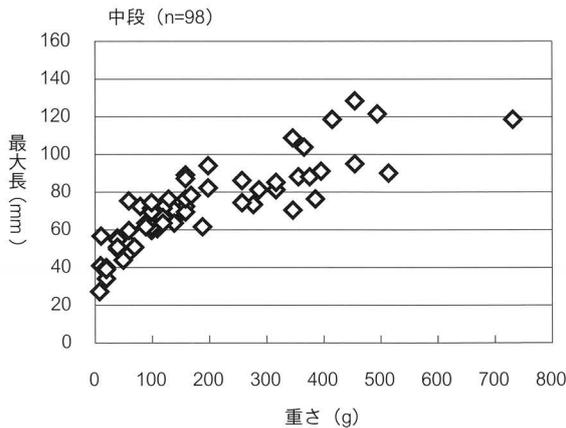
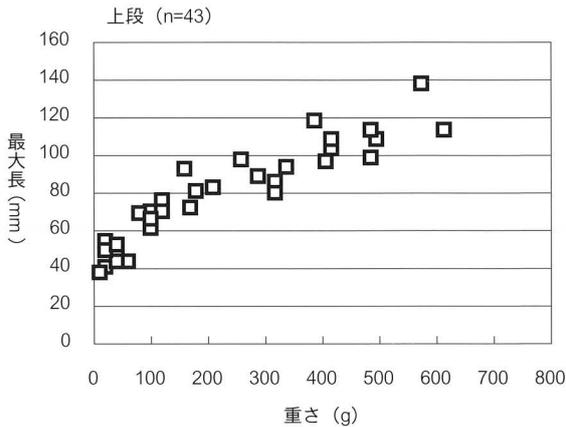
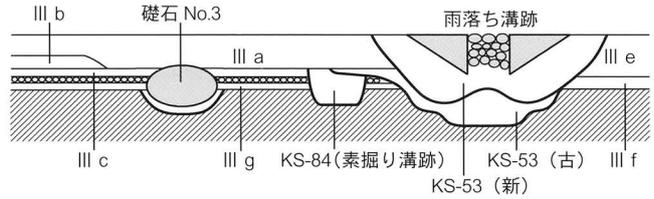
III f層は、玉石敷きの一部が除去された後に堆積している。また、III c層は玉石敷きの直上に堆積した自然堆積層である。

IV層はV層(地山)上面に堆積した旧表

・KS-53雨落ち溝跡 今回の調査では、北辺の東半部を検出した。縁石はほとんど抜き取られており、両縁石の間に充填されていた玉石のみが東西方向に帯状をなして検出された。今回の調査では、雨落ち溝跡が藩政期に改修を受け、少なくとも2段階の変遷を示す事が確認された。以下、古段階、新段階の順に記述する。

古段階の雨落ち溝跡は、掘り方の北側ではⅢc層上面を掘り込み面とするが、南側ではⅢf層を切るもののⅢe層との関係は不明である。上端幅は180cm以上、深さ約30cmで、断面形は掘り方の中央部が一段低い形状である。埋土は2層に分かれ、いずれも地山土を多く含みⅢf層に類似している。遺物は、埋土最下層より飾瓦（鬼瓦?）が1点出土している。また、埋土上層から加工痕のある板状の石材が、平坦面を水平にして検出され、古段階における縁石の可能性がある。この石材上面と石敷き遺構上面のレベル差は、2～3cmと近接している。

第15図 南北断面模式図（石敷き・素掘り・雨落ち）



第16図 KS-53礫サンプル最大長・重さ相関グラフ

新段階の掘り方は、溝跡の北側ではⅢa層上面、南側ではⅢe層上面を掘り込み面とする。両掘り込み面のレベルはほぼ同じである。上端幅は約200cmで深さは23cmである。断面形は掘り方の中央部が一段高い形状で、一度縁石が抜き取られた後据え直されたものと推測される。埋土は1層で、ややしまりの弱いシルト質の土層である。遺物は、瓦片のほか木端石が多く出土している。

今回の調査では、雨落ち溝の構築時に入れられた玉石について、上層と下層でその大きさに違いが見られるか否かを検証するため、玉石のサンプリングを行った。サンプリングは、断ち割りを行った約40cm角の範囲から上、中、下の3段に分けて実施し、それぞれ最大長及び重量を計測した。分析の結果、下段では重さ120g、最大長70mm以下の小形礫が多く、対して上段では分布の集中が見られず、より大型の玉石を一定量含んでいる事が明らかとなった。また中段は上段に近い分布範囲をみせるが、下段と同様小形礫の集中が見られ、上段から下段に向けて、より小形の礫が増加してゆく傾向が指摘される（第16図）。

・KS-84素掘り溝跡 KS-84は、大広間雨落ち溝跡と同形の平面プランを持つ素掘りの溝跡で、これまで大広間跡西辺部及び北辺部で確認されている。今回の調査では、北辺の一部を検出した。遺構の切り合いでは、雨落ち溝跡に先行し、礎石建物跡に伴う石敷きよりも新しいことが確認された。検出面はⅢf層・Ⅲc層上面である。規模は、上端幅23cm、下端幅16cm、深さ22cm

今回の調査では、雨落ち溝の構築時に入れられた玉石について、上層と下層でその大きさに違いが見られるか否かを検証するため、玉石のサンプリングを行った。サンプリングは、断ち割りを行った約40cm角の範囲から上、中、下の3段に分けて実施し、それぞれ最大長及び重量を計測した。分析の結果、下段では重さ120g、最大長70mm以下の小形礫が多く、対して上段では分布の集中が見られず、より大型の玉石を一定量含んでいる事が明らかとなった。また中段は上段に近い分布範囲をみせるが、下段と同様小形礫の集中が見られ、上段から下段に向けて、より小形の礫が増加してゆく傾向が指摘される（第16図）。

である。断面形は、底面がほぼ平坦で壁がほぼ垂直に立ち上がる長方形を呈する。埋土は2層に別れ、いずれも地山ブロックを含む人為堆積層である。遺物の出土は無いが、玉石敷きに由来する小礫が多量出土している。また、埋土の堆積環境を明らかにするため土壌サンプルの珪藻分析を行った（5. 理化学分析参照）。

・KS-350塀跡 KS-350は、雨落ち溝跡に直交し南北方向に延びる溝跡であるが、北側延長部分については本丸石垣解体前の調査で既に検出されており、その際、溝跡内部より柱列と思われるピット列が検出されたことから塀跡と考えられる遺構である。また、この調査で、本遺構がⅢ期石垣（現存石垣）の盛土に切られている事が確認されている。

今回の調査では、中間部分を大きくKS-251（近代溝状遺構）に切られるものの、約11.8m分を検出した。検出面はⅢd層上面である。遺構の規模は、上端幅約110cm、下端幅約100cm、深さ約55cmである。底面は、若干凹凸はあるものの概ね平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は4層に分かれるが、中央に幅約35cmの柱状の立ち上がり確認された。この部分より瓦片が出土している。

・KS-353暗渠状遺構 KS-353は、KS-350廃絶後その直上につくられた暗渠状遺構である。KS-350と同様雨落ち溝跡に直交し南北方向に延びるが、暗渠をつくる礫はKS-251の直前で見られなくなる。検出面は、雨落ち溝跡（新段階）と同じⅢa層上面である。掘り方は、幅約90cm、深さ約30cmで確認された長さは370cmである。断面形は皿状を呈する。掘り方内に一度土を入れた後、径10～18cmの円礫を帯状に2列配し、間の一段低い部分に径3～5cmの小形礫を充填している。遺物は、鉄釘、古銭などが出土している。また、一段低い部分には土層の堆積がみられ、堆積時における水流の有無などを調べるため土壌サンプルの珪藻分析を行った（5. 理化学分析参照）。

・KS-367暗渠状遺構 KS-367は、雨落ち溝跡の北約4.5mで検出された東西方向に延びる暗渠状遺構である。大広間跡との直接的な関係は不明であるが、雨落ち溝跡北辺に並行しており、KS-353と同様、大広間に関わる排水施設である可能性が考えられる。検出面はⅢh層上面である。掘り方の規模は、上端幅80cmで深さが5cmと浅く、断面形は皿状を呈する。埋土上部には径5～15cmの円礫が帯状に配されており、その中には瓦片の混入が見られる。

（2）礎石建物跡

礎石は4石がL字形に検出され、建物跡の周囲には玉石敷きが伴う。最も南側の礎石は、大広間雨落ち溝跡の北3mに位置し、礎石建物跡の東西軸線（礎石No.1～3心々ライン）は、大

第5表 礎石観察表

No.	長径 (cm)	短径 (cm)	上面レベル (m)	備考
1	28.5	26.5	115.572	やや黒味を帯びた灰色 安山岩質
2	33.5	26.5	115.574	白色 多孔質
3	38.0	31.0～	115.513	やや青味を帯びた灰色
4	48.0	29.0	115.494	灰白色 安山岩質

大広間跡の東西軸線から北へ20°振れる。礎石の柱間は西から1.48m、1.48m、1.53mである。礎石の平面形は4石とも楕円形を呈し、大きさは最大長で28.5～48.0cmと、ばらつきが認められる（第5表）。また、上面のレベルはNo.1、2に比べNo.3、4が6、7cm低い。4石とも平坦面をもつ、やや扁平な石材であるが、表面に柱の痕跡などは確認できなかった。なお、No.1については、上面がやや南側に傾いている点や、南側の攪乱壁面に見える礎石掘り方との位置関係から原位置よりも、やや北側にずれた状態であると考えられる。

遺構の構築順序について記述する。礎石は、地山（V層）上面から掘り込まれた掘り方内に直接置かれており、根固めなどは確認されなかった。礎石の設置後、その周縁部に直接して層厚2～5cmの粘質土（Ⅲg層）が貼られている。さらに、その粘質土の上面に径5～30mmの玉砂利が敷かれており、玉砂利の一部は礎石の周縁を覆うように検出された。玉砂利の分布範囲は礎石建物跡の内外に及ぶが、建物跡内部の玉砂利については個々のレベル差が大きくⅢa層土との混在が認められることから、二次堆積したものと判断した。建物跡外側の敷石は、南側で礎石列の心々ラインから幅1.5m以上、東側で同様に幅0.9mに分布する。なお、礎石No.3の東約50cmの所では部分的に石敷きが検出されず、その箇所Ⅲg層とⅢf層の切り合い関係が認められたことから、Ⅲf層の堆積に伴い石敷きの一部が移動したものと判断した。また、Ⅲc層は石敷きを直接覆う自然堆積層であり、礎石建物跡内部まで分布する

が、建物廃絶との時間的前後関係は不明である。ただしⅢc層が堆積した時点で、石敷きは完全に覆われるが、礎石は埋まり切らずに上部1/4程が露出していたものと考えられる。

今回の調査では、他の遺構との切り合い関係から、①石敷き→②KS-84（素掘り溝跡）→③KS-53（雨落ち溝跡、古段階）の変遷が確認された。遺物は、Ⅲg層上面にやや食い込む状態で石敷き範囲の東端から接合面を持つ瓦片を1点検出した（第31図19）。

礎石建物跡の規模に関連して、礎石の延長線上に同様の柱間でピットを西側に2基、北側に1基検出した。KS-376は、礎石No.1の西1.4mに位置し、検出面は地山（V層）上面である。平面形は径50cmの円形である。KS-372は、KS-376の西1.5mに位置し、検出面は地山上面である。北側2/3程を攪乱に切られており平面形は不明であるが、規模は東西約60cmである。なお、これより西側から同様のピットは確認されなかった。KS-375は、礎石No.4の北1.4mに位置し、検出面はⅢg層上面である。平面形は径40cmの円形である。礎石建物跡の北側では多数のピットが検出されたが、礎石列の延長線上で近い柱間の遺構はKS-375のみである。これより北側ではKS-251（近代溝状遺構）に切られるため、関連遺構の存在は確認できなかった。また、礎石No.3の東1.5mの所で礎石と思われる石材が1基検出されたが、Ⅱ層上面から掘り込まれた遺構（KS-346）からの出土であり、KS-346自体も礎石列の延長線より南に40cm程ずれる事から、原位置を示すものではない。しかし石材の平面規模は32×25cmで礎石No.2に近く、石質は安山岩質で礎石No.1、4と同様のものである。これらから礎石建物跡の規模は、東西で最大4間、南北で2間以上になるものと考えられる。

また、この建物跡の年代に関して、Ⅲg層より検出した炭化物3点について放射性炭素年代測定を実施した。その結果、補正¹⁴C年代測定値BP320±40年、270±40年、270±40年、暦年代補正值では概ね16～17世紀前半の年代が得られた。

（3）その他の検出遺構

ここでは、主に礎石建物跡の北側及び西側で検出された性格不明のピットや土坑について一括した。全体的にピットは礎石建物跡の北側に多く、土坑は調査区西端に多い傾向がある。なおKS-357、377、379は地山上面から掘り込まれた遺構であり、特にKS-379についてはIV層直下に見られることから、中世に遡る可能性も考えられる。また、近代遺構についてもここで記述する。

・KS-357 調査区を東西に走る排水溝攪乱（以下、東西攪乱と略す）とKS-251（近代溝状遺構）に囲まれた範囲の中央やや南よりで検出された。掘り込み面はV層上面である。本遺構の直上にはⅢg層が堆積しており、礎石建物跡の構築時またはそれ以前に遡る可能性がある。平面形は円形で、規模は径20cm以上になると推定される。埋土は橙色の粘質土を主体とし、他に同様の遺構は確認されていない。遺物の出土はない。

・KS-377 KS-353（暗渠状遺構）の東約5mで、攪乱の壁面から断面のみ検出された。掘り込み面は地山上面で、直上にⅢi層が堆積する。平面形は不明で、規模は長さ90cm以上、深さ10cmである。埋土は粘性の低い砂質シルトで、粘質土を主体とする礎石掘り方の埋土やⅢf層とは異なる。

・KS-379 KS-353（暗渠状遺構）の東脇で検出された。掘り込み面は地山上面で、直上にIV層（地山上面の旧表土層）が堆積する。平面形は不明で、規模は長さ90cm以上、深さ50cm以上である。埋土はKS-377と同様である。遺物の出土はない。

・KS-338・339・351 東西攪乱の底面で確認された。掘り込み面は不明である。平面形は径15～25cmの円形で、1.4m間隔で直線状に並び、いずれも柱痕跡が確認されたことから柱列の可能性が考えられる。なお、柱列の軸線は雨落ち溝跡北辺に並行する。

・KS-390・391・392・393 近代溝状遺構の北側で検出された柱列である。本丸石垣解体前の調査で既に確認されていたものである。この軸線は本丸現存石垣（Ⅲ期石垣）の天端ラインに並行しており、昨年度の10次調査区東部から検出された東西柱穴列に連続するものと考えられる。検出面はⅢ層上面で、平面形は径30～50cmの円形または不整形である。柱間は約1.8mである。

・KS368・374 東西攪乱に半分以上切られる形でその南側より検出された。検出面はⅢg層上面である。平面形は不明であるが、規模はそれぞれ径50cm以上と推定される。これらが検出された部分には石敷きの分布が無く、礎石建物跡との関係は不明である。

・KS-359・378 礎石No.4の東約1mで検出された遺構である。検出面は共にⅢg層上面であるが、KS-378は石敷きを切っている。KS-359の平面形はやや東西に長い楕円形で、規模は長軸115cm、短軸70cm、深さ170cmである。断面形は碗形を呈する。KS-378の平面形は不整形で、規模は長軸70cm、短軸52cmである。いずれも遺物の出土は見られなかった。

・KS-327 東西攪乱とKS-251に囲まれた範囲から検出された浅い土坑である。なお、以下KS-373までは同じ範囲からまとめて検出された遺構群である。KS-327の検出面はⅢ層上面である。平面形は長方形で、規模は長軸85cm、短軸72cm、深さ8cmである。埋土は1層で、5～10cmの円礫を多く含む。

・KS-330 検出面はⅢg層上面である。平面形は円形で、規模は径18cmである。円礫を多く含む。

・KS-332 検出面はⅢg層上面である。ベルトにかかり部分的な検出ではあるが、平面形は不整形で、規模は径35cm程度であると推定される。埋土は地山起源の白色粘土を主体とする。円礫を少量含む。

・KS-333 検出面はⅢg層上面である。平面形は楕円形で、規模は長軸30cm、短軸28cmである。

・KS-334 検出面はⅢ層上面である。平面形は楕円形で、規模は長軸43cm、短軸35cm、深さ30cmである。円礫を多く含む。

・KS-335 検出面はⅢ層上面である。平面形は楕円形で、規模は長軸46cm、短軸39cm、深さ15cmである。円礫を少量含む。また、埋土上部から金属製の網状の遺物が出土しており、近代以降に属する可能性がある。

・KS-336 検出面はⅢ層上面である。平面形は楕円形で、規模は長軸42cm、短軸39cmである。円礫を多く含み、瓦片も少量出土している。また、円礫には被熱したのが見られる。

・KS-337 検出面はⅢc層上面である。平面形は円形で規模は長軸53cm、短軸37cm以上になると推定される。

・KS-345 検出面はⅢg層上面である。平面形は円形で、規模は径45cmである。南寄りに径25cmの柱痕跡が見られる。埋土は地山土を主体とし、径5cm程度の円礫を少量含む。

・KS-348 検出面はⅢa層上面である。平面形は楕円形で、規模は長軸67cm、短軸50cm以上と推定される。

・KS-371 検出面はⅢg層上面である。平面形は円形で、規模は径40cm、深さ15cmである。

・KS-373 検出面はⅢg層上面である。ほぼ断面のみの検出であり平面形は不明である。深さは10cm以上である。直上にⅢc層が堆積する。

・KS-354・355 KS-251に切られる形で、その東側より検出された土坑である。検出面はⅢ層上面である。KS-354がKS-355を切る。KS-354の平面形は楕円形で、規模は長軸140cm以上、短軸100cm、深さ30cm以上である。KS-355の平面形は不明である。規模は、長軸258cm、短軸216cm以上、深さ140cmと非常に大きい。埋土は、いずれも地山起源の白色粘土ブロックを多量に含む人為堆積物で、一度に埋没したのと考えられる。

・KS-328 KS-251に切られる形で、その南側より検出された遺構である。検出面はⅤ層上面である。平面形は不明で、規模は長軸130cm以上、短軸31cm以上である。

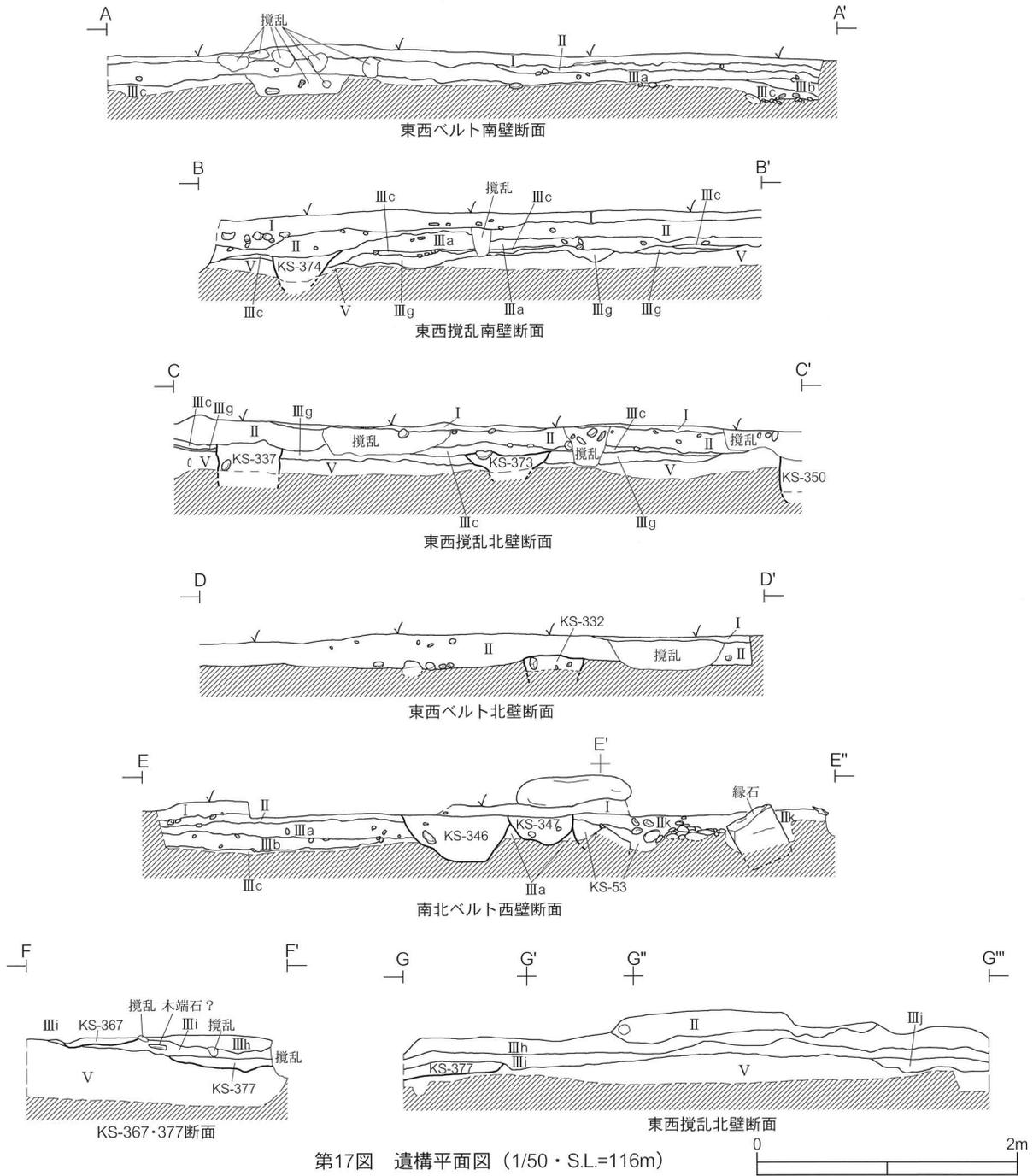
・KS-358 調査区南西部より検出された。なお、以下KS-363まで同様の箇所から検出された遺構群である。検出面はⅤ層上面である。平面形は、南側を攪乱に切られるが調査区南壁で埋土が確認されており、南北方向に延びる溝状の遺構であったと考えられる。規模は、上端幅95cmで長さは140cm以上、深さ23cmである。埋土はⅢa層に類似し

た砂質シルト層で円礫を多量含んでいる。

- ・KS-370 検出面はV層上面である。KS-369に東側を大きく切られており平面形は不明である。規模は長軸105cm以上である。埋土は地山ブロックを多く含む砂質シルトで、径5～15cmの円礫の集積が見られる。
- ・KS-369 検出面はV層上面である。平面形は不整形円で、規模は径55cm以上である。KS-364に切られる。円礫を多量含む。
- ・KS-364 検出面はV層上面である。直上にⅢcが堆積する。南北方向に延びる溝状の遺構で、規模は上端幅120cm、長さ150cm以上で、深さ33cm以上である。KS-365に切られる。埋土は地山起源の粘土ブロックを含み、円礫を多量含む。
- ・KS-365 検出面はV層上面である。直上にⅢcが堆積する。平面形は不明で、規模は長軸180cm以上、短軸150cm以上、深さ80cm以上で、大型の土坑と考えられる。KS-366に切られる。瓦片を含む。
- ・KS-366 検出面はV層上面である。直上にⅢcが堆積する。平面形は不明で、規模は長軸76cm以上、短軸75cm以上、深さ70cm以上である。埋土は褐色の砂質シルトでKS-369に類似する。径5～10cmの破碎礫を多量含む。
- ・KS-360 検出面はV層上面である。平面形は楕円形で、規模は長軸77cm、短軸70cm以上である。埋土は地山起源の粘土ブロックを多量含む。
- ・KS-361 調査区西壁際で約1/2を検出した。検出面はV層上面である。平面形は不明で、規模は長軸43cm、短軸27cm以上である。埋土は褐色の粘質土で地山土を少量含む。
- ・KS-362 KS-251の壁面で検出された。平面形は円形で、規模は径23cmである。
- ・KS-363 東西攪乱の底面で検出された。検出面はV層上面である。平面形は楕円形で、規模は長軸24cm、短軸21cmである。
- ・KS-384 調査区北東角部より検出された。検出面はV層上面である。南側半分をKS-251に切られており、平面形は不明である。規模は長軸130cm、短軸90cm以上、深さ80cmである。底面より長軸58cm、短軸36cmの平坦な河原石が確認されており、柱穴の可能性が考えられる。
- ・KS-387～389 検出面はV層上面である。平面形は楕円形及び円形で、規模は順に径50、30、18cmである。

(4) 近代遺構

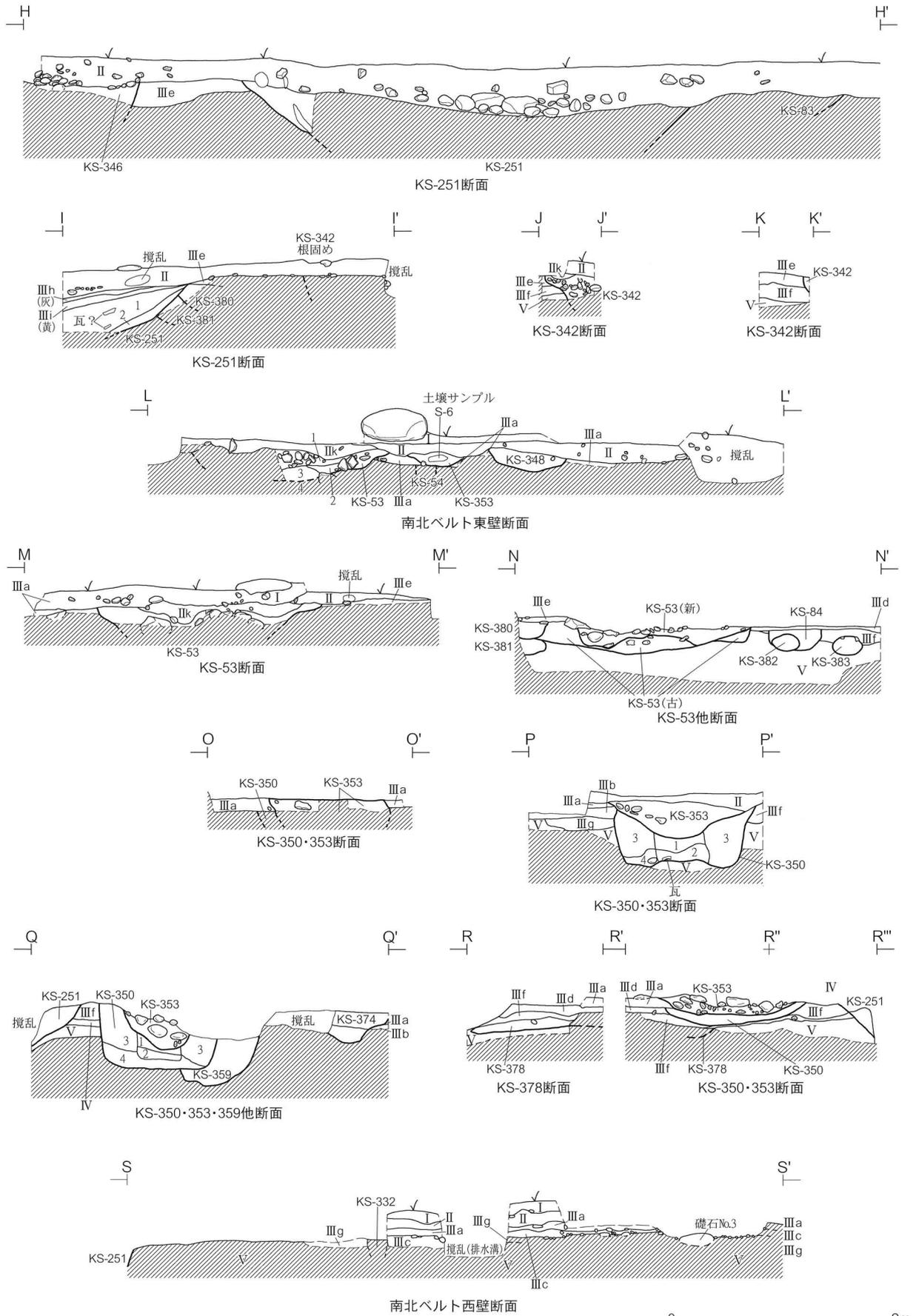
- ・KS-251 大広間跡を一部壊しながらその北側にみられる大規模な溝状の遺構である。検出面はⅢ層上面である。これまでの調査成果から、全長は約90mに及び全体形は両側が開いた「コ」字状をなす。規模は上端幅4m、下端幅1mで深さは約1.6mである。埋土は7層に分かれるが、このうち5～7層は底面および壁面に薄く堆積した自然堆積層である。その後、人為堆積層である1～4層により、比較的短期間で埋没したものと考えられる。なお、大広間雨落ち溝跡と交わる部分では、埋土直上にⅡk層の堆積が確認されている。Ⅱk層は大広間の礎石や雨落ち溝の縁石を抜き取った後、その窪みを埋めた盛土である。遺物は、鉄釘、銅釘、瓦、陶磁器などが出土している。このうち特に注目されるのは、底面近くから出土した2点の磁器皿である。その特徴から幕末から明治時代前半に属する。
- ・KS340 礎石建物跡の礎石No.1とNo.2の中間部分から検出された焼土遺構である。検出面はⅢa層上面である。平面形は楕円形で、規模は長軸112cm、短軸65cm、深さ30cmである。壁面は1～2cmの厚さで焼土化している。埋土中には炭化物層がみられる。遺物は江戸式の軒椀瓦や幕末～明治時代以降と思われる磁器碗が出土した。
- ・KS-341 KS-340の南1mで検出した焼土遺構である。平面形は楕円形で、規模は長軸110cm、短軸60cm、深さ14cmである。壁面は1～2cmの厚さで焼土化している。埋土中には多量の礫、炭化物がみられる。遺物は磁器碗が出土した。



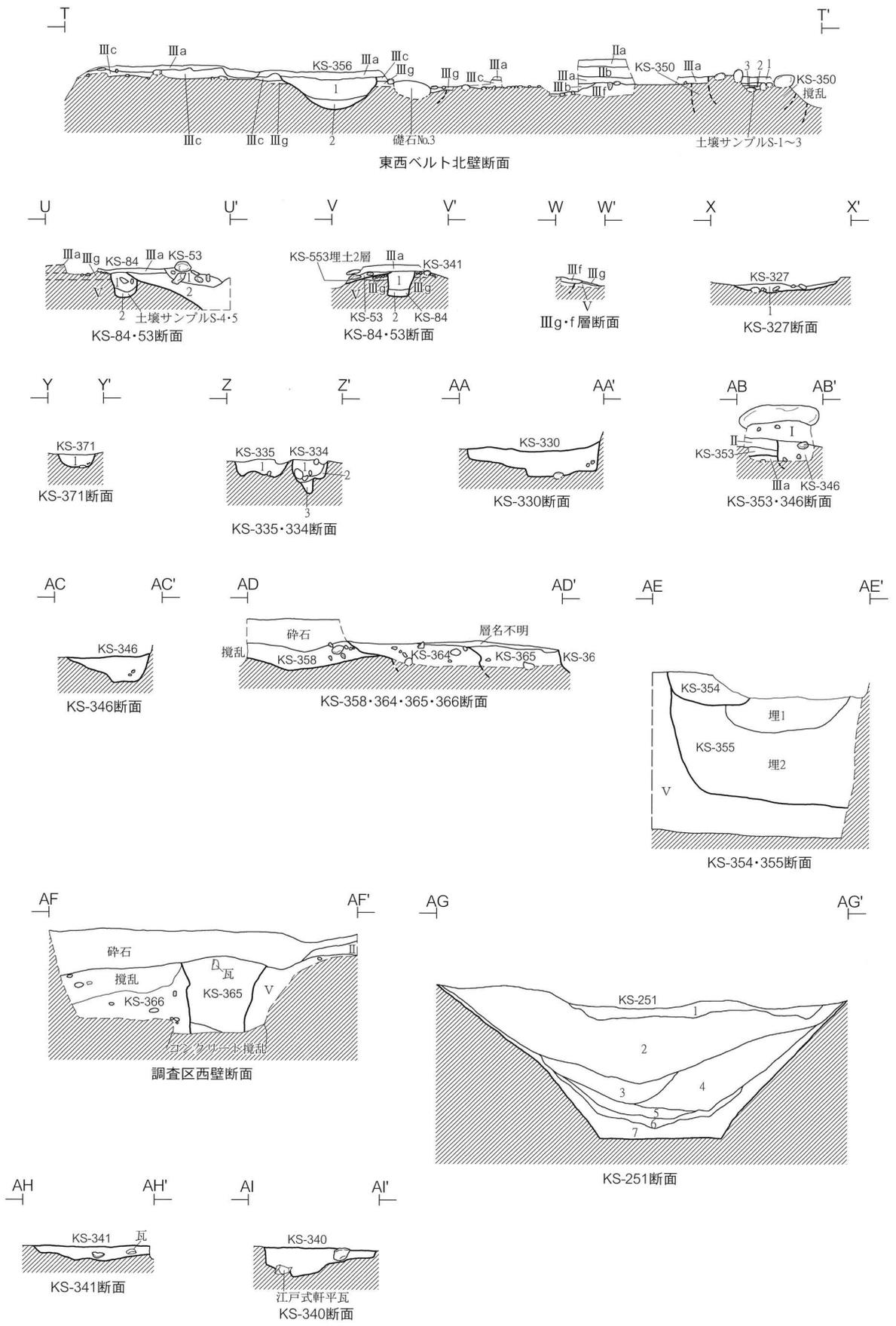
第17図 遺構平面図 (1/50・S.L.=116m)

第6表 基本層序

遺構・層位	土 色		土質	土 性		備 考
	土色No	土色		粘性	しまり	
I	10YR3/2	黒褐色	シルト	無し	無し	表土層
II a~i	10YR5/6	黄褐色	砂質シルト	有り	有り	II層と同様の自然堆積層をラミナ状に4枚含む
II j	10YR4/4	褐色	シルト質砂	無し	有り	KS-251埋没直後の旧表土層
II k	10YR5/8	黄褐色	シルト質粘土	有り	有り	径1~2cmの円礫を少量含む 雨落ち溝緑石抜き取り後の盛土
III a	10YR4/4	褐色	砂質シルト	有り	有り	石敷き起源の円礫及び径1~3cmの凝灰岩粒を多量含む
III b	10YR4/6	褐色	粘質シルト	有り	有り	径1~3cmの円礫を少量含む 地山ブロックを含む
III c	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂質シルト	有り	有り	石敷き直上の自然堆積層
III d	10YR4/4	褐色	砂質シルト	有り	有り	地山土を径5~15mmの粒状に多量含む KS-353より東側に分布
III e	7.5YR4/6	褐色	粘質シルト	有り	有り	径1~3mmの凝灰岩粒を含む 大広間跡を中心に分布
III f	7.5YR4/6	褐色	粘質シルト	有り	有り	地山土を1~5cmのブロック状に多量含む 調査区東半に分布する地山直上整地層
III g	10YR5/6	黄褐色	シルト質粘土	有り	有り	石敷き直下の整地層 礎石設置後の化粧土か 年代測定 (C-1~3)
III h	7.5YR4/6	褐色	粘質シルト	有り	やや有り	III e層に類似 大広間北東部の北側にのみ分布
III i	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	無し	有り	径1~2mmの凝灰岩粒をやや多く含む 分布はIII h層に同じ
III j	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	有り	有り	径1~3cmの礫を多く含む 地山ブロックをやや多く含む 地山直上整地層 III f層対応
IV	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘質シルト	有り	無し	地山土を径5~10mmの粒状に少量含む KS-378の上を覆う 旧表土か
V	10YR6/4	にぶい黄褐色	シルト質粘土	有り	有り	鉄分をまだら状に含む 地山土



第18図 遺構平面図 (1/50・S.L.=116m)



第19図 遺構平面図 (1/50・S.L.=116m)



KS-251 近代溝状遺構全景 (北西から)



KS-342 礎石跡 (南から)



KS-53 雨落ち溝跡全景 (南から)



KS-53 雨落ち溝跡検出状況 (南から)



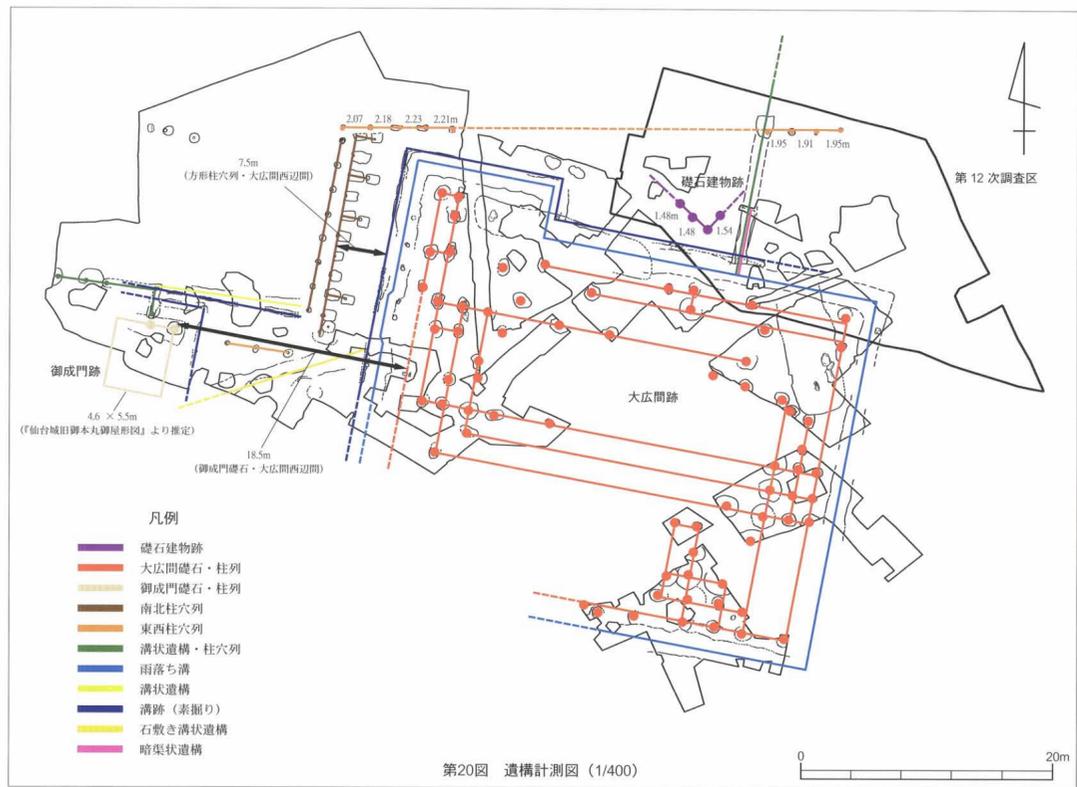
石敷き・礎石No.1~No.4 検出状況



KS-353 暗渠状遺構検出状況 (北東から)



KS-53 雨落ち溝跡周辺遺構検出状況 (南から)



第20図 遺構計測図 (1/400)



KS-53 雨落ち溝跡全景 (南から)



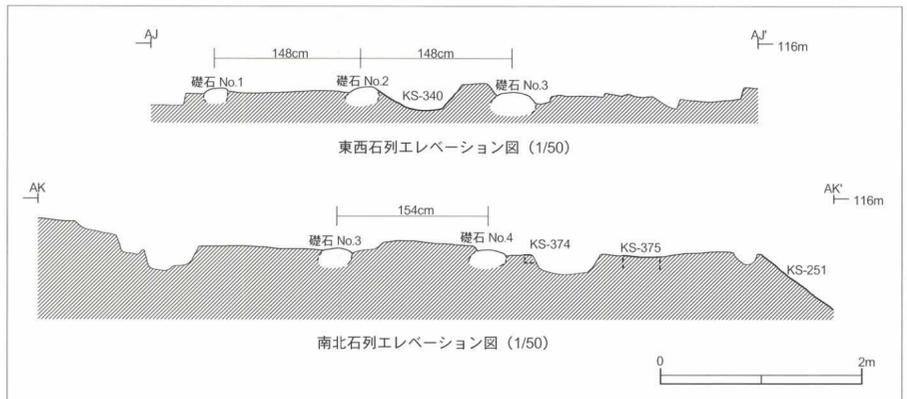
第21図 第12次調査 全体遺構平面図 (1/100)



KS-367 暗渠状遺構 平面合成写真 (1/100)



石敷き・礎石周辺平面合成写真 (1/100)



東西石列エlevation図 (1/50)

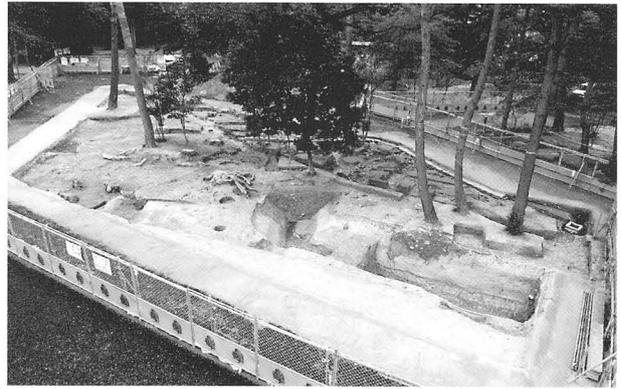
南北石列エlevation図 (1/50)

第7表 遺構註記表

遺構・層位	土 色			土質	性 質		備 考
	土色No	土色			粘性	しまり	
53	埋土1	10YR3/3	暗褐色	シルト	有り	無し	径3~15cmの円礫(雨落ち溝の玉石)を含む
	埋土2	10YR4/4	褐色	砂質シルト	有り	無し	木端石を多量含む
	埋土3	10YR5/6	黄褐色	砂質シルト	有り	有り	地山土を径2~5mmの粒状に多量含む 径3~5cmの円礫を少量含む
	埋土4	10YR5/6	黄褐色	砂質シルト	有り	有り	径3~5cmの地山土をブロック状に多量含む
84	埋土1	10YR4/4	褐色	砂質シルト	有り	有り	径1~2cmの地山ブロックを少量含む 径1~3cmの円礫を多量含む 土壌分析 (S-4)
	埋土2	10YR4/4	褐色	砂質シルト	有り	有り	径2~4cmの地山ブロックを多量含む 径1~3cmの円礫を少量含む 土壌分析 (S-5)
251	埋土1	10YR5/6	黄褐色	砂質シルト	有り	有り	径1~10mmの凝灰岩粒をやや多く含む
	埋土2	10YR5/6	黄褐色	砂質シルト	有り	有り	径1~10mmの凝灰岩粒を多量含む
	埋土3	10YR7/6	明黄褐色	シルト	有り	やや有り	
	埋土4	10YR5/6	黄褐色	砂質シルト	有り	有り	径1~10mmの凝灰岩粒をやや多く含む
	埋土5	10YR5/6	黄褐色	砂質シルト	有り	やや有り	埋土6層土を粒状に少量含む
	埋土6	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	有り	やや有り	
	埋土7	10YR6/4	にぶい黄褐色	砂質シルト	有り	やや有り	自然堆積層
327	埋土1	10YR4/6	褐色	砂質シルト	有り	無し	径5~10cmの円礫を多量含む 地山ブロックを少量含む
328	埋土1	10YR4/6	褐色	砂質シルト	有り	無し	径5~10cmの円礫を多量含む 地山ブロックを少量含む
331	埋土1	10YR5/6	黄褐色	砂質シルト	無し	無し	径3~5cmの円礫を多量含む 地山ブロックを少量含む
332	埋土1	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘質シルト	有り	有り	径7~15cmの円礫を含む 白色粘土を多く含む
333	埋土1	10YR4/6	褐色	砂質シルト	無し	無し	径3~5cmの円礫を多量含む 地山ブロックを少量含む
334	埋土1	10YR4/4	褐色	砂質シルト	無し	無し	径3~6cmの円礫を多量含む 地山ブロックを少量含む
	埋土2	10YR5/6	黄褐色	粘質シルト	有り	無し	地山ブロックを多量含む
335	埋土1	10YR4/6	褐色	砂質シルト	無し	無し	径3cmの円礫を少量含む 地山ブロックを少量含む
336	埋土1	10YR5/6	黄褐色	粘質シルト	有り	無し	径3~20cmの円礫を含む 瓦片含む 地山ブロックを少量含む 礫の一部に受熱痕
337	埋土1	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘質シルト	有り	無し	径5cmの円礫を少量含む 地山ブロックを多量含む
339	埋土1	10YR4/2	灰黄褐色	粘質シルト	有り	無し	柱痕跡 径3~5cmの円礫を充填
	埋土2	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘質シルト	有り	無し	地山土を多量含む
340	埋土1	10YR1.7/1	黒色	粘質シルト	有り	無し	全て炭化物層 灰土遺構
341	埋土1	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	有り	無し	炭化物を多量含む 灰土遺構
342	埋土1	10YR5/6	黄褐色	粘質シルト	有り	有り	径5~15cmの円礫を多量含む 大広間礎石採取後の堆積土 直上に「k層堆積
345	埋土1	10YR4/6	褐色	粘質シルト	有り	有り	柱痕跡 径3~5cmの円礫を少量含む 地山土を多量含む
	埋土2	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘質シルト	有り	有り	径3~7cmの円礫を少量含む 地山土・白色粘土を多量含む
346	埋土1	10YR4/6	褐色	砂質シルト	有り	無し	径3~10cmの礫を少量含む 瓦含む 礎石と思われる石材を1石含む
347	埋土1	10YR4/4	褐色	粘質シルト	有り	無し	径5~15cmの礫を少量含む
348	埋土1	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘質シルト	有り	無し	地山ブロックを少量含む
350	埋土1	10YR4/6	褐色	粘質シルト	有り	無し	地山ブロックを多量含む
	埋土2	2.5Y5/3	黄褐色	砂質シルト	無し	無し	径2cmの礫を多量含む
	埋土3	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘質シルト	有り	無し	地山ブロックを多く含む 径10cm大の礫を少量含む
	埋土4	10YR5/3	にぶい黄褐色	粘質シルト	有り	無し	地山ブロックを多量含む
351	埋土1	10YR5/6	黄褐色	粘質シルト	有り	有り	径5cmの円礫を含む 地山土を多量含む
353	埋土1	10YR4/6	褐色	砂質シルト	無し	無し	径2~5cmの礫を少量含む 瓦片含む 土壌分析 (S-1・6)
	埋土2	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	無し	無し	暗渠内の堆積土 土壌分析 (S-2)
	埋土3	10YR4/4	褐色	砂質シルト	無し	無し	暗渠内の堆積土 礫の間に堆積 瓦片含む 土壌分析 (S-3)
354	埋土1	10YR5/6	黄褐色	粘質シルト	有り	無し	地山土・白色粘土ブロックを多量含む
355	埋土1	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘質シルト	有り	無し	地山土・白色粘土ブロックを多量含む
357	埋土1	10YR5/8	黄褐色	粘土	有り	有り	白色粘土を少量含む 径2mmの炭化物粒を少量含む
358	埋土1	10YR4/6	褐色	砂質シルト	有り	無し	径2~10cmの礫を多量含む IIIa層に類似
372	埋土1	10YR4/4	褐色	砂質シルト	有り	無し	径3~15cmの円礫及び地山ブロックを多量含む
373	埋土1	10YR5/6	黄褐色	粘質シルト	有り	無し	地山ブロックを多量含む
374	埋土1	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂質シルト	有り	無し	地山ブロックを多量含む
	埋土2	10YR4/6	褐色	砂質シルト	有り	無し	
375	埋土1	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂質シルト	有り	無し	径3~7cmの円礫及び地山ブロックを少量含む 瓦片含む
376	埋土1	10YR4/4	褐色	砂質シルト	有り	無し	径3~15cmの円礫及び地山ブロックを多量含む 瓦片含む
377	埋土1	2.5Y5/3	黄褐色	砂質シルト	無し	有り	均質土 KS-379と同じ埋土
378	埋土1	10YR4/4	褐色	砂質シルト	有り	無し	柱痕跡 径3~15cmの礫を多量含む
	埋土2	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘質シルト	有り	無し	地山ブロックを多く含む
379	埋土1	2.5Y5/3	黄褐色	砂質シルト	無し	有り	KS-377に同じ
380	埋土1	10YR5/6	黄褐色	粘質シルト	有り	有り	地山ブロックを多く含む
382	埋土1	10YR5/6	黄褐色	粘質シルト	有り	有り	地山ブロックを多く含む
356	埋土1	10YR4/6	褐色	粘質シルト	有り	無し	径3~5cmの礫を含む 地山ブロックを少量含む
359	埋土1	10YR5/6	黄褐色	粘質シルト	有り	無し	径3~5cmの礫を少量含む 地山ブロックを多量含む
360	埋土1	10YR4/6	褐色	粘質シルト	有り	無し	地山ブロックを多量含む 10YR3/4暗褐色土をブロック状に少量含む
361	埋土1	10YR4/4	褐色	粘質シルト	有り	無し	地山ブロックを少量含む 径2mmの炭化物粒を少量含む
362	埋土1	10YR4/4	褐色	粘土	有り	無し	柱痕跡 径3mmの炭化物粒を少量含む
	埋土2	10YR5/6	黄褐色	粘質シルト	有り	無し	地山ブロックを多量含む
363	埋土1	10YR4/4	褐色	粘質シルト	有り	無し	地山ブロックを少量含む 径2mmの炭化物粒を少量含む
364	埋土1	10YR5/6	黄褐色	粘質シルト	有り	無し	礫・地山ブロックを多量含む
365	埋土1	10YR5/6	黄褐色	砂質シルト	有り	無し	地山土を含む IIIa層に類似 瓦片含む
366	埋土1	10YR4/6	褐色	砂質シルト	有り	無し	5~10cmの破砕礫を多く含む
367	埋土1	10YR4/6	褐色	砂質シルト	無し	無し	径5~15cmの円礫を多量含む 瓦片含む 暗渠状遺構
368	埋土1	10YR4/4	褐色	砂質シルト	有り	無し	III層に類似 径 1~3cm円礫を含む
	埋土2	10YR5/6	黄褐色	粘質シルト	有り	無し	地山ブロックを多く含む
369	埋土1	10YR4/6	褐色	砂質シルト	有り	無し	径5~10cmの礫を多く含む KS-366の埋土に類似
370	埋土1	10YR4/4	褐色	砂質シルト	有り	無し	径5~15cmの円礫を多く含む 地山ブロックを含む 根固め跡か
371	埋土1	10YR4/4	褐色	砂質シルト	有り	無し	径2~3cmの円礫を少量含む IIIa層に類似
380	埋土1	7.5YR4/6	褐色	砂質シルト	有り	有り	径1cmの円礫を少量含む
381	埋土1	7.5YR4/6	褐色	粘質シルト	有り	有り	III層に同じ
382	埋土1	10YR4/6	褐色	粘質シルト	有り	有り	径1cmの円礫を少量含む IIId層に類似
383	埋土1	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘質シルト	有り	有り	径1~2cmの円礫を少量含む 地山土を粒状に少量含む



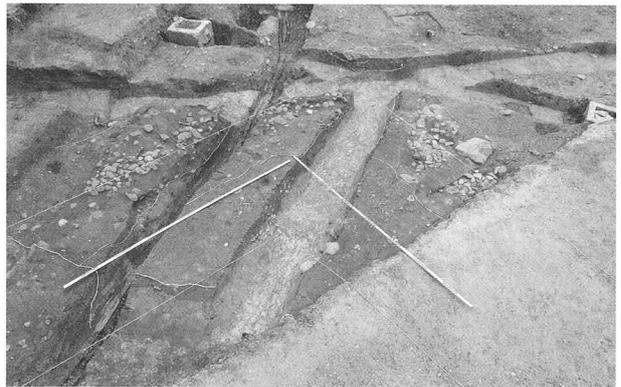
調査区全景（東から）



調査区全景（北から）



KS-342断面（西から）



KS-53北東角部検出状況（南西から）



KS-53検出状況（西から）



KS-53北東角部断面（南西から）



KS-53断面（東から）



KS-53(古)石材検出状況（上が北）

第22図



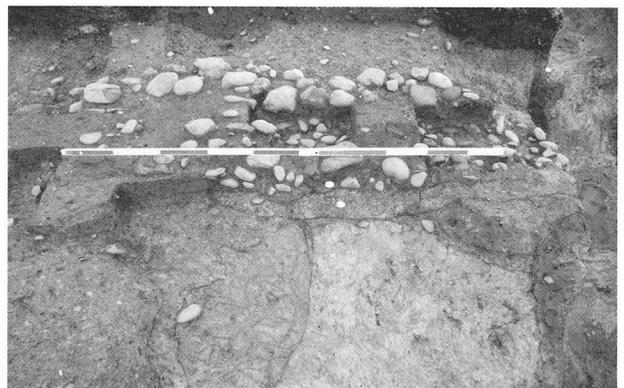
KS-84完掘状況（上が東）



KS-84土壌サンプル（S-4・5）採取状況（東から）



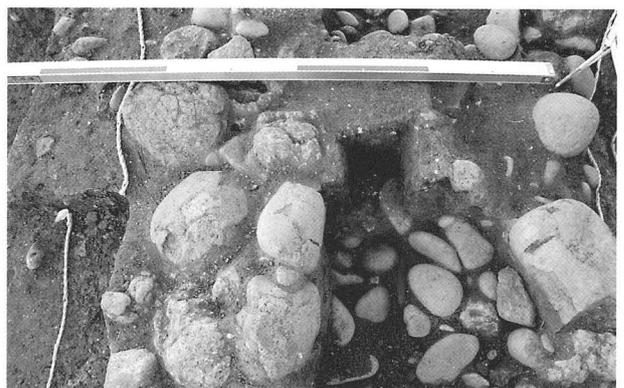
KS-53・353他検出状況（東から）



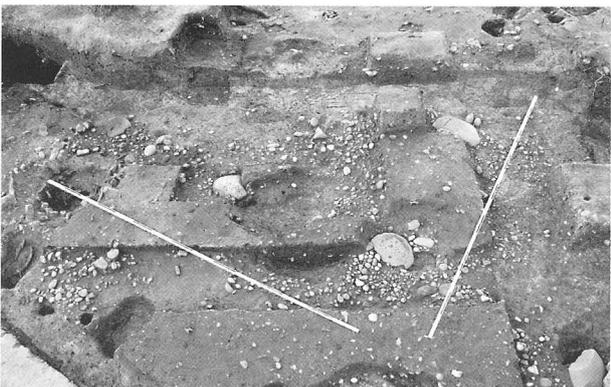
KS-350・353検出状況（東から）



KS-350・353・359断面（北から）



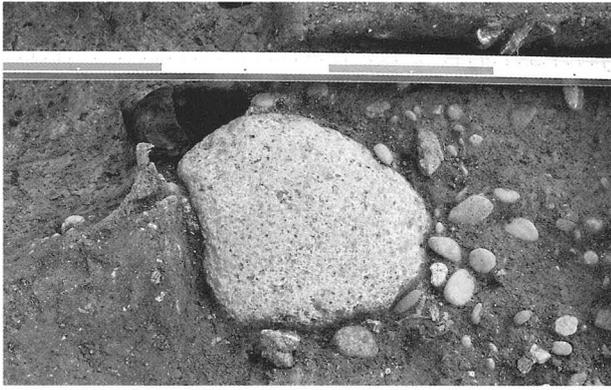
KS-353土壌サンプル（S-1～3）採取状況（南から）



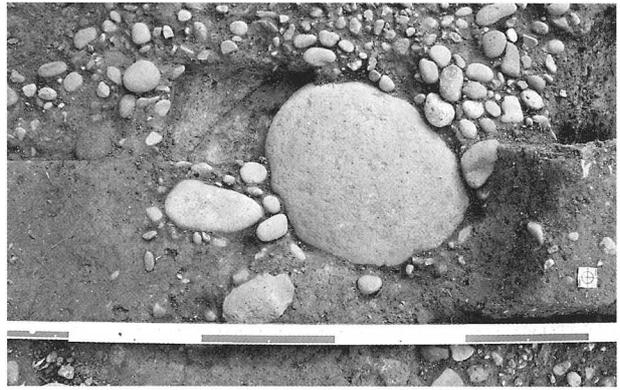
礎石建物跡検出状況（南から）



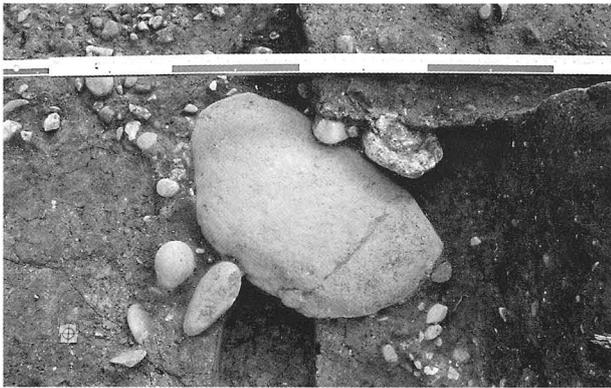
礎石No.1検出状況（北から）



礎石No.2検出状況（北から）



礎石No.3検出状況（北から）



礎石No.4検出状況（北から）



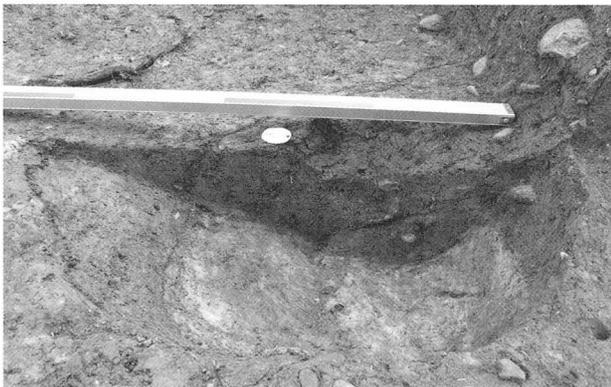
KS-376検出状況（南東から）



KS-372検出状況（北から）



KS-375他検出状況（西から）



KS-346断面（西から）

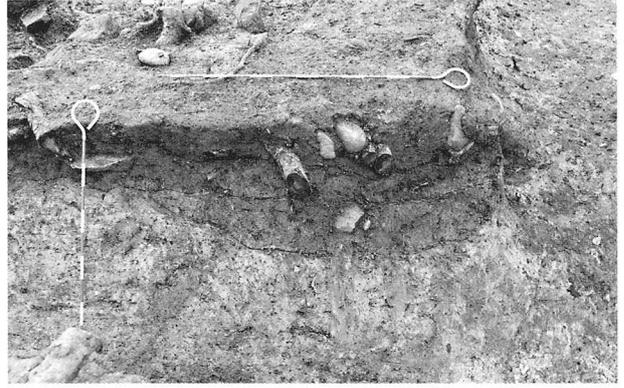


KS-356断面（南から）

第24図



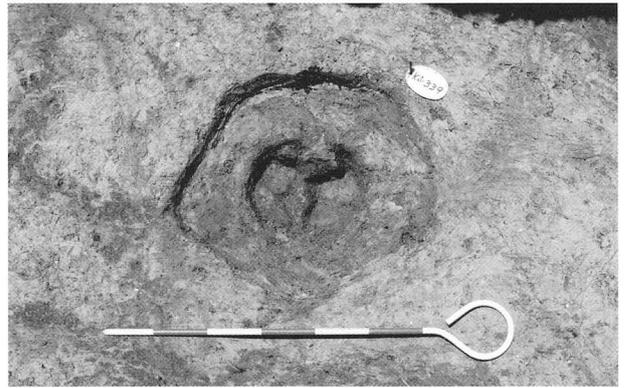
KS-357検出状況（南から）



KS-377断面（西から）



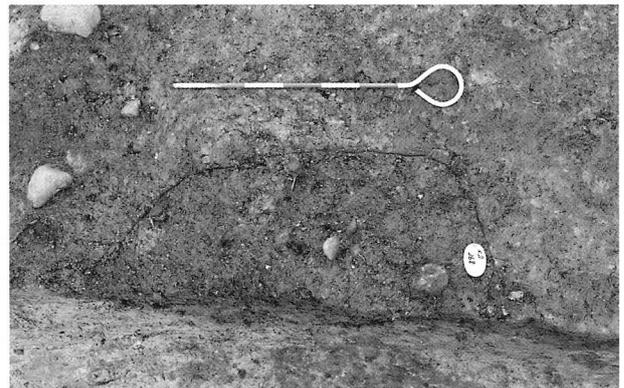
KS-337・338・339検出状況（西から）



KS-339検出状況（北から）



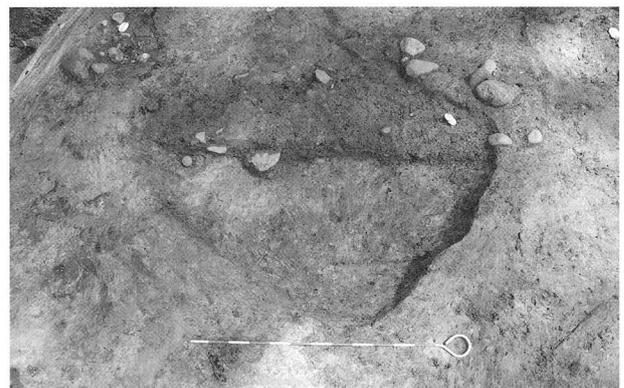
KS-351検出状況（南から）



KS-368検出状況（北から）



KS-378断面（西から）



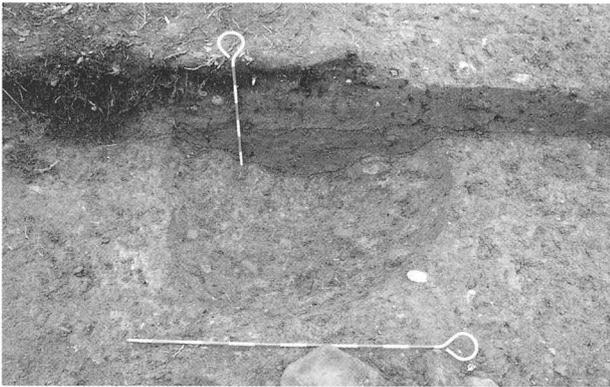
KS-327断面（北から）



KS-330検出状況（東から）



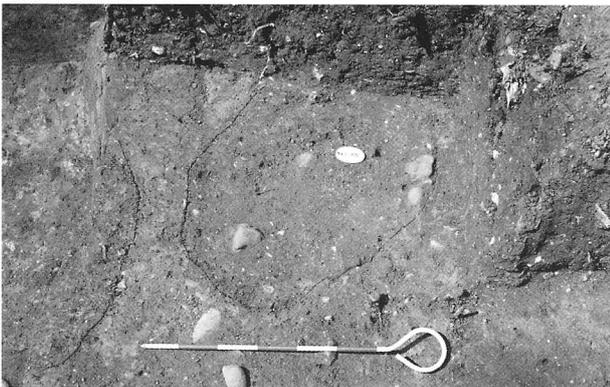
KS-332・333・345・357検出状況（北から）



KS-348断面（東から）



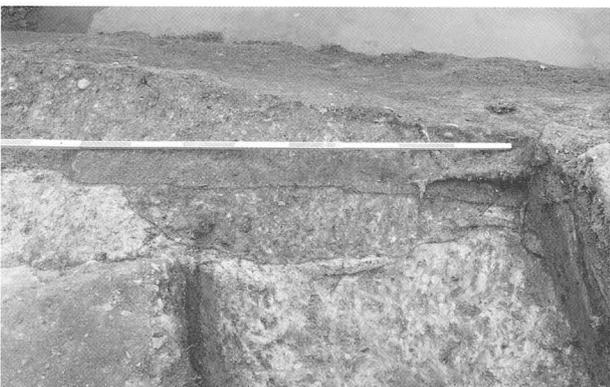
KS-334・335断面（北西から）



KS-371検出（東から）



KS-354・355断面（西から）



KS-328検出状況（南から）

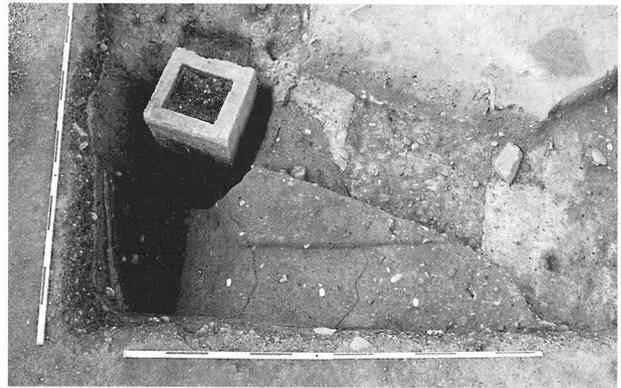


KS-370検出状況（西から）

第26図



KS-369断面（南から）



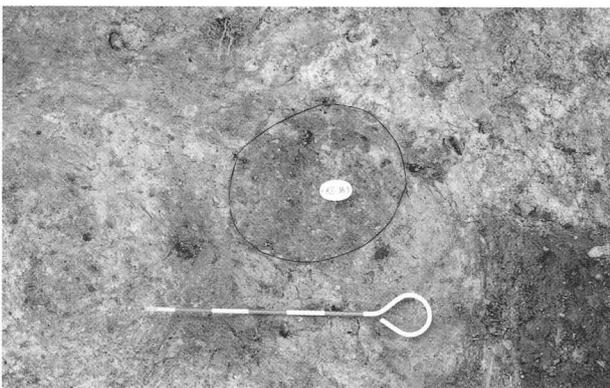
KS-364・365・366検出状況（南から）



KS-360・361検出状況（東から）



KS-362検出状況（北から）



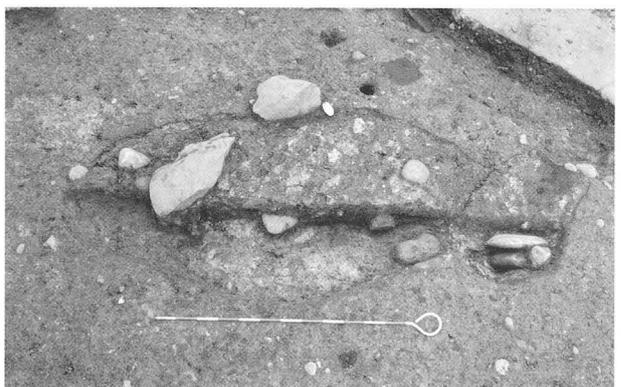
KS-363検出状況（東から）



KS-251検出状況（北から）



KS-340断面（北から）



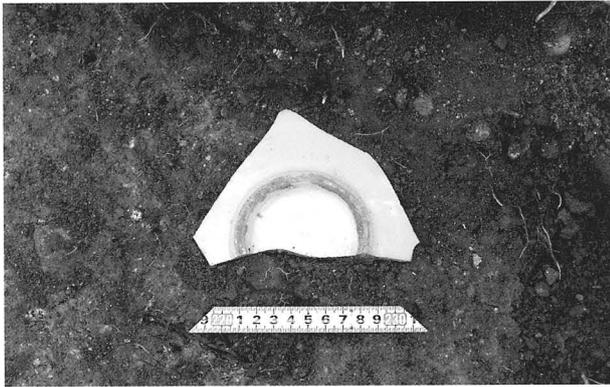
KS-341断面（北から）



金銅金具 (No.18) 出土状況



銅釘 (No.20) 出土状況



染付皿 (No.7) 出土状況



印判手染付皿 (No.209) 出土状況



土師質土器 (No.366) 出土状況



軒丸瓦 (No.207) 出土状況



調査風景 (北西から)



現地説明会風景 (東から)

4. 出土遺物

全体に大広間跡周辺では遺物の出土量が少ない。瓦、陶磁器は比較的まとまった量があるが、調査区東部から出土した近代以降と思われるものが多くを占める。遺物の出土点数については、遺構・層位別の数量表を作成した（第8～10表）。

(1) 金属製品（第8表）

金属製品は金銅金具・銅釘・鉄釘・古銭などがあり、その他鏃等も出土している。

①金銅金具・銅金具

今回出土した金具類はほとんどが小片である。文様表現のある1点を図示した。

・金銅金具No.18（第29図1）

厚さ0.7mmの地金に、線彫りによって4本の葉脈とみられる文様が表現されている。緑青のため、詳しい彫金技術については不明である。魚々子打ちなどは観察されない。

②銅釘

今回の調査では19点出土しており、本丸大広間跡関連調査での全出土点数は828点である。これまでと同様、頭部形状の違いから4種類の銅釘が認められた。I類（角）3点・II類（丸）5点・III類（平丸）9点・IV類（不整形）2点である。完形品をみると、全長は15～27mmに分布するが20mm程度のものが多い。なお、詳細な銅釘の分析については、昨年度刊行した「仙台城跡5」を参照されたい。銅釘の分類基準についても同報告書に準拠する。

③鉄製品

117点出土した。鉄製品の多くは近代の遺物が集中する調査区東部から出土しており、近世の遺物は少ないと考えられる。しかし、86点出土した鉄釘のうち8点がKS-353（暗渠状遺構）から検出されており注目される。

(2) 陶磁器類（第9表）

ほとんどが表土や攪乱からの出土である。近代以降のものが圧倒的に多い。

①陶器

201点出土した。近代以降のものが多く含まれるが、大堀相馬の小坏（第30図10）、碗などが出土している。

②磁器

989点出土した。うち近世期のものは1点のみである。但し幕末～明治期に属する印判手の資料は、全て近代以降とした。近世磁器は、II層上面から出土した17世紀中頃の肥前産染付皿である（第30図11）。またKS-251の底面近くから明治時代前半の皿が2点出土した。うち1点は印判手の中皿である（第30図13）。

③土師質・瓦質土器

それぞれ41点・15点出土した。土師質土器は、ほとんどが口径・底径の復元が不可能な小片である。I・II層からの出土が多いが、雨落ち溝跡や暗渠状遺構の埋土中からも出土している。

(3) 瓦（第10表）

瓦は総計4535点出土し、このうち丸瓦が773点、平瓦が3229点で併せて

第8表 出土金属製品数量表

遺構・層位	鉄製品					銅製品		金具		計	
	鉄釘	鏃	焼夷弾	弾	古銭	その他	銅釘	その他	金銅金具		その他
I	26					8	1			12	47
II	15			1		6	9		3	6	40
II a									1		1
II c	2										2
II d	1		1		1			2		1	6
II i							1				1
II k	3										3
III 上面							1				1
KS-53							1				1
KS-251	2				1	2	2	1			8
KS-252	1										1
KS-325					1						1
KS-326	1						1			1	3
KS-340	1										1
KS-341	1										1
KS-342							2				2
KS-346	1				1						2
KS-347	1										1
KS-350	8				4	1					13
攪乱	23	1				3	1	1		1	30
計	86	1	1	1	8	20	19	4	4	21	165

第9表 出土陶磁器数量表

遺構・層位	陶器	磁器		土師質土器	瓦質土器	計
		近世	近代以降			
I	49		137	13	8	207
II 上面		1				1
II	13		81	13	3	110
II a			2			4
II b	1		16			17
II c	2		14			16
II e			1			1
II f			6			6
II g			3			3
II h			1			1
II i					1	1
II j			1			1
II k				1		1
III a	1				1	2
III d				4		4
表採			4			4
KS-53			1	1		2
KS-251	1		8	4		13
KS-325	2		6			8
KS-326			3			3
KS-329	3				1	4
KS-340			7			7
KS-341			1			1
KS-353				2		2
KS-366				1		1
攪乱	129		696	2	1	828
計	201	1	988	41	15	1246

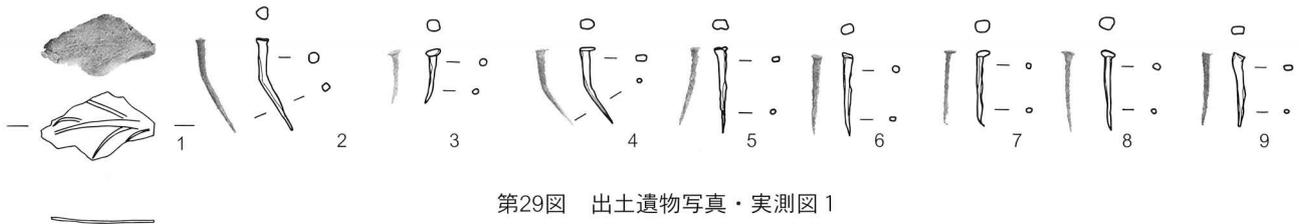
全体の88%を占める。また、出土地別では攪乱や近代以降の盛土層・遺構から出土したものが圧倒的に多い。

- ①軒丸瓦 38点出土した。瓦当文様の判別可能なものは23点あり、左巻三巴文10点・珠文左巻三巴文5点・九曜文3点・三引両文1点・他4点である。
- ②軒平瓦 20点出土した。瓦当文様の判別可能なものは7点あり、菊花文4点・桔梗文2点・花菱文1点・他13点である。
- ③軒棧瓦 7点出土した。瓦当文様の判別可能なものは3点あり、三巴文・勾玉文各1点で江戸式の軒平部（第31図16）が1点である。
- ④棟瓦 21点出土した。輪違い8点・菊丸5点・伏間瓦4点・面戸瓦2点・他2点である。
- ⑤飾り瓦 鬼瓦が11点出土した。うち1点は雨落ち溝跡（古段階）の埋土中より出土しており、接合面を持つ突起状の破片であることから、鬼瓦の一部と推定される（第31図18）。
- ⑥塀瓦 19点出土した。
- ⑦駒瓦 4点出土した。
- ⑧その他 この他、種別不明であるが石敷きがなされるⅢg層上面から1点出土した瓦片が注目される（第31図19）。接合面を持ち、軒平瓦とみられるが、全体に破断面が多く、形状の復元は困難である。しかし、大広間跡に先行する整地層上面からの出土であり、その意義は大きい。
- ⑨明治瓦 調査区東部Ⅰ層直下から検出された瓦溜りの一括資料である。352点出土した。「仙台北八番丁渡邊瓦工場明治廿六年」銘の入った資料（第31図20）が多数みられる。また、平瓦には特徴的な櫛描きがみられ、同様の瓦については瓦溜り周辺の出土瓦も明治瓦に含めた。しかし今回、明治瓦に含めなかったものについても、調査区東部より多数出土した丸・平瓦の中には、明治期のもが多く含まれる可能性が高い。種類別では、無文の軒丸・軒平・軒棧瓦や熨斗瓦、鬼瓦などが出土した。

第10表 出土瓦数量表

遺構・層位	丸瓦	平瓦	軒丸瓦	軒平瓦	棧瓦	軒棧瓦	冠伏間瓦	丸棧伏間	菊丸	菊差し込み	輪違い	面戸瓦	棧付平板	飾り瓦	塀瓦	駒瓦	明治瓦	不明	計
I	363	1442	11	7	5	1	1	3	3	1	1		3		7	2	267	11	2128
II	115	421	4	8	1	2					2	1	2	1	5	1		5	568
IIc		3																	3
II d	1	11																	12
II e	2	3																	5
II f		2																	2
II g		1																	1
II h	3	5	1																9
II i	7	32	1																40
II j	8	26	1								1			1					36
II k	1	4																	5
II k上面	2	7																	9
III a	1	7																	8
III c		1																	1
III f上面		1																	1
表探	6	10		1															17
KS-53	3	7													1				11
KS-84		1																	1
KS-251	48	121	10	1							1	1							182
KS-325	13	55			1								1						70
KS-326	1	3																	4
KS-327	7	1			4														12
KS-329	54	174	2	1							1		2	1	4	1	2	2	244
KS-330									1										1
KS-334		1	1																2
KS-335		1																	1
KS-340	1	1				1													3
KS-341	1	1																	2
KS-346		2																	2
KS-353	2		1																3
KS-356		1																	1
KS-358									1										1
KS-367	2	3																	5
KS-370		1																	1
攪乱	132	880	6	2	12	3				1	3		1	7	2		83	10	1142
計	773	3229	38	20	23	7	1	3	5	2	8	2	9	10	19	4	352	28	4533

金銅金具・銅釘（縮尺 1/2）



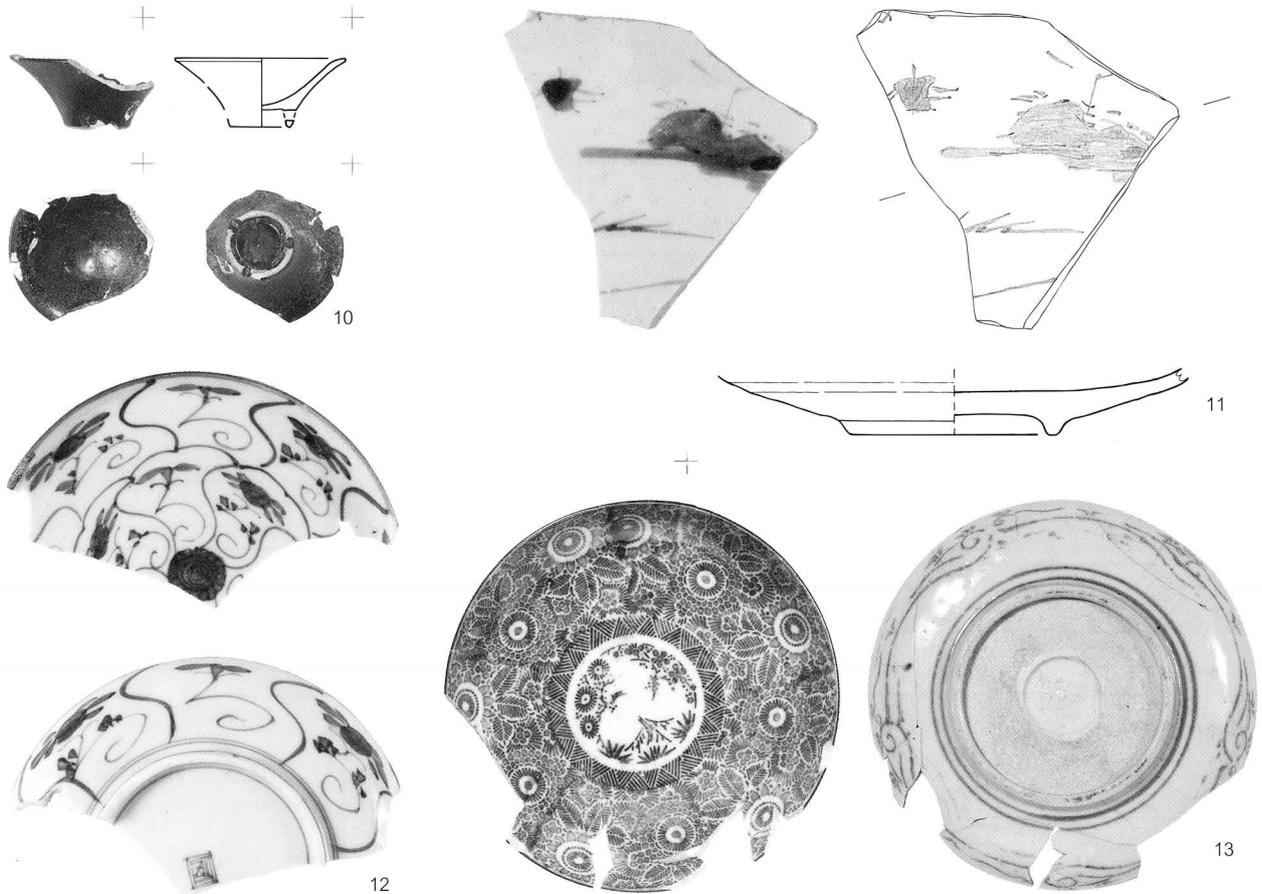
第29図 出土遺物写真・実測図1

第11表 出土遺物註記表1

番号	種類	遺物番号	遺構・層位	法量 (mm・g)				備考
				長	幅	厚	重量	
1	金銅金具	18	IIa	18.0	30.0	0.7	1.0	葉脈線彫り

番号	種類	遺物番号	遺構・層位	頭部形状	法量 (mm・g)				備考
					全長	頭部幅	胴部太さ	重量	
2	銅釘	26	II	角	25.9	3.0	2.5	0.4	胴部曲がり
3	銅釘	20	II	平丸	14.7	3.8	2.0	0.1	先端部曲がり
4	銅釘	23	IIi	平丸	22.0	3.5	2.3	0.3	胴部曲がり
5	銅釘	24	II	平丸	21.6	3.4	2.2	0.2	
6	銅釘	57	II	平丸	22.4	3.2	2.3	0.3	
7	銅釘	55	KS-342・1	平丸	21.3	3.8	1.5	0.2	先端部曲がり
8	銅釘	56	KS-342・1	不整形	21.2	3.8	2.0	0.2	
9	銅釘	58	III上面	不整形	19.3	2.9	2.3	0.2	

陶磁器（縮尺 1/3）

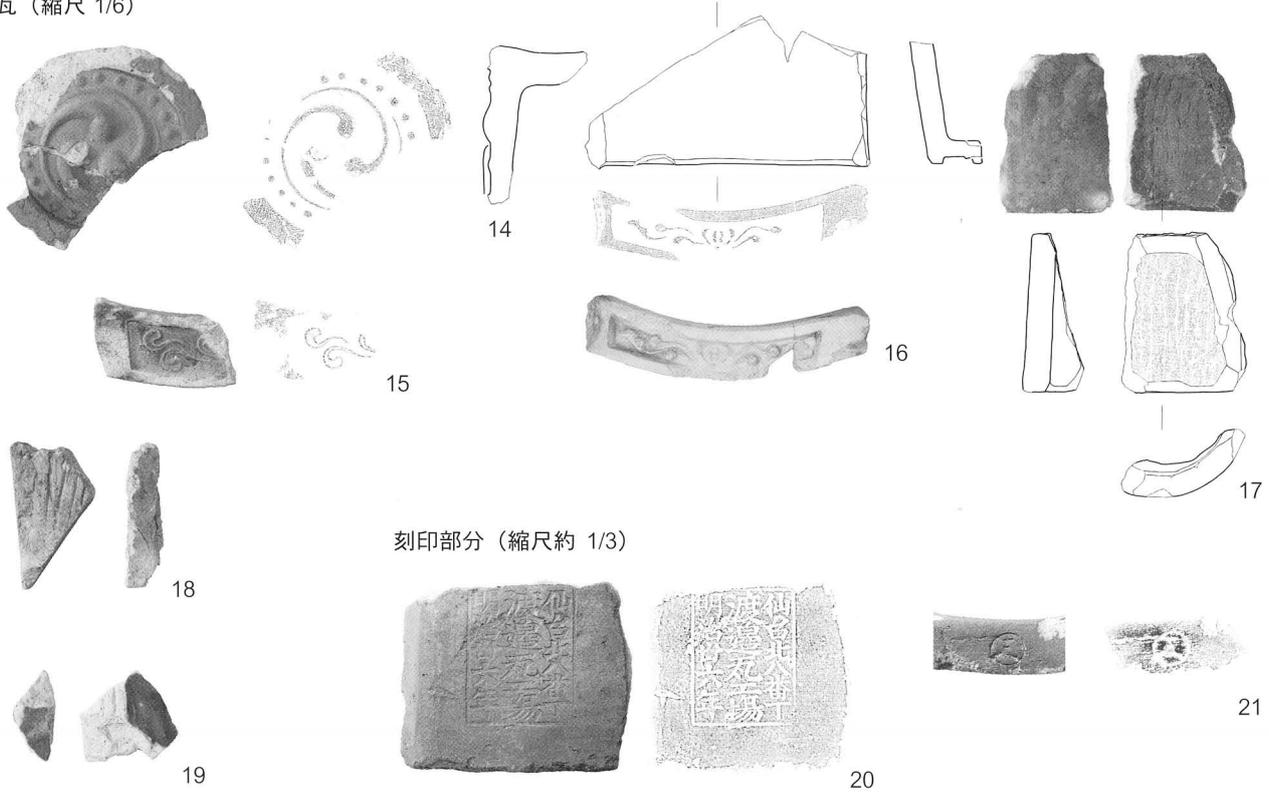


第30図 出土遺物写真・実測図2

第12表 出土遺物註記表2

番号	種類	遺物番号	遺構・層位	器種	法量 (mm・g)				備考
					口径	底径	器高	重量	
10	陶器	634	I	小環?	70.0	26.0	28.0	22.8	大塚相馬 黒色釉 19c 割高台 高台に一对の孔有り
11	磁器	7	II上面	皿	—	78.0	(30.0)	172.9	肥前 染付 17c中頃 高台疊付に砂
12	磁器	208	KS-251・4	皿	154.0	86.0	24.0	104.8	瀬戸美濃 染付 19c中頃 靈芝文 高台内「福」銘
13	磁器	209	KS-251・4	皿	150.0	80.0	30.0	240.3	産地不明 印判手染付 明治前半～中頃 草花文 見込環状松竹梅 蛇/目高台

瓦（縮尺 1/6）

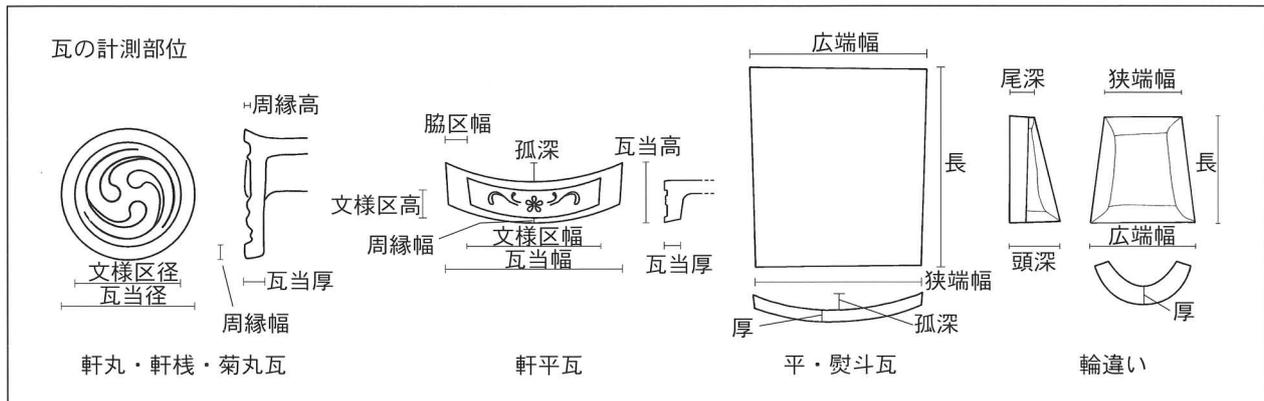


第31図 出土遺物写真・実測図 3

第13表 出土遺物註記表 3

番号	種類	遺物番号	遺構・層位	文様	法量 (mm・g)							備考	
					瓦当径	瓦当厚	文様区径	周縁幅	周縁高		重量		
14	軒丸瓦	121	KS-251・2	珠文三巴文	170	21	129	20	8			740	三巴（左巻）
15	軒平瓦	288	I	菊花？	瓦当高	瓦当厚	文様区高	文様区幅	周縁幅	脇区幅		重量	
					-	(23)	(40)	-	(10)	28		275	
16	軒棧瓦	70	KS-340・1	江戸式	瓦当高	瓦当厚	文様区高	文様区幅	周縁幅	脇区幅	弧深	重量	
					58	17	39	162	9	36	19	580	
17	輪違い	361	KS-329		長	広端幅	狭端幅	厚				重量	
					130	-	-	21				380	
18	鬼瓦？	423	KS-53・4		長	幅	厚					重量	
					(119)	(73)	(29)				180	接合部あり	
19	不明	421	Ⅲg上面		長	幅	厚					重量	
					(74)	(71)	(29)				90	接合部あり	

番号	種類	遺物番号	遺構・層位	刻印内容	刻印形状	刻印位置
20	平瓦・刻印部分	508	I	仙台北八番丁渡邊瓦工場明治廿六年	長方形	下面
21	平瓦・刻印部分	140	I	三	円形	前面



第32図 瓦計測部位模式図

5. 理化学分析

土壌サンプルの各種分析については、株式会社古環境研究所に委託した。分析の対象としたサンプル数は9点である(第14表)。珪藻分析は、流水性や酸性度といった環境差に応じて棲み分けを行う珪藻(植物プランクトン)の性質を利用したもので、KS-353(暗渠状遺構)・KS-84(素掘り溝跡)の埋没過程・堆積環境を明らかにし、その機能を推定するため実施した。蛍光X線分析は、KS-353より採取した白色土の主成分を分析し、漆喰土等の可能性を検討するため実施した。

放射性炭素年代測定は、Ⅲg層中の炭化物3点を試料とし実施した。Ⅲg層は、大広間跡に先行する礎石建物の構築に伴う整地層で、その上面には玉石敷きがなされている。仙台城の歴史にとってこの建物跡の年代は、慶長15年[1610]完成といわれる大広間の成立年代にも関わる重要な問題であり、考古学的手法のみならずその年代決定にはあらゆる手段を用いるべきとの判断から実施するものである。

(1) 珪藻分析

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域など水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度・酸性度・流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復元の指標として利用されている。

分析試料は、仙台城跡第12次調査において検出されたKS-353(暗渠状遺構)とKS-84(素掘り溝跡)の埋土より採取された土壌サンプル5点である。KS-353より3点、KS-84より2点である。

分析の結果、KS-353埋土1～3層、KS-84埋土1・2層共に珪藻密度が極めて低く、珪藻が生育しにくい乾燥した環境であったか、埋土の堆積時間が早く珪藻が集積しなかった事などが推定される。

(2) 蛍光X線分析

蛍光X線を照射すると、その物質を構成している元素に固有のエネルギー(蛍光X線)が放出され、この蛍光X線を分析して波長と強度を測定することで、物質に含まれる元素の種類と量を調べることができる。

分析試料は、KS-353(暗渠状遺構)の埋土1層中より採取した白色土である。分析の結果、カルシウム(CaO)の含量が62.2%・珪酸(SiO₂)が20.3%・アルミニウム(Al₂O₃)が9.2%・鉄(Fe₂O₃)が5.4%などであり、カルシウムが主成分となっている。消石灰(水酸化カルシウム、Ca(OH)₂)に植物繊維(スサ)や山土などを混ぜた漆喰土の分析結果に類似しており、同試料が漆喰土である可能性が高いことを示している。なお、リン酸(P₂O₃)の含量は0.3%と微量であることから、カルシウムの給源は動物骨(リン酸カルシウム)ではなく石灰岩や貝殻(炭酸カルシウム)とみなされる。

第14表 理化学分析試料一覧

試料No.	遺構	層位	珪藻分析	蛍光X線分析	放射性炭素年代測定
S-1	KS-353	埋土1層	○		
S-2	KS-353	埋土2層	○		
S-3	KS-353	埋土3層	○		
S-4	KS-84	埋土1層	○		
S-5	KS-84	埋土2層	○		
S-6	KS-353	埋土1層		○	
C-1	-	Ⅲg層			○
C-2	-	Ⅲg層			○
C-3	-	Ⅲg層			○

第15表 珪藻分析結果

分類群	KS-353			KS-84	
	埋土1層 S-1	埋土2層 S-2	埋土3層 S-3	埋土1層 S-4	埋土2層 S-5
貧塩性種(淡水生種)					
<i>Aulacoseira canadensis</i>		1			
<i>Aulacoseira</i> spp.				1	
<i>Cyclotella</i> spp.				1	
<i>Epithemia adnata</i>		1			
<i>Eunotia minor</i>			1		
<i>Fragilaria construens</i>				1	
<i>Hantzschia amphioxys</i>	1		1	1	1
<i>Navicula confervacea</i>	1				
<i>Navicula mutica</i>	6		1		
<i>Navicula mutica v. ventricosa</i>	1				
<i>Nitzschia</i> spp.				1	
<i>Pinnularia borealis</i>				3	
<i>Pinnularia microstauron</i>	1				
<i>Stauroneis</i> spp.	1				
中・真塩性種(汽・海水生種)					
<i>Nitzschia cocconeiformis</i>				1	
<i>Nitzschia granulata</i>				1	
合計	0	13	3	10	1
未同定	0	1	0	0	0
破片	0	5	4	3	1
試料1cm ³ 中の殻数密度	0.0	2.6	8.0	2.8	2.0
		×1	×1	×1	×1
完形殻保存率(%)	-	-	-	-	-

第16表 蛍光X線分析結果

単位: wt (%)		
原子No.	化学式	地点・試料
		KS-353 埋土1層
11	Na ₂ O	0.285
12	MgO	0.399
13	Al ₂ O ₃	9.215
14	SiO ₂	0.304
15	P ₂ O ₅	0.266
16	SO ₃	0.340
19	K ₂ O	0.637
20	CaO	62.181
22	TiO ₂	0.614
25	MnO	0.143
26	Fe ₂ O ₃	0.437
37	Rb ₂ O	0.008
38	StrO	0.171

(3) 放射線炭素年代測定

III g層中より採取した炭化物試料3点についてAMSによる放射性炭素年代測定を行った。試料と方法を第17表に、測定結果を第18表に示す。

測定の結果¹⁴C年代値で330±40年BP・330±40年BP・300±40年BP、補正¹⁴C年代値で320±40年BP・270±40年BP・270±40年BPの結果を得た。また、これらの年代値を暦年代校正曲線により暦年代校正し、それぞれ95%確率(2σ)でcalAD1460~1660・calAD1510~1600、AD1620~1670・calAD1510~1600、AD1620~1670との測定結果を得た。

第17表 放射性炭素年代測定 試料と方法

試料番号	層位	種類	前処理・調整	測定法
C-1	III g層	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
C-2	III g層	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
C-3	III g層	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS

※ AMS は加速器質量分析法 : Accelerator Mass Spectrometry

第18表 放射性炭素年代測定 測定結果

試料番号	測定 No (Beta-)	¹⁴ C年代 ¹⁾ (年 BP)	σ ¹³ C ²⁾ (‰)	補正 ¹⁴ C年代 ³⁾ (年 BP)	暦年代 ⁴⁾
C-1	214520	330 ± 40	-25.7	320 ± 40	交点 : cal AD 1530,1560,1630 1σ : cal AD 1500 ~ 1640 2σ : cal AD 1460 ~ 1660
C-2	214521	330 ± 40	-28.4	270 ± 40	交点 : cal AD 1650 1σ : cal AD 1530 ~ 1550,AD 1630 ~ 1660 2σ : cal AD 1510 ~ 1600,AD 1620 ~ 1670
C-3	214522	300 ± 40	-26.7	270 ± 40	交点 : cal AD 1650 1σ : cal AD 1530 ~ 1550,AD1630 ~ 1660 2σ : cal AD 1510 ~ 1600,AD1620 ~ 1670

1 ¹⁴C年代測定値

試料の¹⁴C/¹²C比から、単純に現在 (AD1950年) から何年前かを計算した値。¹⁴Cの半減期は、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

2 δ (デルタ) ¹³C測定値

試料の測定¹⁴C/¹²C比を補正するための炭素安定同位体比 (¹³C/¹²C)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

3 補正¹⁴C年代値

δ ¹³C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、¹⁴C/¹²Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中¹⁴C濃度の変動を校正することにより算出した年代 (西暦)。CalはCalibrationした年代値であることを示す。校正には、年代既知の樹木年輪の¹⁴Cの詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と¹⁴C年代の比較により作成された校正曲線を使用した。最新のデータベースでは約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正¹⁴C年代値と暦年代校正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σ (シグマ) (68%確率) と2σ (95%確率) は、補正¹⁴C年代値の偏差の幅を校正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。

6. 伊達治家記録にみる能関連記事について

第12次調査は絵図等に描かれた能舞台の推定地を対象としており、文献の面からも本丸における能舞台の存在を検討するため、仙台藩の家史である伊達治家記録より能関連記事を抜粋し、これをまとめる作業を行った。ここに掲載した第19表はその成果の一部である。記事の抜粋は、仙台城の築城が開始される慶長5年(1600)から政宗が死去する寛永13年[1636]までの37年間を対象とし、仙台での記事のみを掲載した。なお、大広間や若林城の完成、西曲輪の初出記事など関連する主要なものについては適宜掲載した。表は、年代順に月日・場所・番数・演目(演者)・本文・その他関連記事・出典の各項目についてまとめ作成した。また、今回は能関連記事として、主に能の器楽を意味し、謡曲と共に能楽の主要な要素の1つとされる拍子についても抜粋した。なお、拍子の記事である場合には番数の項目に「拍子」と記載した。以下に概要を記す。

本丸での演能を示唆するものは、普請初めの祝儀として行われた慶長5年12月24日、博多間での慶長18年11月25日、同19年2月7日、そして一家一族が登城・見物を命じられた慶長18年10月11日の4つで、全て慶長期の記事である。このうち博多間での演能・拍子を除き、他の2つの記事については、本丸における能舞台の存在を示す可能性がある。しかし、いずれにせよこれらの記事から、本丸特に大広間北側における能舞台の存在を確認することはできない。なお、政宗が茂庭石見守綱元にあてた、慶長6～12年頃の手紙の中に「しろのぶたい」の語がみえることから、慶長年間「城」の中に「舞台」と呼ばれる施設があった可能性は高い。因みに、博多間については本丸内の部屋の名称と思われるが、詳細は不明である。

寛永期に入ると、家臣宅に加えて西曲輪での演能記事が加わり、6件の記載がある。西曲輪の場所については本丸や後の二の丸など複数考えられるが、近年進められている仙台市史編纂事業の中で、若林城への移住に関する木村右衛門覚書の中に「御にしくるわとて屋敷かまえなり」とあることから、西曲輪が若林城にあった可能性が指摘されている。なお、若林城は寛永5年[1628]11月に完成の記事があり、一方、治家記録における「西曲輪」の初出は寛永6年[1629]9-10月で、西曲輪での演能記事は寛永8～13年[1631～1636]に見えることから、年代的にも矛盾は無い。西曲輪での演能については、単に「御能アリ」としたものが5件あり「見物仰付ラル」との記載が1件みられる。また、西曲輪での演能は寛永10年[1633]9月13・15日や寛永13年[1636]3月28・29日など、複数日にわたって行われており、基本的に1日だけの家臣宅での演能とは対照的である。寛永8年4月24日の演能も、寛永8年4月23日に続いて西曲輪で行われた可能性が考えられる。なお、この24日の記事では「寺院方ヲ饗セラル」とあることから政宗自身による饗応能とみられ、この点からも西曲輪が当時政宗の居城である若林城にあった可能性は高い。

以上のように、今回、慶長・寛永期における伊達治家記録の能関連記事から、本丸大広間北側における能舞台の存在を確認する事は出来なかった。今後、能舞台が描かれた仙台城下絵図(寛文4年)や青山公造制城郭木写之略図(17世紀後半～18世紀)の評価と共に更なる検討が必要である。

第19表 伊達治家記録能関連記事一覧

西暦	年	月日	場所	番数	演日(演者)	本文	その他関連記事	出典
1600	慶長5	12/24	千代城	五番	高砂 田村 野宮 養老 狸々	晩、御普請初ノ御祝儀、御能五番アリ。	廿六日丙申。公、北日城ニ御歸。	貞山公-20下 2-501
1603	慶長8	8月	—	—	—	—	仙台へ御下向、仙台北城御普請既ニ成就シ、直ニ御城ニ御着、	貞山公-20下 2-526
1610	慶長15	—	—	—	—	—	此年、仙台北城大広間御造営成就ス。	貞山公-20下 2-554
1613	慶長18	8/12	茂庭石見宅	七番	卯松殿 (政宗子息伊達宗綱)	饗シ奉ル。卯松殿(政宗子息伊達宗綱)御能セラル。御能七番アリ。		貞山公-23 2-593
		10/10	記載なし	九番	卯松殿 吉松殿 長松殿	御能九番アリ。未明ヨリ始マル。卯松殿・吉松殿・長松殿へ御能仰付ラル。		貞山公-23 2-599
		10/11	記載なし	十一番	記載なし	御能十一番アリ。一家・一族ノ藝見物仰付ラレ、各登城セラル。		貞山公-23 2-599
		11/16	伊達左近殿宗則宅 数奇屋の表	五番	記載なし	伊達左近殿宗則宅ニ於テ饗シ奉ラルニ就テ、未明ニ御出、数奇屋ニ於テ御茶差上ラル。御茶羅テ表へ御出、御能五番アリ。		貞山公-23 2-603
		11/25	博多間	四番	記載なし	博多間ニ於テ饗セラレ御拍子アリ。四番過テ御歸リ。		貞山公-23 2-603
		12/19	茂庭石見綱元宅	三番	記載なし	卯松殿元服ニ就テ饗シ奉ル。(中略)御能三番アリ。		貞山公-23 2-606
1614	慶長19	2/7	博多間	拍子 六番	記載なし	朝博多間ニ於テ愛松殿元服、三河宗泰ト稱セラル。御祝儀アリ。(中略)御拍子六番アリ。		貞山公-24 3-189
		2/10	茂庭石見綱元宅	五番	攝津(宗綱)殿 吉松(宗信)殿 長松(宗高)殿	茂庭石見綱元宅へ饗シ奉ルニ就テ入セラル。御能五番アリ。攝津殿・吉松殿・長松殿御能ナリ。		貞山公-24 3-190
1624	寛永元	10月	中島監物宅 書院	記載なし	記載なし	中島監物貞成宅ニ就テ数奇饗シ奉ル。御茶以後、書院へ御出、御能アリ日不知。		貞山公-30 3-489
1628	寛永5	11/16	—	—	—	—	辰上刻若林御屋形御構営成就、御移徙、御祝儀アリ。	貞山公-34 3-622
1631	寛永8	2/13	伊藤肥前重綱宅	拍子	記載なし	伊藤肥前重綱宅へ御出、饗シ奉ル。圍ニ於テ御茶差上ク、表へ御出、御拍子アリ。		貞山公-36 3-691
		3月	西曲輪	記載なし	記載なし	此月、歌舞伎左源太、浄瑠璃太夫掃部江戸ヨリ下向ス。江戸ニ於テ彼等ヲ藝ヲ御覧アリ、仙臺へ呼下シ玉フ。御西曲輪ニ於テ御能ノ次ニ歌舞伎仰付ラル。	此月ヨリ十月ニテ内御西曲輪ニ於テ一門一家一族ノ藝ハ不殘御茶ヲ饗シ玉フ〔西曲輪〕初出記事寛永6年9-10月條 貞山公-35 3-665)	貞山公-36 3-691
		4/23	西曲輪	十一番	加茂 櫻井八右衛門 忠則 櫻井八右衛門 熊野 櫻井八右衛門 養上 櫻井八右衛門 源氏供養 石母田菊助 鶴岡 八右衛門 羽衣 茂庭愛蔵 耶耶 八右衛門 舟辨慶 八右衛門 鶴 八右衛門 祝言 八右衛門	御西曲輪ニ於テ御能アリ。(中略)以上十一番ナリ御能組畧ス。		貞山公-36 3-693
		4/24	記載なし	十番	高砂 寛盛 定家 是界 三輪 黒塚 自然居士 海士 現在鶴 祝言	戌辰。御能アリ、寺院方ヲ饗セラル。(中略)以上十番、櫻井八右衛門役ス御能組畧ス。		貞山公-36 3-693
		閏10/10	内馬場経殿友成宅	記載なし	記載なし	内馬場経殿友成宅へ饗シ奉ルニ於テ、御出、御拍子アリ。		貞山公-36 3-702
		1633	寛永10	9/13	西曲輪	記載なし	御能組不傳	御西曲輪ニ於テ御能アリ御能組不傳。
9/15	西曲輪			記載なし	記載なし	御西曲輪ニ於テ御能アリ。		貞山公-37 4-146
10/27	高屋法橋快菴宅			拍子	記載なし	卯刻高屋法橋快菴宅へ饗シ奉ルニ就テ御出、御拍子アリ。		貞山公-37 4-150
11/10	蟻坂丹波仲久宅			拍子	記載なし	未明蟻坂丹波仲久宅へ饗シ奉ルニ就テ御出、御拍子アリ、夜深御飯。		貞山公-37 4-150
11/18	瀬上刑部景純宅			拍子	記載なし	瀬上刑部景純宅へ御出、圍ニ於テ御茶ヲ饗シ奉ラル、御拍子アリ。		貞山公-37 4-150
12/12	岡本竹菴宅			拍子	記載なし	岡本竹菴宅へ饗シ奉ルニ就テ御出、御拍子アリ。		貞山公-37 4-150
1634	寛永11	2/23	伊達安房成實宅 数奇屋の表	九番	竹生島 兼平 井筒 鶴 蓮成寺 小袖曾我 村若 耶耶 是界	天氣好、寅刻伊達安房殿成實宅へ御出、数奇屋ニ於テ御茶饗シ奉ラル。(中略)巳刻表へ御出、御能仰付ラル、(中略)以上九番アリ。		貞山公-38 4-157
		3/7	葛西紀伊俊信宅	記載なし	記載なし	葛西紀伊俊信宅へ饗シ奉ルニ就テ御出、御能アリ。		貞山公-38 4-160
1635	寛永12	10/16	伊達兵部殿宗勝宅	記載なし	記載なし	伊達兵部殿宗勝宅へ饗シ奉ラルニ就テ御出、御能廿二踊アリ。		貞山公-38 4-193
		11/7	山岸十太夫重成宅	拍子	十大夫	山岸十太夫重成宅へ饗シ奉ルニ就テ御出、御拍子アリ、十大夫御鞍三口獻上ス。		貞山公-38 4-193
		11/22	石田将監興純宅	拍子	記載なし	石田将監興純宅へ饗シ奉ルニ就テ御出、御拍子アリ。		貞山公-38 4-193
		11/28	佐々若狭元綱宅	記載なし	記載なし	佐々若狭元綱宅へ御出、饗シ奉ル。御能アリ、且ツ和歌ヲ饗セラレ、若狭嗣子又作定綱ニ賜フ。		貞山公-38 4-193
1636	寛永13	1/14	石母田大膳宗頼宅	記載なし	記載なし	石母田大膳宗頼宅へ御出、饗シ奉ル、座敷能アリ。		貞山公-39上 4-203
		2/25	中島監物貞成宅	拍子	記載なし	中島監物貞成宅へ饗シ奉ルニ就テ御出、御拍子アリ。		貞山公-39上 4-205
		3/18	茂庭周防良綱宅	記載なし	記載なし	茂庭周防良綱宅へ饗シ奉ルニ就テ御出、御能アリ。		貞山公-39上 4-210
		3/21	伊達三河守殿宗泰	拍子	記載なし	伊達三河守殿宗泰へ御饗應トシテ御出、御拍子アリ。		貞山公-39上 4-210
		3/24	小田邊主膳茂成宅 書院	拍子	記載なし	早朝、小田邊主膳茂成宅へ御出、数奇屋ニ於テ御茶差上ク、夕御膳書院ニ於テ饗シ奉ル、(中略)御拍子アリ。		貞山公-39上 4-210
		3/28	西曲輪	記載なし	記載なし	御西曲輪ニ於テ御能アリ、寺院方并二居士見物仰付ラル。此節櫻花盛ナリ。		貞山公-39上 4-213
		3/29	西曲輪	記載なし	記載なし	御西曲輪ニ於テ御能アリ、公詩ヲ賦セラル見物ノ華不傳。		貞山公-39上 4-215
		4/16	南次朗吉政吉宅	拍子	記載なし	南次朗吉政吉宅へ御出、今度御申ノ為メ、書院御座間トシテ建テ下サルニ就テ、饗シ奉ル、御拍子アリ。		貞山公-39上 4-215
		5/24	—	—	—	—	—	政宗死去

7. 考察

第12次調査の成果に関し、主に2点について若干の考察を行う。まず初めに、今回検出された遺構群の時期的変遷について検討し、次に、大広間跡北側で検出された礎石建物跡の性格について検討を加える。そして最後に今後の調査課題についてまとめを行う。

① 検出遺構の時期的変遷について

今回検出された遺構群の検出面や切り合い関係を基に、遺構の変遷案を作成した(第33図)。I～V期に大別した。以下その概要を記す。

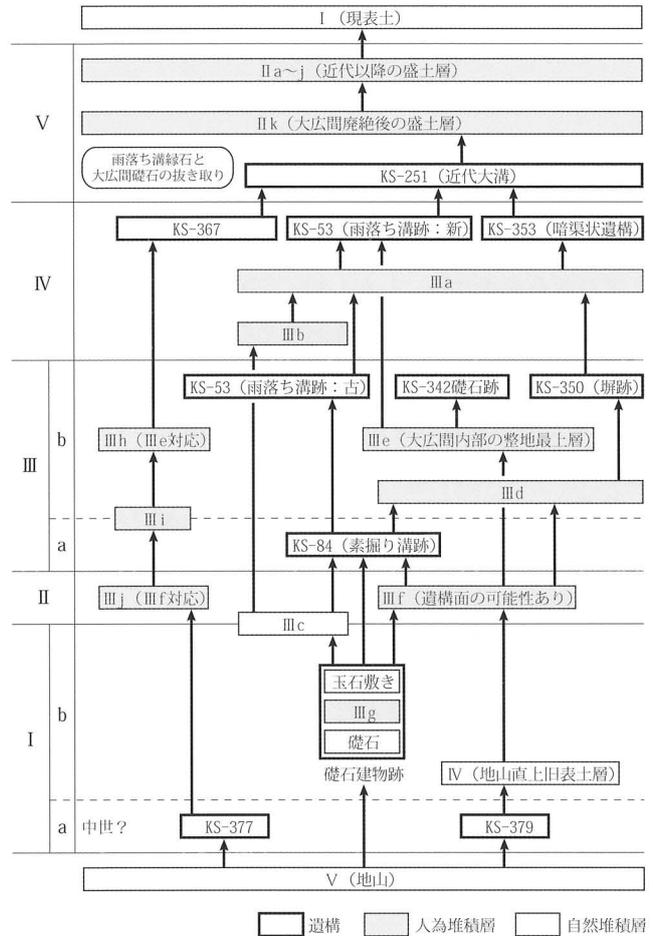
(I期) V層(地山)上面に形成された遺構である。IaとしたKS-377・379はIbとした礎石建物跡に伴う可能性もあるが、特にKS-379は地山上面の旧表土層であるIV層の直下で確認されているため、礎石建物跡以前の遺構である可能性が高い。礎石建物跡の年代については、IIIg層より採取した炭化物の放射性炭素年代測定を実施しており、暦年校正した結果概ね16～17世紀前半の年代値を得た。

(II期) IIIf層上面の遺構を想定し設定した。IIIf層は地山直上、IIIe層直下に堆積し、现阶段では大広間跡周辺における最初の大規模な整地層である。主に、第2節で述べた尾根線の東側に分布する。IIIf層上面の遺構については、面的には未確認である。しかし調査区東部における断面観察で、IIIf層上面に根固めの可能性がある円礫の集中や、瓦片が認められ、遺構面が存在した可能性は高い。また、今のところIIIf層中から遺物の出土は無く、直上にのるIIIe層中には小さな瓦片が複数含まれる点も、この2つの層の整地時期が異なる可能性を示唆している。

I期と区別したのは、礎石建物跡に伴う石敷きの東端で、IIIg層及び石敷きがIIIf層に切られ、石敷きの一部に二次堆積が認められた事による。现阶段では、これらが一連のものである可能性は低い。

(III期) KS-53(古)が形成される段階である。KS-84(素掘り溝跡)については、一段階古い可能性もあるため細分したが、その埋土の特徴から比較的短期間の内に埋没したとみられ、雨落ち溝跡と相似の平面プランを持つ事から、両者は大広間建設に関わる一連のものであった可能性が高い。

KS-53(古)の掘り込み面は今回確認できなかったが、IIIe層上面である蓋然性が高い。根拠の一つは、IIIe層上面と雨落ち溝跡縁石上面のレベル差である。これまでの調査により、雨落ち溝跡南辺部では雨落ち溝跡から建物跡内部に向かって縁側部分、座敷部分と階段状にレベルが上がっていく事実を確認している。KS-53(新)では、大広間北側への盛土(IIIa層)に合わせてレベルが上がっており、改修前のKS-53(古)では南辺部と同様本来15cm程度のレベル差があったものと考えられる。これに関して、KS-53(古)の埋土上層から検出された平坦面をもつ石材は、本来雨落ち溝の玉石が入る部分に接した面が二次的加工により直線状に整形され、更には石材上面の傾きを調節するように、石材の直下に小型の石材が詰められていた事から、雨落ち溝古段階の縁石であった可能性が高い。この石材上面のレベルは115.478mで、今回の調査区内におけるIIIe層上面の平均レベル115.650mと差は約17cmとな



第33図 主要検出遺構変遷案

る。よって現段階では、KS-53（古）はⅢe層の整地後に埋設されたものと推定される。

なお、今回の変遷案でKS-84をⅡ期から区別したのは、このKS-84・Ⅲe層・KS-53（古）を一連のものと想定したことによるが、今後、特にⅢf層上面における遺構配置の確認と併せて、更なる検討が必要である。

また、KS-350（塀跡）はKS-53（古）と同様、一度Ⅲa層に覆われた後新しい遺構（Ⅳ期）に切られており、その意味でⅢ期とした。よって、KS-53（古）とKS-350（塀跡）が初めから共存していたか否かは、厳密には判断できない。なお、KS-350は本丸石垣解体前の調査により、Ⅲ期石垣盛土に切られる事が確認されており、KS-350より確実に古いⅢa期以前の遺構についてはこの盛土以前に位置付ける事ができる。

（Ⅳ期）Ⅲa層上面に形成された遺構である。KS-53（古）を改修したKS-53（新）やKS-350のほぼ直上につくられたKS-353（暗渠状遺構）が含まれる。KS-367（暗渠状遺構）については、Ⅲa層との切り合い関係は無いが、大広間北側周辺におけるこれらの排水整備に関連するものと判断しⅣ期とした。これら改修の時期については現時点では不明と言わざるを得ない。しかしKS-353は、Ⅲa層を介しながらもほぼKS-350の直上にある事から、KS-350と比較的近い時期に形成された可能性が考えられる。すなわちKS-350が現存Ⅲ期石垣の構築に伴い廃絶したとすれば、Ⅲa層やKS-353についてもそれとの時間的隔たりは比較的少ないと推測される。

（Ⅴ期）大広間の廃絶以降をⅤ期とした。KS-251（近代溝状遺構）やⅡ層が含まれる。KS-251は、大広間廃絶後に形成された中でも最も古い遺構である。遺構の時期に関しては、底面近くから明治前半に属する磁器皿が2点出土している。また遺構の壁面に接して大広間の礎石とみられる石材が検出された事や大広間礎石や雨落ち溝縁石の抜き取り後の盛土層であるⅡk層が、KS-251がほぼ埋没した直後に堆積している事から、一般に明治7～8年頃といわれる大広間破却から遠くない時期に形成されたものと考えられる。

②礎石建物跡の性格について

大広間跡北側より検出された石敷きを伴う礎石建物跡について、主に能舞台との関連性について検討を行う。一般に能舞台とは、3間四方からなる本舞台、斜めに延びる橋掛り、そして役者が面をつける鏡の間を合わせた総称とされる。また、舞台周辺には白洲と呼ばれる石敷きが伴う。その規格は、安土桃山時代にほぼ定式化したとされ、現存する日本最古の能舞台である京都市西本願寺北舞台（懸魚に天正9年〔1581〕の墨書紙片あり）の規格をみても、後に続く能舞台と基本的に同じものである。ただ、舞台正面からみて本舞台の後ろや右手に付く後座や地謡座の大きさ、橋掛りの取り付く角度など細かい点ではそれぞれ違いが存在する。これまで日本における能舞台の調査事例は必ずしも多くないが、代表的なものでは尾張藩・加賀藩・大聖寺藩江戸上屋敷や彦根城、肥前名護屋城堀秀治陣屋跡などでの検出例が知られる。能舞台との判断に際しては、①本舞台における4本柱の検出及びその柱間、②橋掛りの検出、③舞台下の下部構造の検出、④絵図等との照合などが主要な根拠となっている。

今回の礎石建物跡については、礎石4石のみの検出であり全体の規模・形状を知る事が出来ない。ただ礎石No.1～3の建物跡南辺については、西側延長線上にあるKS-376・372が伴うとすれば一辺約6mになり、ほぼ3間の長さとなる。一方建物跡東辺については、礎石No.4の北側延長線上にKS-375があり、更に北へ延びる可能性もあるが、KS-251に切れ確認する事が出来ない。しかし石敷きの検出範囲から見ても、建物跡は礎石No.3を南東角として北西方向に展開したものとみられる。また礎石列が大広間に対し斜めに延びる事から、橋掛りの可能性も考え、周辺から検出された他のピット群との組み合わせを検討したが、確証を得るには至らなかった。また建物跡内部から、他の調査事例に見られる襖を置くためのピットや漆喰枅といった下部構造は検出されなかった。

以上から、先述した能舞台判定の根拠①～③についてはいずれも確証が得られず、今回検出した遺構を能舞台と断定するには至らなかった。また、仮にこの建物跡が能舞台であるとしても、礎石建物跡は時間的に大広間跡に先行する事から、能を鑑賞する見所の場所が新たに問題となる。今後、更なる検討が必要である。

③今後の調査課題について

今回の調査では、その性格は不明であるが、大広間跡に先行する具体的な建物跡の存在が初めて明らかになった。また大広間跡についても、雨落ち溝跡の改修や排水施設の整備など遺構の変遷が確認された事から、今後本丸平場北半における遺構の変遷を検討していく上で、一つの見通しが得られたと言える。大広間の成立に関して特に重要なのは、Ⅲf層上面における遺構の確認である。現在は攪乱等の壁面で確認されているに過ぎない。今後、Ⅲf層がより厚く堆積する大広間跡東側を中心にした、より詳細な整地層及び遺構面の検討が必要である。礎石建物跡の評価も、塀跡など遮蔽施設も含めた様々な遺構配置全体の中で行うべき今後の課題である。

また大広間の排水処理に関して、雨落ち溝跡玉石部分の検出レベルをみると、西辺、北辺に比べ東辺、南辺で低く10～20cmの差が見られる。雨落ち溝跡掘り方底面のレベルでも西辺車寄せ部分に比べ南東角部では約20cm低い。周辺の原地形は、元々御成門跡から東へ向け傾斜するが、大広間内部の整地上面のレベルは東西でほとんど差が無い事から、雨落ち溝跡のレベル差についても、自然地形の影響というよりは排水処理を意図した計画的なものと考えられる。今後、大広間跡外側への排水系統が確認されるとすれば、最もレベルの低い雨落ち溝跡南東角部である可能性が高い。

今後、仙台城跡における御殿配置の研究は、原地形、整地層の分布、塀跡など区画施設、そして排水系統の検討を総合的に行い、進めていく必要がある。

8. まとめ

第12次調査では、以下①～⑤の成果が得られた。

①大広間跡に関して、礎石根固め跡（KS-342）1基の他雨落ち溝跡（KS-53）北辺の一部を検出した。雨落ち溝跡は近世期において改修を受けている事が確認された。

②大広間跡から南北方向に延びる暗渠状遺構（KS-353）を検出し、大広間雨落ち溝跡の改修に伴い整備されたことが確認された。また、暗渠状遺構の直下から塀跡（KS-350）を検出した。

③大広間跡北側から、大広間跡に先行する礎石建物跡を1棟検出した。礎石は4石がL字形に並び、大広間跡に最も近い礎石No.3は雨落ち溝跡から北3mに位置する。礎石No.1～3の軸線は、大広間跡東西軸線から北へ20°振れる。礎石の柱間は西から1.48m・1.48m・1.53mである。礎石の平面形は4石とも楕円形を呈し、大きさは最大長で28.5～48.0cmである。礎石上面のレベルはNo.1・2に比べNo.3・4が6、7cm低い。礎石は地山（V層）上面から掘り込まれた掘り方内に直接置かれ、根固めなどは確認されなかった。

Ⅲg層は礎石の周縁部に接する粘質土で、その上面には径1～3cmの玉砂利が敷かれる。玉砂利の一部は礎石の周縁を覆うように検出された。敷石は建物跡外側で、南側で礎石列の心々ラインから幅1.5m以上、東側で同様に幅0.9mに分布する。

④遺物としては、金銅金具・銅釘・陶器・磁器・土師質土器・瓦などが出土した。

⑤9点の土壌サンプルに対し、以下の理化学分析を行った。

珪藻分析では、KS-353・84からほとんど珪藻の検出が無く、珪藻が生育できない堆積環境であったと推測された。蛍光X線分析では、KS-353より採取した白色土が石灰岩や貝殻を給源としたカルシウムを主成分とする漆喰である可能性が高いとの結果を得た。放射性炭素年代測定では、補正¹⁴C年代値で320±40年BP・270±40年BP・270±40年BPの結果を得た。また、これらの年代値を暦年較正し、概ね16世紀から17世紀前半におさまる結果が示された。

V 第13次調査

1. 調査目的及び調査経過

第13次調査は、三の丸巽門跡の東側周辺を主な対象として、平成17年〔2005〕11月1日から同年12月22日まで遺構確認のための発掘調査を実施した。最終的な調査面積は86㎡である。

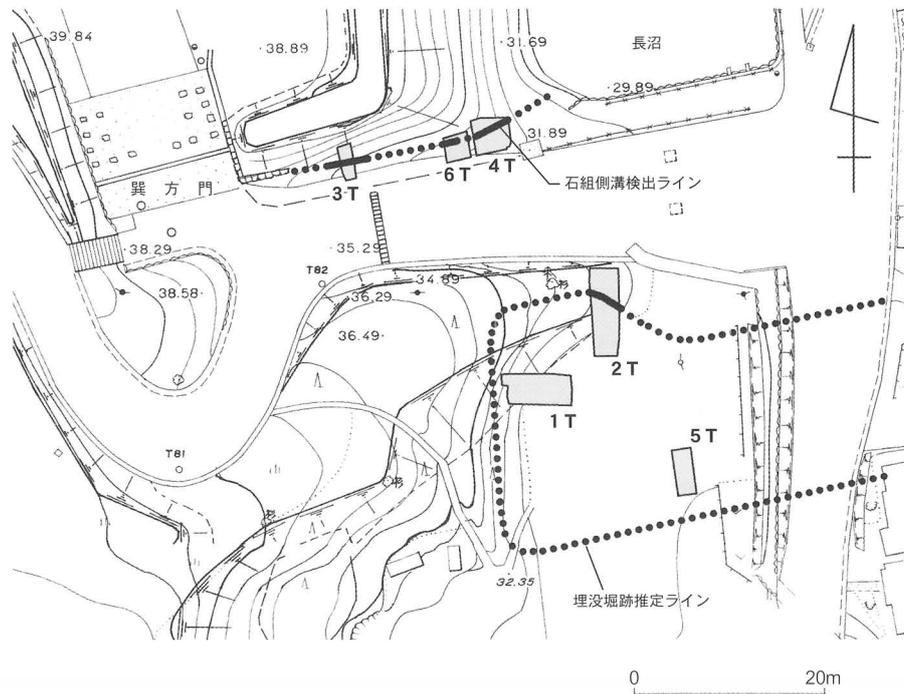
調査目的は、①長沼の南側に位置し、明治末年に埋没した堀跡の確認（1・2・5トレンチ）、②巽門跡東脇の土塁裾部における石垣などの遺構確認（3・4・6トレンチ）の2点である。

調査区の設定や調査前の現況写真撮影、遺物の表面採集等の後、11月4日から安全フェンスを設置し、11月8日から重機による表土の除去作業を開始した。また、重機の入りにくい箇所を中心に、11月7日から人力による表土除去及び遺構面の検出作業を開始した。

埋没堀跡の調査では、第2トレンチから埋没した堀跡の北岸の一部を検出した。また堀の落ち際に北西から南東方向に伸びる暗渠状の石列を検出した。この遺構の検出面は地表面下約1mで、同じ面から掘り込まれた遺構中より、幕末から明治期に属する陶器が1点出土した。堀跡の西岸・南岸の検出を目的とした第1・5トレンチでは堀跡を検出するに至らず、それぞれ掘り跡は、より西側、南側にあったものと推定される。

巽門跡東脇土塁裾部の調査では、特に第4トレンチにおいて巽門跡から長沼へと続く石組側溝を良好な状態で検出した。これにより、調査前に石垣と思われた石列が石組側溝縁石の片側である事が明らかとなった。また、これと対になる縁石については、土塁南側の登城路が近代以降大規模に削平されたため消失しており、路面のレベルは最大で1.5m程下がっている事が確認された。また土塁については、第3トレンチの断面観察により厚さ約3.5mの版築状の積み土を確認した。また積み土の直下では土塁構築以前の旧表土が確認された。土塁の下部は地山の削り出しにより形成されている。遺物は瓦、磁器、陶器、鉄製品などが出土した。

第13次調査は、平成17年3月23日の第12回仙台城跡調査指導委員会において、調査箇所や目的、方法について了解を得て、第12次調査終了後に実施した。調査の進展に伴い、11月29日・11月30日・12月1日に仙台城跡調査指導委員会委員の現地指導を受けた上で、12月8日に記者発表（5社）、12月10日（土）に現地説明会を実施した（112名



第34図 トレンチ配置図



第35図 調査前現況（南東から）



第36図 調査前現況（東から）



第37図 調査前現況（東から）

参加)。12月20日に再び調査指導委員の現地指導を受け、12月22日には調査区の埋め戻しやフェンス撤去等の作業を終え、調査箇所は現状に復した。また、12月26日には調査指導委員による、城の縄張りを中心とした調査指導を受けた。平成18年3月17日に第14回仙台城跡調査指導委員会を開催し、調査成果の最終的な確認を行った上で、本報告書を刊行するに至った。

2. 旧地形及び基本層序

現在、仙台市博物館のある三の丸跡は広瀬川右岸に形成された下町段丘面上に位置しており、その東側に残る全長約250mの堀跡（現長沼）との間には、比高約10mの段丘崖が形成されている。今回調査対象とした箇所のうち、石組側溝を検出した第4トレンチがこの段丘崖の裾部にあたる。この箇所の標高は32～33mである。また、第4トレンチの調査では、長沼方向への岩盤の急激な落ち込みが確認されており、現存の堀跡（長沼）についても、旧河道のような旧地形を利用したものと推定される。今回調査対象とした埋没堀跡についても同様な旧地形を利用した可能性が高い。

基本層序は、埋没堀跡に設定した第1・5トレンチと第2トレンチそして土塁裾部に設定した第3トレンチと第4・6トレンチでそれぞれ個別に設定した。

まず堀跡については、埋没過程が最も良く理解される第2トレンチについて説明する。第1・5トレンチについては、これと必ずしも層名は対応しないがほぼ同様の堆積過程を示している。基本層はⅠ層（表土）・Ⅱ層（水成堆積砂礫層）・Ⅲ層（盛土）・Ⅳ層（崩落土）・Ⅴ層（堀内堆積土）・Ⅵ層（盛土）・Ⅶ層（盛土）・Ⅷ層（水成堆積土）に大別される（第40図・第21表）。以下Ⅱ層より概要を記す。

Ⅱ層は近代以降に堆積した砂礫層で炭ガラを多く含んでいる。堀跡は最終的にこのⅡ層の堆積により、ほぼ完全に埋没したものとみられる。Ⅲ層は近代以降の盛土層とみられ、砂質シルト・シルト質砂を主体とする。3層に細分した。第2トレンチ北半部を中心に分布する。北壁では層厚が1m程あり、トレンチの北側より流れ込んでいる事から、現在の路面は近代以降大きく改変された可能性が高い。Ⅳ層は、北側から堀跡にかけての斜面部を中心に堆積する砂質シルトで、全体的にしまりが無く崩落土と考えられる。3層に細分した。Ⅴ層は堀跡内の堆積土であるが、Ⅳ層と同様、崩落土とみられ、砂質シルト、シルト質砂を主体とする。2層に細分した。このうちⅤb層は、堀跡壁面の直上に堆積しており下部には鉄分の集積が見られる。Ⅵ層は、堀跡の落ち際から検出されたKS-378の直上を覆う砂質シルト層である。3層に細分した。トレンチ北半部を中心に分布する。Ⅶ層はKS-378の直下に堆積し、砂質シルトを主体とする。3層に細分した。このうちⅦa層上面がKS-378の掘り込み面である。Ⅷ層は地表下130cmで確認された水成堆積層である。4層に細分した。調査面積が狭く詳細は不明であるが、南北方向に土層の落ち込みラインが検出され、Ⅷ層全体が西側へ傾斜して堆積する状況が確認された。

土塁裾部の調査では土塁本体を対象とした第3トレンチと、石組側溝等を主な対象とした第4・6トレンチでは基本層序が異なるため、以下、個別に記述する。

第3トレンチにおける基本層序は、Ⅰ層（表土）・Ⅱ層（近代盛土）・Ⅲ層（土塁積み土）・Ⅳ層（旧表土）・Ⅴ層（段丘堆積物）に大別される（第41図・第22表）。Ⅵ層以下については、第4・6トレンチに対応するが、第3トレ

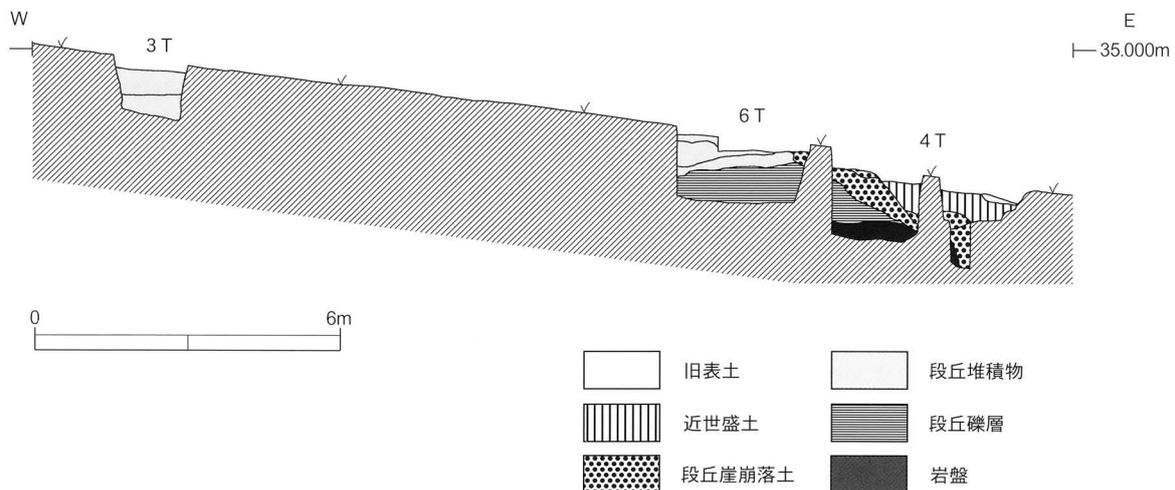
ンチで確認されたのはⅧ層のみである。以下Ⅱ層より概要を記す。

Ⅱ層は近代以降の盛土層であるが、土塁南側の登場路が大規模な削平を受けた後に堆積したものである。Ⅲ層は粘質シルトの土塁積み土である。3層に細分した。特徴の異なる土層が縞状に堆積し、版築状の特徴を示している。層厚は約3.5mである。Ⅳ層は土塁形成以前の旧表土層である。2層に細分した。なおⅣb層はⅤ層との漸移層である。Ⅴ層は粘質シルトの段丘堆積物である。2層に細分した。

第4・6トレンチにおける基本層序は、Ⅰ層（表土）・Ⅱ層（近代盛土）・Ⅲ層（旧表土）・Ⅳ層（近世盛土）・Ⅴ層（崩落土）・Ⅵ層（旧表土）・Ⅶ層（崩落土・旧表土）・Ⅷ層（段丘堆積物）・Ⅸ層（段丘礫層）・Ⅹ層（岩盤）に大別される（第38・42図・第23表）。以下Ⅱ層より概要を記す。

Ⅱ層は、第4トレンチから検出された石組側溝を最終的に埋めた盛土層である。Ⅲ層は石組側溝の底部がコンクリートにより補強された後堆積した旧表土層である。このコンクリートの存在は、石組側溝が近代以降もある程度機能していた事を示している。現在、石組側溝はそのほとんどが片側の縁石のみ残っている状態で、ある時期大規模な路面の削平があった事を示している。Ⅲ層からⅡ層が堆積する間にこの削平工事が実施されたものとみられる。Ⅳ層は石組側溝構築以前の盛土層で、近世期に属する。径1～5cmの礫や炭化物を含む砂質シルトで、原地形の傾斜に沿って東に向け厚く堆積する。調査区内で確認された層厚は最大で110cmである。石組側溝はⅣ層上面より構築されたものと考えられる。

Ⅴ層は段丘崖の斜面上に堆積した砂質シルト層で、崩落土とみられる。2層に細分した。Ⅵ層は暗褐色の砂質シルト層で、トレンチ北半部では段丘礫層（Ⅸ層）の直上に堆積しており、旧表土層とみられる。Ⅶ層は段丘礫層を切って岩盤（Ⅹ層）の直上に堆積する崩落土で、4層に細分した。このうち特に最下部のⅦd層は、黒褐色の砂質シルト層で一部Ⅸ層の巻き上げが見られる事から、段丘崖形成後の旧表土層と考えられる。Ⅷは下町段丘面を構成する段丘堆積物で、黄褐色又はオリーブ褐色の砂礫層を主体とする。6層に細分した。このうち、Ⅷa・Ⅷb・Ⅷc層は第6トレンチ、Ⅷd・Ⅷe・Ⅷf層は第3トレンチでそれぞれ確認されたが、両者の前後関係については不明である。互いに連続する可能性もあるが、土質及び土色等の違いから今回の調査では個別に層名を付けた。なお段丘礫層直上のⅧb層・Ⅷc層については、水成堆積を示すラミナ状の構造が顕著に認められる。Ⅸ層は下町段丘面の基底礫層と考えられる。岩盤直上に堆積しており、Ⅶd層に切られ第4トレンチのベルト東側では確認できない。層厚は120cm以上で、その上面は西側へ緩やかに傾斜する。第3トレンチで、対比される礫層は確認できない。Ⅹ層は、凝灰岩もしくはシルト岩と思われる岩盤である。第4トレンチでのみ確認した。調査区西半では、緩やかな起伏を持ちながらもほぼ水平に堆積するが、東半では東側への急な落ち込みを確認した。



第38図 土塁裾部基本層断面図

3. 検出遺構

(1) 埋没堀跡及び関連遺構

第2トレンチにおいて北岸の一部を検出した。上端ラインは北西から南東方向に延びる。また、第2トレンチの南10mに設定した第5トレンチでは堀跡を検出するに至らなかった。確実な近世期の遺構面までは掘り下げていないが、地表下1m程で著しい湧水が見られる事から、検出された土層は堀内部の堆積物であるとみられる。このことから、堀跡の南北幅は20m以上になると推定される。西岸の検出を目的とし設定した第1トレンチでは、西側にある土塁からの崩落土が厚く堆積しており、堀跡の壁面を検出するには至らなかった。遺物は、第2トレンチで検出した上端ライン近くより鉄製品が2点並んで出土した。

・KS-378暗渠状遺構 第2トレンチで検出された堀跡上端ラインに沿って、その落ち際より検出した。掘り込み面はVIIa層及びVIIc層上面である。遺構は、径10~25cmの円礫及び割り石が帯状に集積され、幅は80~90cmで全長約3.6m分を検出した。また、KS-378は北西から南東方向へ傾斜しており、最も高い第2トレンチ北西部では標高約30.7mであるのに対し、最も低い堀跡の上端ライン付近では標高約30.0mで、長さ3.6mで約70cmのレベル差が見られる。掘り方の規模は石の集積とほぼ同じ幅で、深さ約40cmである。掘り方の断面は調査区西壁で一部確認できるが、底面はほぼ平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は暗灰黄色のシルト質砂で凝灰岩粒を多量含んでいる。埋土中より遺物の出土は見られなかった。

(2) 石組側溝

巽門跡東脇土塁裾部の調査では、巽門跡から長沼へと続く石組側溝を検出した。特に第4トレンチにおいては縁石の両側が残る良好な状態で検出され、第3・6トレンチでは片側のみが検出された。これにより調査前、石垣とみられた石列が石組側溝の縁石である事が明らかとなった。石組側溝の掘り方は、第3・6トレンチでは地山(段丘堆積物)を直接掘り込むが、堀(現長沼)に近い第4トレンチでは一度盛土(IV層)した後形成されている。また、今回調査した中では縁石の直下から根固め等の基礎構造は確認されず、掘り方の底面に直置きしている事が明らかとなった。なお、第3トレンチでは縁石の背後から円礫がまとまって検出された。

石組側溝は両側に縁石を据えた後、底面に平坦な河原石を敷き詰めており、以前実施した登城路跡の調査で検出された石組側溝と同様の構造である。縁石は巽門跡から第6トレンチまでは、正面35×40cmで控え30cm程度のものが多く、加工はハツリ主体で天端に若干ノミ加工が見られる。一方第4トレンチの東寄りで見出された縁石は正面40×70cmで控え50cmと大きく、全面にノミ加工が施されている。また、第4トレンチ中央で見出された縁石の上面に、5.5cm角の孔が確認されたが、反対側の縁石では確認されない事から礎石の転用であるとみられる。

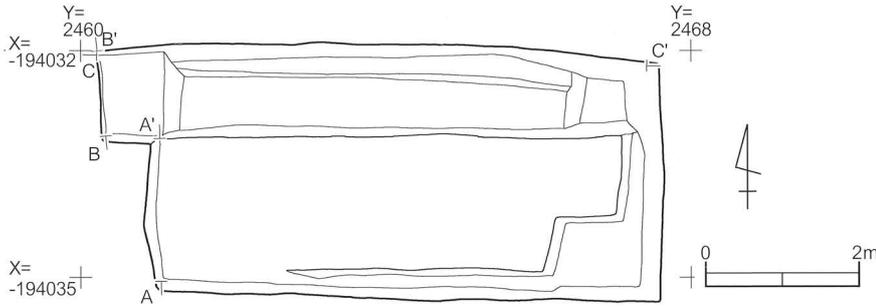
石組側溝は明治以降も一定期間機能していたとみられ、底石の直上にはコンクリートが敷かれていた。コンクリート上に堆積した旧表土層(III層)を挟んで、登城路路面の削平を契機とする盛土(II層)によって石組側溝は完全に埋没した。

また第3・6トレンチの石組側溝については、路面が近代以降大規模に削平されたため縁石の片側が消失した状態で、現況の路面レベルは1.5m程下がっている事が確認された。

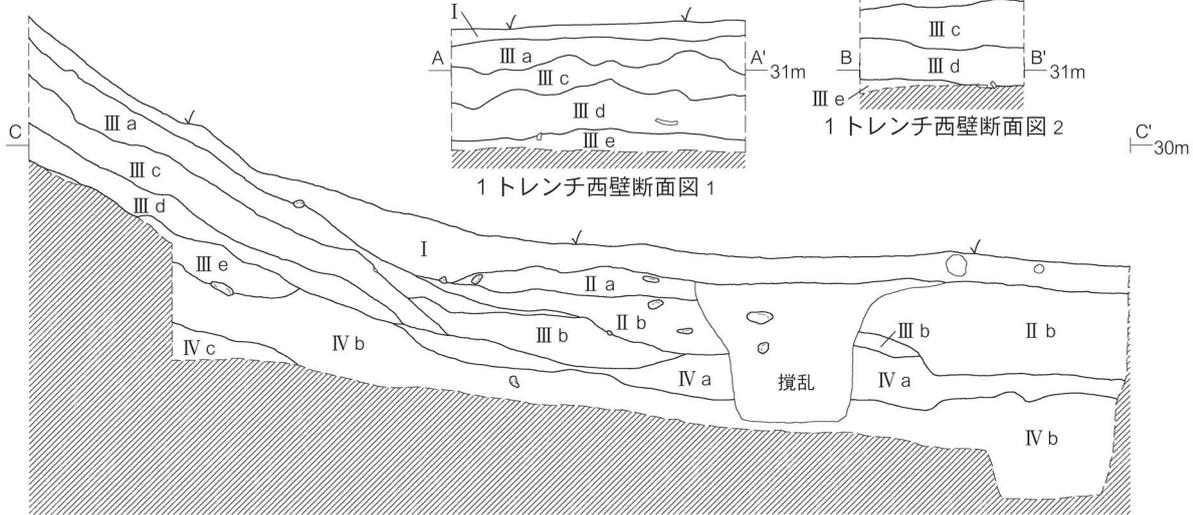
(3) 巽門跡東脇土塁

仙台城内の石垣・土塁の修復許可に関する天和元年[1681]の江戸幕府老中奉書には「巽之門東脇土手」との記載があり、今回調査した土塁に相当するものと考えられる。

第3トレンチの断面観察により、版築状の積み土を確認した。層厚は約3.5mである。また積み土の直下で土塁構築以前の旧表土(IV層)が確認された。この旧表土より下の石組側溝までは、旧地形の斜面を利用したか、地山の削り出しにより形成されたと考えられる。土塁積み土から遺物の出土は見られなかった。



1トレンチ遺構平面図



1トレンチ北壁断面図

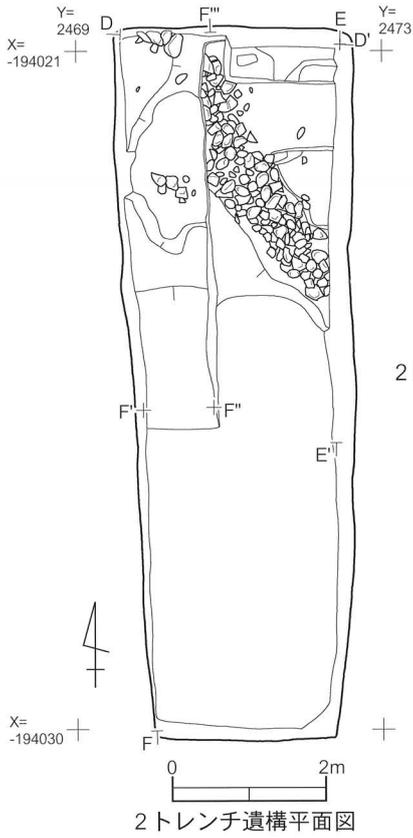
第39図 埋没堀跡：1トレンチ遺構平面図（1/100）・断面図（1/50）

第20表 埋没堀跡：1・5トレンチ遺構註記表

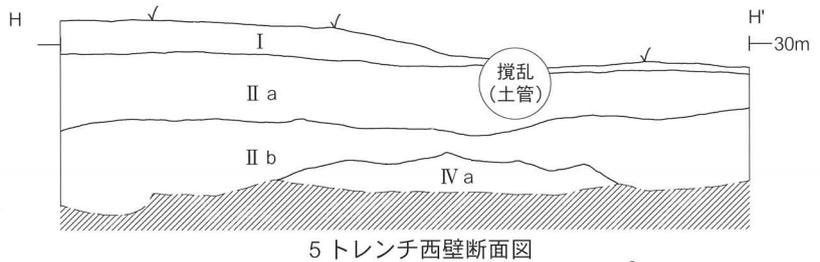
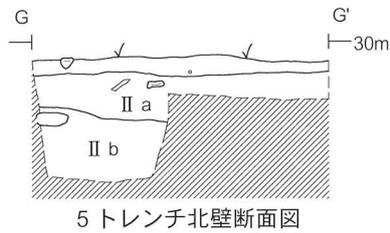
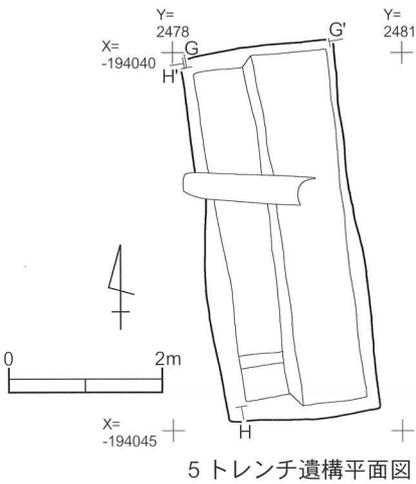
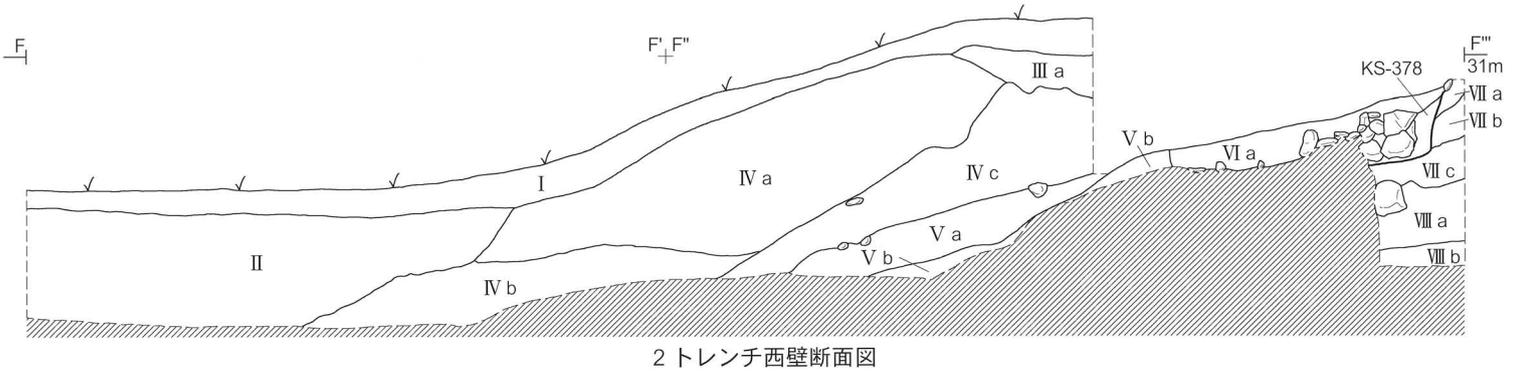
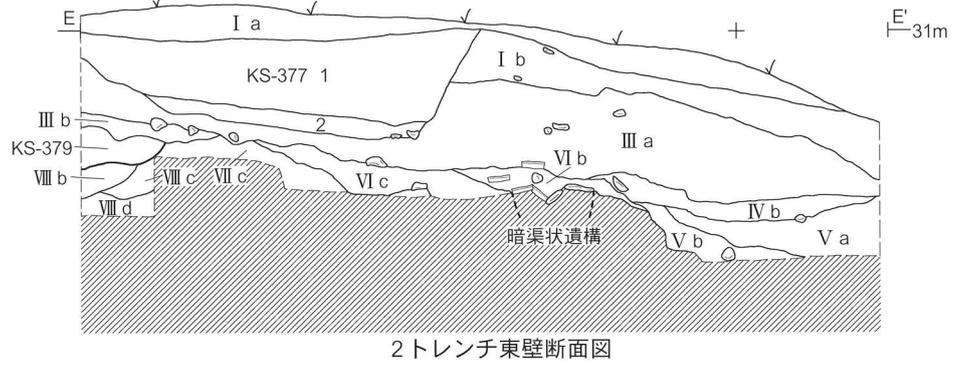
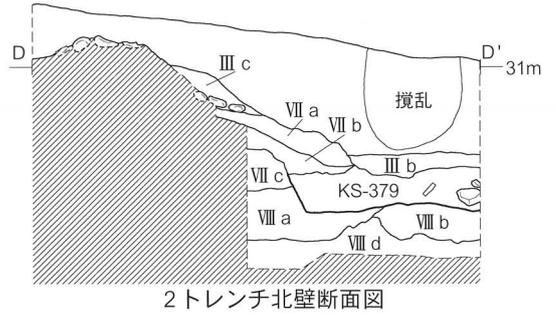
遺構番号	層位	土色		土質	土性		備考
		土色No	土色		粘性	しまり	
基本層序	I	10YR2/3	黒褐色	腐葉土	有り	無し	表土
	II a	10YR3/3	暗褐色	砂礫	有り	無し	砂礫、炭化物、瓦片を多量含む
	II b	10YR5/6	黄褐色	砂礫	無し	無し	砂礫、炭化物の互層 水成堆積層 下面に酸化鉄が集積
	III a	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	有り	無し	崩落土 径5~10mmの風化凝灰質礫を少量含む
	III b	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂質シルト	有り	有り	崩落土 下部に径5~50mmの礫を多量含む 全体にグライ化
	III c	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	有り	有り	崩落土 径5~10mmの風化凝灰質礫を多量含む 瓦片を少量含む
	III d	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	有り	有り	崩落土 径5~30mmの風化凝灰質礫を多量含む
	III e	10YR4/6	褐色	粘土質シルト	有り	有り	崩落土 上面に瓦片多く分布 旧表土か？
	IV a	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質砂	有り	無し	堀内堆積土 下部に砂が集積 径1cmの礫、瓦片を少量含む IV a層以下はグライ化
	IV b	2.5YR4/2	暗灰黄色	砂質シルト	有り	有り	堀内堆積土 径5~1cmの風化凝灰質礫と2.5YR6/2 灰黄色の粘土ブロックを少量含む
IV c	2.5YR5/2	暗灰黄色	砂質シルト	有り	有り	堀内堆積土 2.5YR6/2灰黄色の粘土ブロックを少量含む IV b層との層理面で湧水が顕著	

第21表 埋没堀跡：2トレンチ遺構註記表

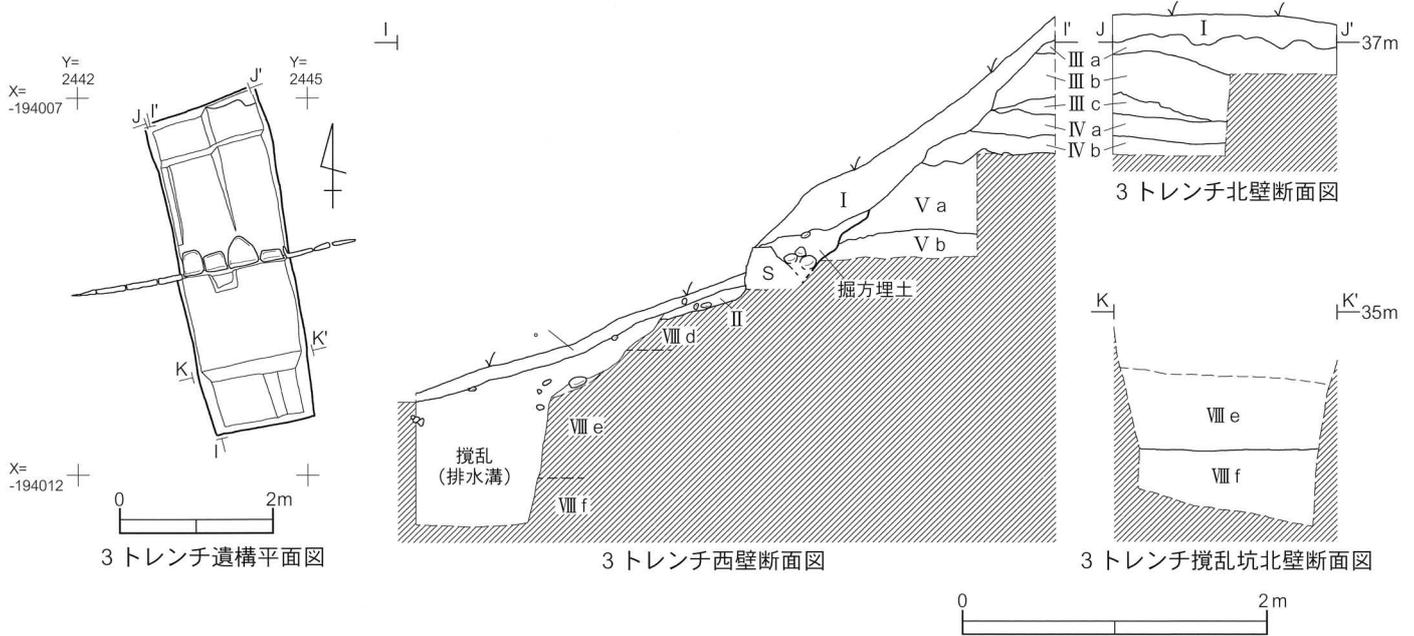
遺構番号	層位	土色		土質	土性		備考
		土色No	土色		粘性	しまり	
基本層序	I	10YR2/3	黒褐色	腐葉土	有り	無し	表土
	II	10YR5/6	黄褐色	砂礫	無し	無し	砂礫、炭化物の互層 水成堆積層 下面に酸化鉄が集積
	III a	2.5Y5/3	黄褐色	砂質シルト	有り	有り	盛土 2.5Y5/2 暗灰黄色の粘土ブロックと径5cmの凝灰岩礫を少量含む
	III b	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	有り	無し	盛土 径1cmの礫、径5mmの炭化物粒、瓦片を少量含む
	III c	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質砂	有り	有り	盛土 上面に酸化鉄の集積有り
	IV a	10YR4/4	褐色	砂質シルト	有り	無し	崩落土 径10~2cmの礫を少量含む、径5~30cmの風化凝灰岩礫を多量含む
	IV b	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	有り	無し	崩落土 2.5Y5/2 暗灰黄色の粘土ブロック、径5~15cmの礫を少量含む 全体にグライ化
	IV c	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	有り	有り	崩落土 10YR4/2 灰黄褐色の粘土ブロックを多量含む 径1cmの礫を少量含む
	V a	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	有り	有り	堀内堆積土 10YR4/2 灰黄褐色、10YR7/6 明黄褐色の粘土ブロックを多量含む 径10mmの風化凝灰岩を少量含む
	V b	2.5Y4/3	オリーブ褐色	シルト質砂	有り	有り	堀内堆積土 径5~10mmの風化凝灰岩礫を少量含む 上面に酸化鉄の集積有り
	VI a	2.5Y4/3	オリーブ褐色	シルト質砂	有り	有り	酸化鉄の集積有り 径3mmの風化凝灰岩粒を少量含む 水成堆積層
	IV b	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト	有り	有り	径5~10mmの風化凝灰岩礫を少量含む
	IV c	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂質シルト	有り	有り	径5~10mmの風化凝灰岩礫を少量含む 2.5Y5/2 暗灰黄色の砂質土をブロック状に含む
	VII a	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	有り	有り	径5~15mmの風化凝灰岩礫を多量含む 径5~15mmの炭化物と瓦片を少量含む
	VII b	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト	有り	有り	径5~15mmの風化凝灰岩礫を多量含む 径10mmの炭化物を少量含む
	VII c	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	有り	有り	径2mmの風化凝灰岩礫を少量含む 酸化鉄の集積有り 水成堆積層か？
	VIII a	2.5Y6/3	にぶい黄色	シルト	有り	有り	2.5Y4/4 オリーブ褐色の砂をブロック状に含む 2.5Y5/2 暗灰黄色のシルトとの互層 水成堆積層
	VIII b	2.5Y6/2	灰黄色	シルト	有り	有り	酸化鉄の集積有り 径3mmの風化凝灰岩粒を少量含む 水成堆積層
VIII c	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土質シルト	有り	有り	2.5Y4/1 黄褐色の粘土質シルトとの互層 径3mmの風化凝灰岩粒、炭化物粒を少量含む 水成堆積層	
VIII d	2.5Y4/3	オリーブ褐色	シルト質砂	有り	有り	上面に2.5Y4/1 灰黄色の粘土質シルトが集積 酸化鉄の集積有り 水成堆積層	
KS - 378	埋土I	2.5Y4/2	暗灰黄色	シルト質砂	有り	有り	暗渠状遺構埋土 径2~15mmの凝灰岩粒を多量含む
KS - 379	埋土I	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	有り	有り	2.5Y5/3 黄褐色砂質シルトを径1~4cmのブロック状に少量含む



2トレンチ暗渠状遺構平面合成写真



第40図 埋没堀跡：2・5トレンチ遺構平面図 (1/100)・断面図 (1/50)



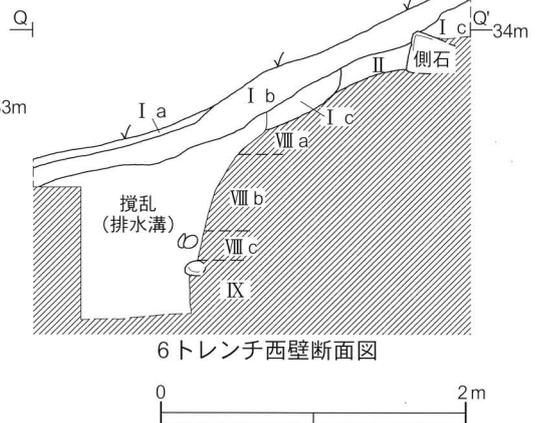
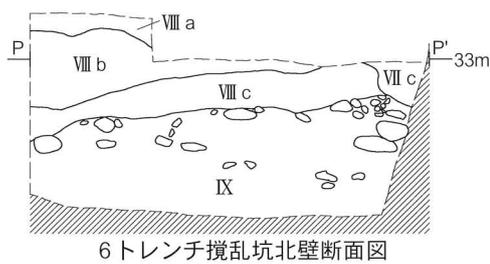
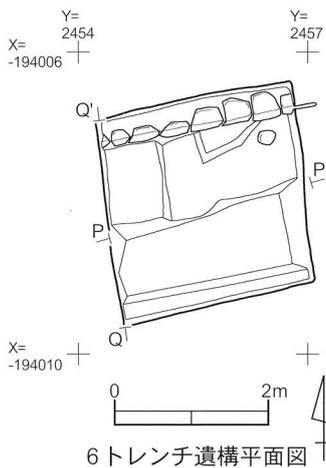
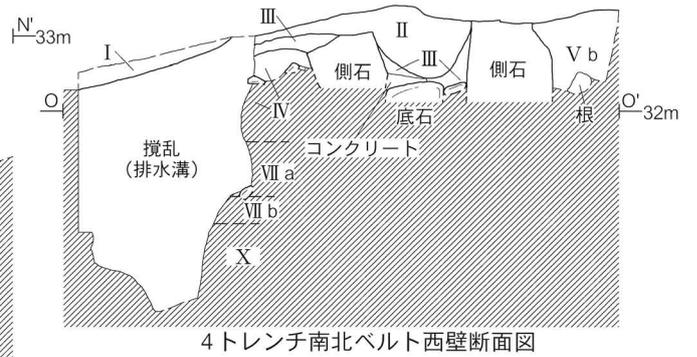
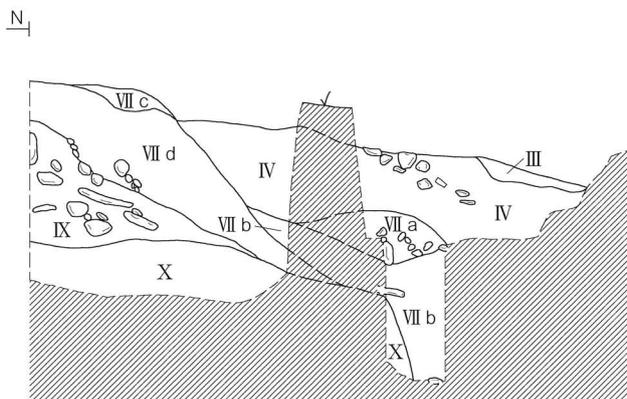
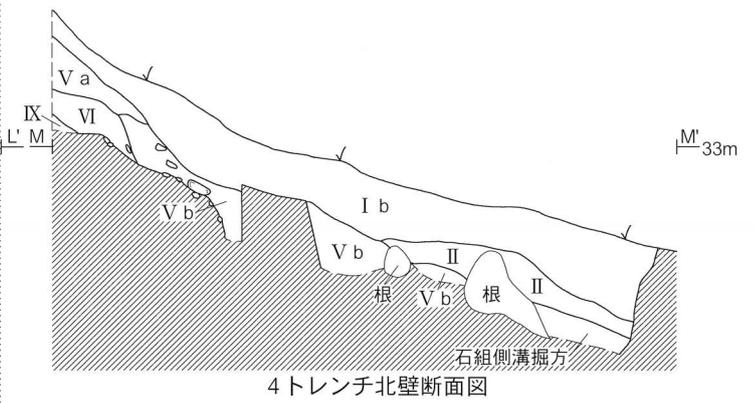
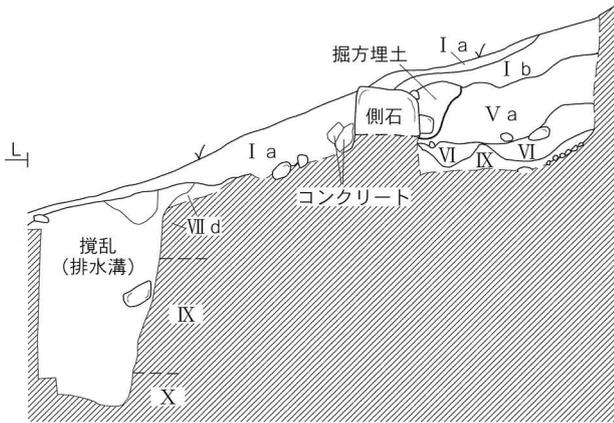
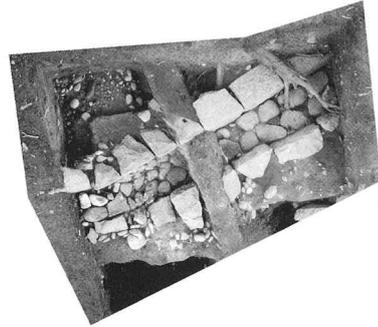
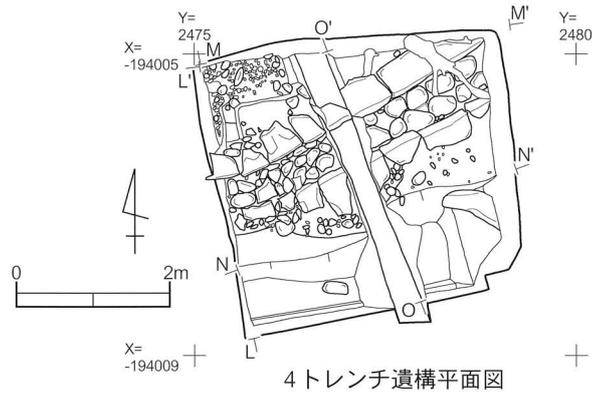
第41図 土塁裾部：3トレンチ遺構平面図（1/100）・断面図（1/50）

第22表 土塁裾部：3トレンチ遺構註記表

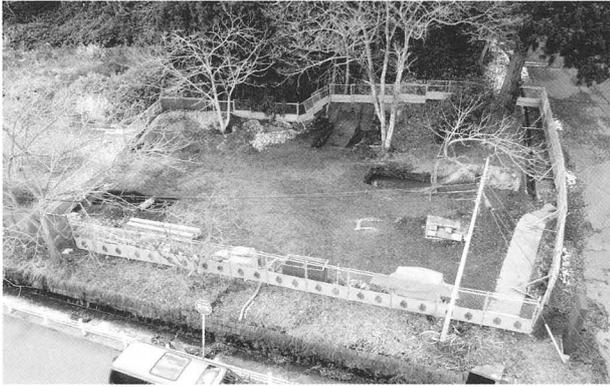
遺構番号	層位	土色		土質	土性		備考
		土色No	土色		粘性	しまり	
基本層序	I	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	有り	無し	表土
	II	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	有り	有り	径5~10cmの礫を少量含む、直下の層より10YR4/4 褐色粘土ブロックを少量含む
	IIIa	2.5Y6/2	灰黄色	粘土質シルト	有り	有り	土塁積み土 2.5Y4/1 灰黄色の粘土質シルトを縞状に含む 酸化鉄の集積有り
	IIIb	2.5Y4/1	黄灰色	粘土質シルト	有り	有り	土塁積み土 2.5Y6/2 灰黄色の粘土質シルトをブロック状に少量含む 酸化鉄の集積有り
	IIIc	2.5Y4/1	黄灰色	粘土質シルト	有り	有り	土塁積み土 2.5Y6/3 灰黄色の粘土質シルトをブロック状に多量に含む 酸化鉄の集積有り
	IVa	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	砂質シルト	有り	有り	旧表土 径1~2mmの風化凝灰岩粒を少量含む 中位に酸化鉄が面的に集積
	IVb	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	有り	有り	漸移層 径2~5mmの風化凝灰岩粒を少量含む 下部に直下のVa層をブロック状に巻き込む
	Va	10YR4/4	褐色	シルト質粘土	有り	有り	段丘堆積物 径5~10mmの風化凝灰岩粒を多量含む 径5mmの炭化物を少量含む
	Vb	10YR6/4	にぶい黄褐色	シルト質粘土	有り	有り	段丘堆積物 径5~20mmの風化凝灰岩粒を多量含む
	VIIId	10YR5/6	黄褐色	シルト質粘土	有り	有り	段丘堆積物
VIIe	10YR5/6	黄褐色	細砂	無し	有り	段丘堆積物	
VIIIf	10YR5/4	黄褐色	粗砂	無し	有り	段丘堆積物	

第23表 土塁裾部：4・6トレンチ遺構註記表

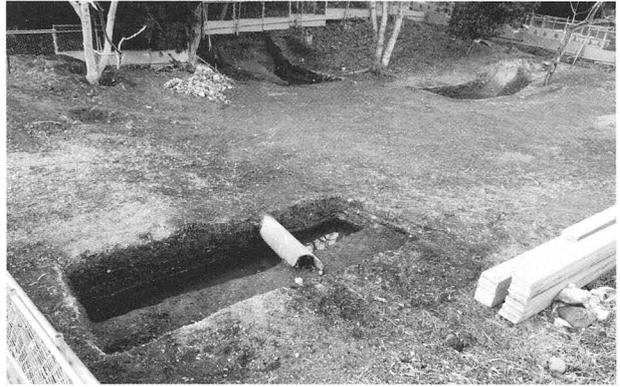
遺構番号	層位	土色		土質	土性		備考
		土色No	土色		粘性	しまり	
基本層序	Ia	7.5YR2/1	黒色	砂質シルト	有り	無し	表土
	Ib	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	有り	無し	10YR5/2 灰黄褐色の粘土ブロックを少量含む コンクリート排水溝施工後の盛土
	Ic	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	有り	無し	コンクリート排水溝施工前の旧表土
	II	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂質シルト	有り	有り	径5mmの風化凝灰質岩片を多量含む 瓦片を少量含む 石組側溝を埋める盛土
	III	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂質シルト	有り	有り	石組側溝使用時の旧表土 径5mmの風化凝灰質岩片を多量含む 2.5Y5/2 暗黄褐色の砂、瓦片を少量含む
	IV	2.5Y4/4	オリーブ褐色	砂質シルト	有り	有り	径1~5cmの礫、径5mmの炭化物を少量含む 石組側溝に先行する盛土
	Va	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	砂質シルト	有り	有り	土塁崩壊土 2.5Y4/2 暗黄灰色の粘土、砂質土をブロック状に含む 酸化鉄の集積有り
	Vb	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	有り	有り	土塁崩壊土 径5~10mmの風化凝灰質岩片を多量含む 2.5Y4/2 暗黄灰色の粘土ブロックを少量含む
	VI	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	有り	有り	旧表土 径10cmの礫と径2mmの風化凝灰質岩片を少量含む
	VIIa	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂礫	無し	無し	段丘崩壊土 径10~30cmの礫を多量含む
	VIIb	2.5Y5/2	暗黄褐色	粘土質シルト	有り	有り	段丘崩壊土 全体にグライ化
	VIIc	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	無し	有り	旧表土 (段丘崩壊土)
	VIIId	7.5YR3/2	黒褐色	砂質シルト	有り	有り	旧表土 2.5Y4/3 オリーブ褐色の砂質土をブロック状に少量含む
	VIIa	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂礫	有り	有り	段丘堆積物 径5~20cmの礫を多量含む 下部に径30cmの風化凝灰岩礫を少量含む
	VIIb	2.5Y4/4	オリーブ褐色	細礫	無し	無し	段丘堆積物 下部はラミナ状の堆積
	VIIc	2.5Y5/4	黄褐色	シルト砂質	有り	無し	段丘堆積物 2.5Y6/4 にぶい黄色シルトとの互層 ラミナ状の堆積
	IX	2.5Y4/4	オリーブ褐色	砂礫	無し	無し	段丘礫層 径5~50cmの礫を多量含む
X	10YR6/8	明黄褐色	岩盤	-	-	部分的に10Y4/1 灰色	



第42図 土塁裾部：4・6トレンチ遺構平面図 (1/100)・断面図 (1/50)



1・2・5T全景（東から）



1・2・5T全景（南東から）



2T北壁断面（南から）



2T KS-378検出状況（東から）



3T全景（南東から）



3T土壘積み土断面（南東から）



4・6T全景（南から）



6T西壁断面（東から）

第43図



4T西壁断面（東から）



石組側溝検出状況（東から）



4T段丘礫層検出状況（東から）



2T豆甕（No.7）出土状況



2T青磁皿（No.5）出土状況



4T染付変形鉢（No.3）出土状況



作業風景（東から）



現地説明会風景（東から）

4. 出土遺物

遺物のほとんどが埋没堀跡の調査箇所から出土している。金属製品が少なく、瓦の出土が多い。陶磁器は、攪乱や近代以降の盛土から多く出土しているが、近世期に属するものも一定量出土している。遺物の出土点数については、遺構・層位別の数量表を作成した（第24～26表）。

(1) 金属製品（第24表）

10点出土した。このうち、埋没堀跡の落ち際より並んで出土した鉄製品2点を図示した（第45図1・2）。第45図1は輪状の製品で、平面形は図の左側が大きく膨らむ楕円形を呈する。全長285mm、幅163mmで重量は709gである。片側部分では断面16×8mmの素材が2本組合され、段を成す形となっている。第45図2は断面36×16mmの棒状の製品である。全長371mmで全体がやや「く」の字に折れ曲がった状態である。破損は無く、右端には柄状の造り出しが見られる。また左端部には約4mm角の孔が見られる。左半部には木質の残存が両面でみられる事から、木材を組合せた製品であった可能性が高い。この2点については用途、年代共に不明であるが、出土層及び地点から判断して堀跡が埋没する前後に廃棄されたものと考えられる。

(2) 陶磁器類（第25表）

多くは、表土や近代以降の盛土からの出土である。第2・4・5トレンチにおいて比較的まとまった量の出土が見られた。

①陶器

25点出土した。第2トレンチKS-379より出土した大堀相馬の豆甕1点を図示した（第46図3）。器高36mmの灰釉の甕である。この他、大堀相馬の碗や仏飯具、肥前の碗、岸のすり鉢などが出土した。17～18世紀代の遺物が比較的多い。

②磁器

41点出土した。6点を図示した。第46図4は、石組側溝縁石の直上に堆積した旧表土層より出土した肥前産の染付変形鉢である。年代は18世紀以降を考えられる。同5も同様に旧表土層より出土した肥前の染付である。年代は18世紀である。

産地別では肥前が33点と80%を占める。うち碗・皿が10点・14点と最も多く、次いで鉢や瓶類が若干出土した。年代的には、ほとんどが17世紀中頃から18世紀代の範囲に含まれるが、若干19世紀代のもも見られる。肥前に次いで多いのは瀬戸美濃で、4点出土した。碗・皿が2点ずつで、いずれも幕末から明治にかけての遺物である。この他、波佐見と中国の可能性のある磁器が1点ずつ出土した。いずれも小片のため器種は不明である。年代は両者とも17世紀である。

③土師質・瓦質土器

土師質土器は19点出土した。第5トレンチ以外全てのトレンチで出土している。ほとんどが、表土層や近代以降の盛土層中からの出土である。いずれも小片のため、口径、底径の復元は困難である。

瓦質土器は2点出土した。いずれも小片のため、器形の復元は困難である。

第24表 出土金属品数量表

トレンチ	遺構・層位	鉄製品		銅製品	計
		鉄釘	その他		
2T	I	4			4
	II		2		2
	IIIa			1	1
3T	I	1	1		2
4T	II			1	1
計		5	3	2	10

第25表 出土金属品数量表

トレンチ	遺構・層位	磁器	陶器	土師質土器	瓦質土器	計
1T	II	1				1
	IIIa			6		6
2T	I	2		1		3
	II	1		2		3
	IIIa	4	3		1	8
	IVa	6	2			8
	IVc		4			4
	Vc			1		1
	KS-377	9	9	1	1	20
	KS-379		1			1
3T	II			2		2
	攪乱			1		1
4T	I	2		1		3
	II	2	1	3		6
	IIIa	1				1
	IIIb	1				1
	表探	1				1
	攪乱	1	2			3
5T	I	9	3			12
6T	II	1				1
	攪乱			1		1
計		41	25	19	2	87

(3) 瓦 (第26表)

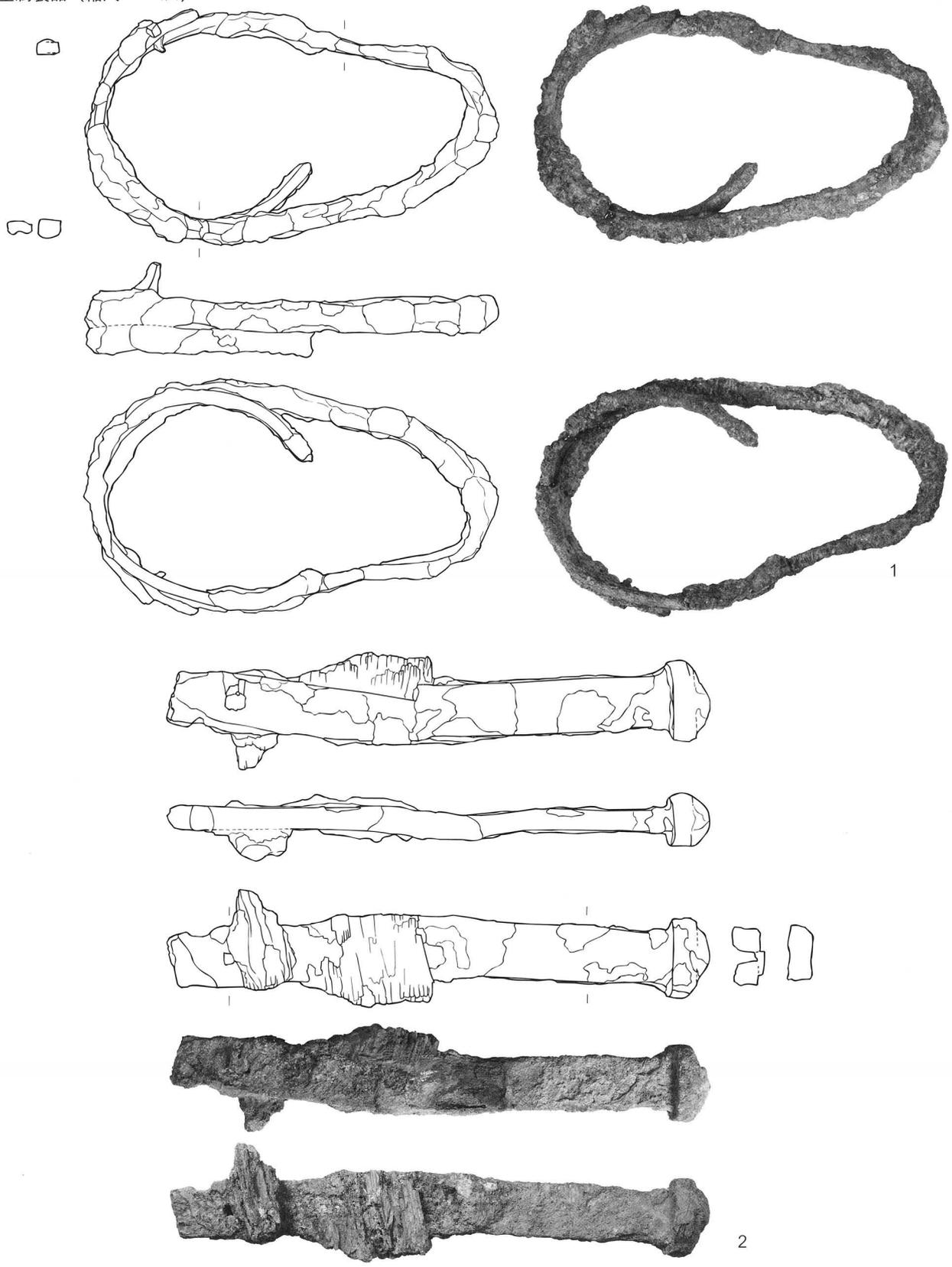
瓦は総計938点出土し、このうち丸瓦が198点、平瓦が680点で併せて全体の94%を占める。また、瓦全体の出土地別では、攪乱や近代以降の盛土層・遺構から出土したものが圧倒的に多い。瓦当文様のわかる軒平瓦・軒平瓦や駒巴瓦・輪違いなどを図示した。また、攪乱からの出土であるが第4トレンチより検出された鯨瓦の破片が注目される。

- ①軒丸瓦 6点出土した。瓦当文様の判別可能なものは4点あり、三引両文2点(第47図10)、三巴文2点である。この他、接合部のみの資料が2点出土した。
- ②軒平瓦 8点出土した。瓦当文様の判別可能なものは4点あり、桔梗文1点(第47図11)、無文3点(第47図12)である。この他、接合部のみの資料が3点出土した。
- ③軒棧瓦 1点出土した。瓦当文様の判別は困難である。
- ④棟瓦 主に棟に使用される瓦を棟瓦と総称する。9点出土した。熨斗瓦2点、輪違い2点(第47図14)、冠伏間瓦1点、面戸瓦4点が出土した。
- ⑤飾り瓦 鯨瓦が1点出土した。長さ4cm程度の小片であるが、特徴的な鱗の表現が見られることから鯨瓦の一部と推定される(第47図15)。石組側溝が検出された第4トレンチの攪乱より出土した。
- ⑥塀瓦 6点出土した。
- ⑦駒瓦 4点出土した。このうち駒巴瓦は2点出土した。第47図13に図示した駒巴瓦は、ちょうど中軸線にそって破損しており、製作の過程で接合する際に施された櫛描きが観察される。
- ⑧その他 この他、種別不明の瓦が5点出土した。

第26表 出土瓦数量表

トレンチ	遺構・層位	丸瓦	平瓦	棧瓦	軒丸瓦	軒平瓦	軒棧瓦	熨斗瓦	塀瓦	駒瓦	駒巴瓦	輪違い	面戸瓦	鯨瓦	冠伏間瓦	その他	計
1T	I	4	13			1		1			1		1				21
	II	12	38	2						1							53
	IIIa	5	25														30
	IIIe	7	23		1					1							32
2T	IVa	8	34														42
	I	6	16	3		1											26
	II	4	10	1		1				1							17
	IIIa	15	58					1			1					1	76
	IVa												1				1
	VIa	2	3														5
	VIc		8														8
	攪乱		3														3
KS-377		27	88	1													116
3T	I	5	25		1	1											32
	II	2	17			1											20
	攪乱	4	10							1							15
4T	I	32	81	2	1	1				1							118
	II	16	51			1							1		1		70
	IIIa		4			1											5
	VIII	1															1
攪乱		15	37							1				1			55
5T	I	5	60	6			1					1				2	75
6T	表採	6	11	5	1												23
	攪乱	22	65		2					2			2				94
計		198	680	20	6	8	1	2	6	2	2	2	4	1	1	5	938

金属製品 (縮尺 1/4)

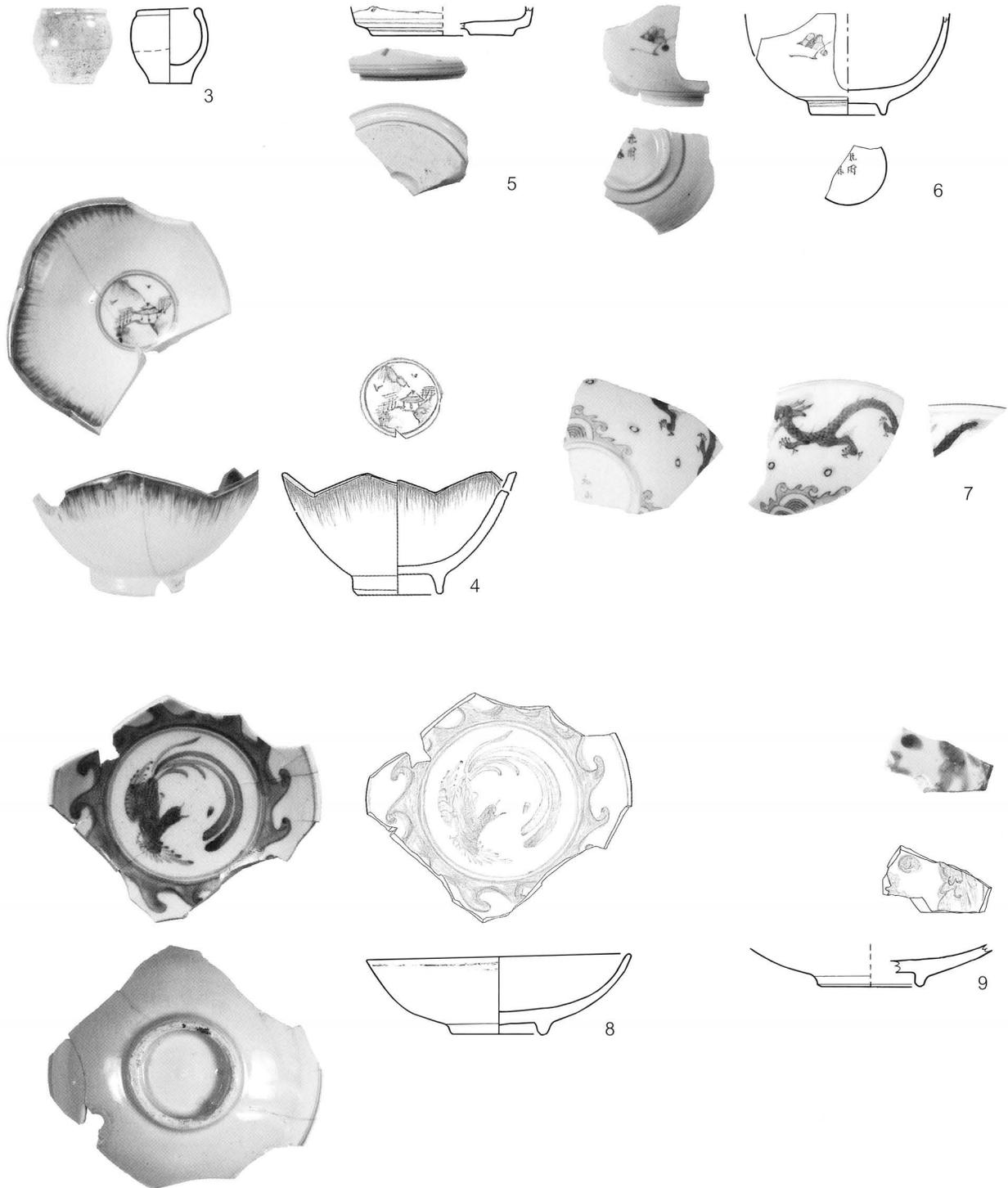


第45図 出土遺物写真・実測図 1

第27表 出土遺物註記表 1

番号	種類	遺物番号	区	遺構・層位	法量 (mm・g)			重量	備考
					長	幅	厚		
1	鉄製品	8	2T	II層	285.0	163.0	8.0	709.0	
2	鉄製品	9	2T	II層	371.0	36.0	16.0	1240.0	

陶磁器 (縮尺 1/3)

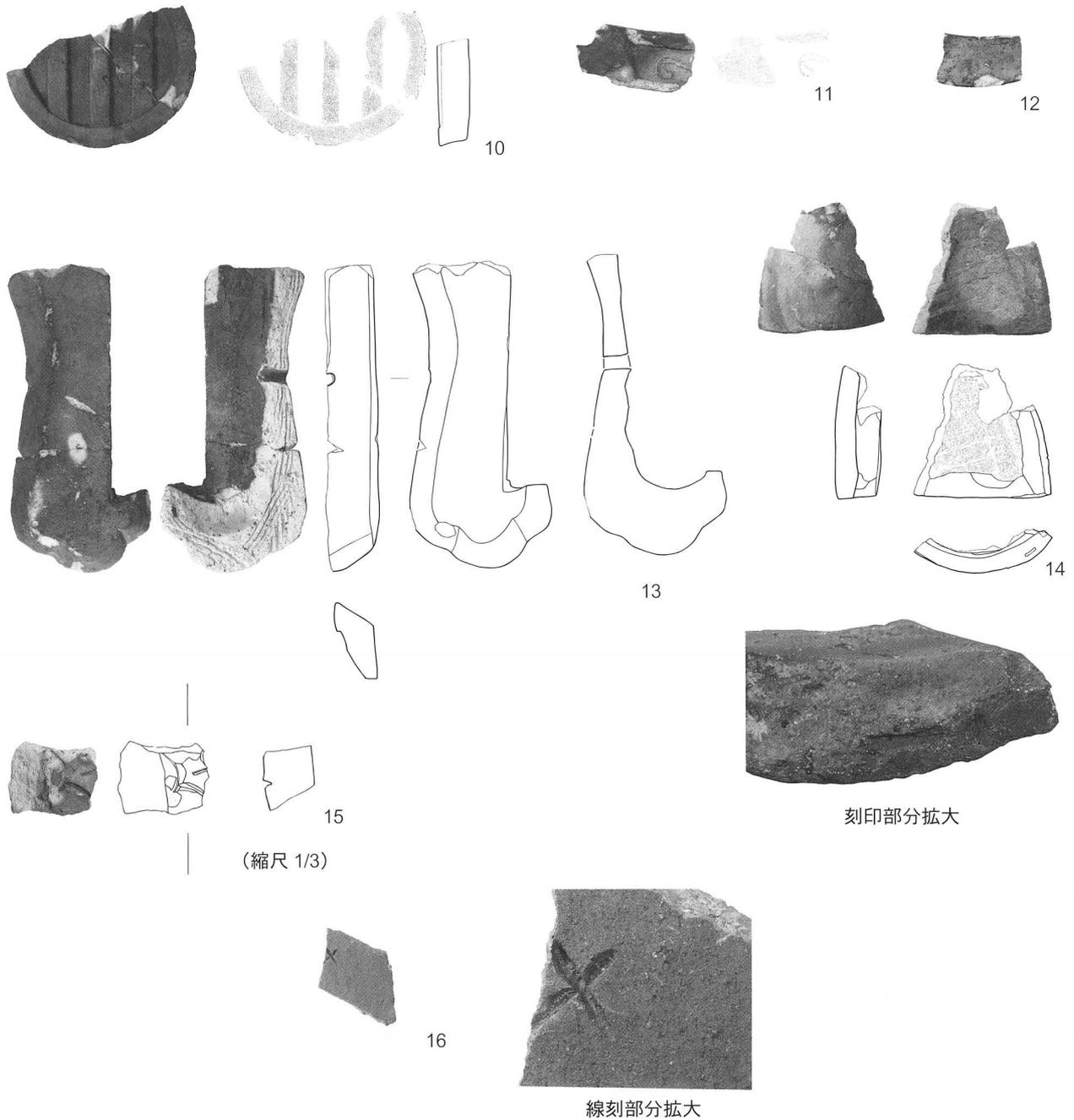


第46図 出土遺物写真・実測図2

第28表 出土遺物註記表2

番号	種類	遺物番号	区	遺構・層位	器種	法量 (mm・g)				備考
						口径	底径	器高	重量	
3	陶器	7	2T	KS-379・1層	豆鉢	31.0	19.0	36.0	20.8	大堀相馬 灰釉 19c
4	磁器	3	4T	Ⅲa層上面	鉢	112.0	43.0	59.0	109.5	肥前 染付 18c以降 雨降り文 変形鉢(五角形?) 見込山水
5	磁器	4	4T	Ⅲb層上面	鉢類	-	70.0	(15.0)	21.0	肥前 染付 18c 蛇/目高台
6	磁器	172	2T	KS-377・1層	碗	-	38.0	50.0	35.0	肥前 染付 17c末~18c前半か? 梅樹文 高台内「大明年製」? 銘
7	磁器	173	2T	KS-377・1層	碗	110.0	49.0	(50.0)	58.8	瀬戸美濃 染付 19c以降 口鏝 波・龍文 高台内「広山」銘
8	磁器	174	2T	Ⅲa層	皿	130.0	48.0	39.0	120.3	肥前 染付 17c中頃 波頭文 見込鳥文 外面釉ムラ
9	磁器	175	1T	Ⅱ層	皿	-	52.0	(21.0)	16.9	肥前 染付 17c中頃 高台畳付に砂 外面釉ムラ

瓦 (縮尺 1/6)



第47図 出土遺物写真・実測図 3

第29表 出土遺物註記表 3

番号	種類	遺物番号	トレンチ	遺構・層位	文様	法量 (mm・g)					重量	備考	
						瓦当径	瓦当厚	文様区径	周縁幅	周縁高			脇区幅
10	軒丸瓦	31	-	表採	三引両	170	25	138	17	5		632	
						瓦当高	瓦当厚	文様区高	文様区幅	周縁幅	脇区幅	重量	
11	軒平瓦	39	1	II	桔梗?	-	(24)	(56)	-	(9)	50	234	
12	軒平瓦	57	2	II	無文	瓦当高	瓦当厚					重量	
						-	16					159	
13	駒巴瓦	67	2	IIIa		(282)	(51)	64	(133)			1040	釘穴1 円形 径13mm
						長	広端幅	狭端幅	厚			重量	
14	輪違い	33	5	I		(126)	(130)	-	18			391	前面に刻印「一」
						長	幅	厚				重量	
15	鯨瓦	69	4	攪乱		(42)	(31)	(23)				27	鱗部分

番号	種類	遺物番号	遺構・層位	線刻形状	線刻位置
16	平瓦・線刻部分	74	表採	十?	下面

5. 絵図・地図からみた堀の変遷

今回調査を行った堀跡の位置や規模・平面形等について時期的な変遷を明らかにするため、藩政期より近代に至る絵図・地図の比較を行った。その結果、大きく4段階の変遷を確認することが出来た。以下にその概要を記す。

I 正保2年〔1645〕の奥州仙台城絵図（以下、正保絵図）に描かれた段階である。この絵図は仙台城を描いた現存する最古のものであり、これ以前については堀の形状等を知ることが出来ない。堀は東西方向に長く、その西辺は、北側に隣接する堀（現長沼）西辺の延長線に一致する。堀の規模については、「長 二十間、口 八間、深 二間」の記載がある。平面形は、東西両端にかぎ状の曲がりがあり、北側に開く「コ」の字形を呈する。

II 寛文4年〔1664〕の仙台城城下絵図（以下、寛文絵図）から延宝6～8年〔1678～1680〕の仙台城下大絵図の製作以前に描かれた段階である。堀の位置が全体に東へ移動し、東端の北へ延びる曲がり方がより長く表現される。また、堀の南北幅も正保絵図に比べ狭く描かれている。

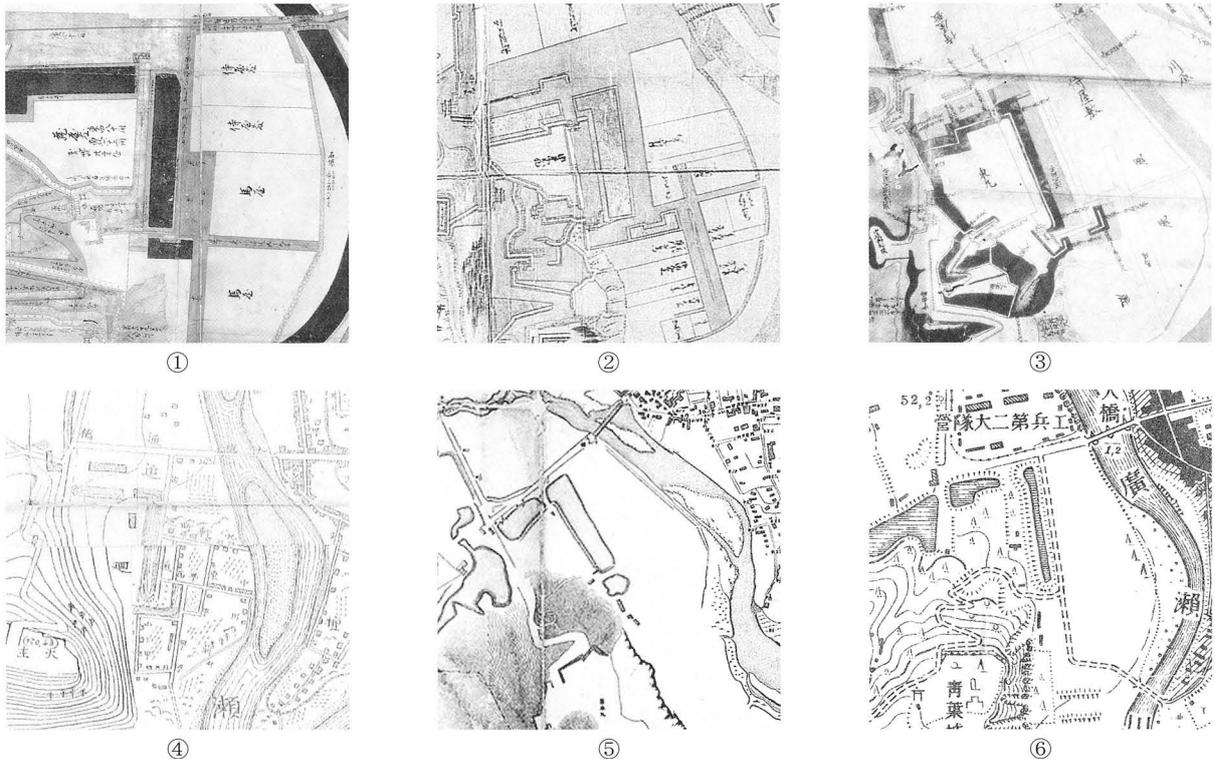
III 天和2年〔1682〕の奥州仙台城并城下絵図から明治13年〔1880〕の宮城県仙台全図までに描かれた段階である。北側の堀（現長沼）の東西幅が狭くなり、それに合わせて寛文絵図で見られた東西方向のずれが見られなくなる。

東端の北へ延びる曲がり方はより長くなり、この入り角部分には土塁が描かれる。また、堀の西端にも土塁の表現が見られる。

IV 明治13年〔1880〕以降、明治26年〔1893〕の仙台市全図では堀の東半が埋没し、平面形が円形となる。次いで明治38年〔1905〕頃の地形図では堀の表現が無くなっていることから、この頃までには完全に埋没したものと考えられる。

今回実施した堀跡の調査は、上記の変遷を考古学的に検証する事が主要な目的の一つであった。来年度以降の継続的な調査により全体像を解明してゆく必要がある。

6. まとめ



①奥州仙台城絵図（正保2・3年〔1645・46〕）（財）齋藤報恩会蔵
 ②仙台城下絵図（寛文4年〔1664〕）宮城県図書館蔵
 ③奥州仙台城并城下絵図（天和2年〔1682〕）宮城県図書館蔵
 ④櫻臺区及近傍村落之図（明治15年〔1882〕）仙台市博物館蔵
 ⑤仙台市全図（明治26年〔1893〕）
 ⑥仙台市地形図（明治38年〔1905〕頃）

第48図 絵図・地図からみた堀の変遷

第13次調査では、以下①～⑥の成果が得られた。

- ①埋没堀跡の調査では、第2トレンチにおいて北岸の一部を検出した。また、西岸及び南岸の検出を目的とした第1トレンチ及び第5トレンチでは、堀跡のプランを検出するには至らなかった。このことから、堀跡の南北幅は20m以上になると推定される。
- ②第2トレンチにおいて、堀跡の上端ラインに沿って暗渠状遺構（KS-378）を検出した。
- ③翼門跡東脇土塁裾部の調査では、第4トレンチにおいて石組側溝を良好な状態で検出した。また、これにより土塁裾部に見られる石列が、石組側溝縁石の片側である事が明らかとなった。
- ④石組側溝のレベルと当時の路面の高さは同じと考えられる事から、土塁南側の登城路は最大で1.5m程削平されている事が明らかとなった。
- ⑤第3トレンチにおける土塁の調査では、版築状の土塁積み土を確認した。層厚は約3.5mである。また積み土の直下で土塁構築以前の旧表土（IV層）が確認された。
- ⑥遺物としては、鉄製品・陶器・磁器・土師質土器・瓦などが出土した。

VI 第14次調査

1. 調査の経過

1. 調査の経緯

第14次調査として広瀬川護岸石垣（大橋北側・南側）と中門北側石垣の3箇所について石垣測量を実施した。作業は平成17年12月上旬に清掃を行い、翌年1月中旬に写真撮影を行った。また、広瀬川護岸石垣（大橋南側）については、その後調査範囲を追加し平成18年3月中旬に清掃を行い、写真撮影を行った。なお、測量図については来年度以降掲載する事とする。



第49図 広瀬川護岸石垣(大橋南側)全景(東から)

2. 測量結果の概要

①広瀬川護岸石垣（大橋北側）

大橋の北約190mの地点で、広瀬川右岸より石材が数石程並んで確認された事から、大橋南側護岸石垣との関連性を考慮し調査を行った。段数・勾配については不明である。

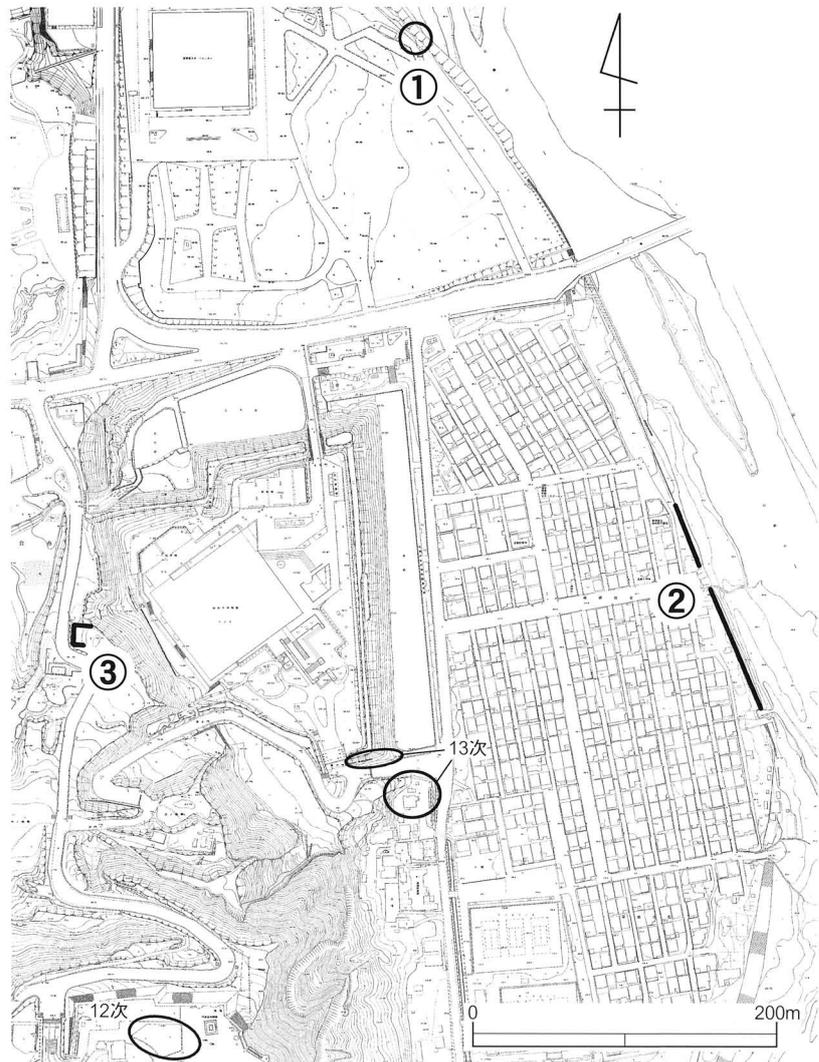
②広瀬川護岸石垣（大橋南側）

15年度の9次調査・16年度の11次調査で測量した範囲の南側70mを延長して測量した。その後、更に80m分を延長し写真撮影を実施した。石垣の高さは2.4~3.9m、勾配は76°~82°である。測量範囲の北側約10mの部分は、矢穴の残る比較的大型の割石を横置きに積む傾向があり、詰石も認められる。この部分の勾配は約76°である。残りの南側部分は、自然石を主体とし割石は稀である。矢穴のある石材も、この範囲についてはほとんど確認されなかった。

③中門北側石垣

4面の石垣について測量を行った。総延長は38.7mである。石垣は切石の整層積みで、高さは最大3.8mで、勾配は78°~82°である。出角は算木積みで、江戸切りが認められる。また築石の一部には簾状のノミ痕跡が確認された。

現在露出している石材の最下部にコンクリートが見える事から、後世の積み直しを受けていると考えられる。



第50図 14次調査位置図 (1/5,000)、①~③は本文に対応



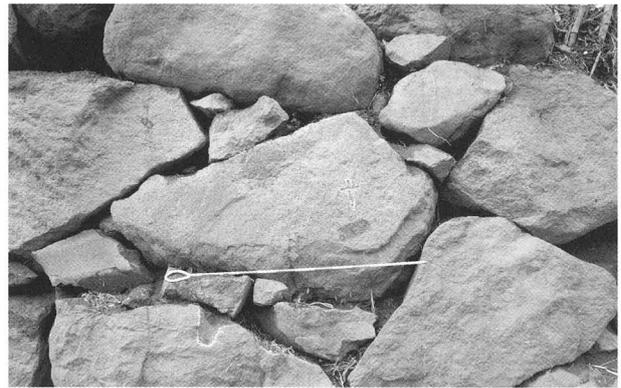
広瀬川護岸石垣（大橋南側）（南東から）



広瀬川護岸石垣（大橋南側）



広瀬川護岸石垣（大橋南側）（東から）



広瀬川護岸石垣（大橋南側）刻印・矢穴のある石材



広瀬川護岸石垣（大橋北側）（北から）



広瀬川護岸石垣（大橋北側）（北から）



中門北側石垣（南から）



中門北側石垣（北西から）

第51図

Ⅶ まとめ

本年度は仙台北城跡遺構確認調査の第1次5ヵ年計画の5年目であり、本丸大広間跡周辺の遺構確認調査(第12次)、三の丸巽門跡周辺の遺構確認調査(第13次)、中門及び広瀬川護岸の石垣測量調査(第14次)を行った。

本丸大広間跡のこれまでの調査では、大広間の位置や規模、柱間が6尺5寸を基準としている事などを確認してきた。また、昨年度の第10次調査では、大広間車寄付近から御成門付近へ延びる石敷き溝状遺構を検出し、通路の可能性が指摘された。また、御成門跡の調査では現存する礎石が門の北東角部にあたる事をほぼ確定した。さらに、大広間跡西側の柱穴列が北側に延長しない事を確認し、新たに東西に延びる柱穴列を検出した。このような大広間跡西側周辺における遺構の解明を受け、第12次調査では大広間跡北側、北東側周辺を主な対象とした。

大広間跡北側周辺は、寛文4年[1664]製作の『仙台北城下絵図』等に描かれた能舞台の推定地であり、関連遺構の確認を目的とし実施した。その結果、大広間雨落ち溝跡の北3mで大広間跡に先行し、石敷きを伴う礎石建物跡を1棟検出した。礎石は4石がL字形に並び、東西の軸線は大広間跡東西軸線より北へ20°振れる。礎石の柱間は西から1.48m・1.48m・1.53mである。建物跡の全体形状、規模が不明である点や建物跡が大広間跡に先行する事実から、能舞台との関連性を指摘するには至らなかった。この建物跡の評価は、今後大広間跡に先行する遺構の有無を明らかにし、周辺遺構全体との位置関係や規模を解明してゆく中で行っていくべき課題である。大広間跡についても、雨落ち溝跡が改修を受け、それに伴い新たに暗渠状遺構が取り付くなど遺構の変遷が明らかになった。また、大広間跡内部の整地層中には、より古い遺構面が埋没している可能性があり、今後、整地層がより厚く堆積する大広間跡北東角、東側周辺での調査が重要になるものと考えられる。より古い遺構面の確認は、大広間の建替えの可能性や先の礎石建物跡の評価にも関わる重要課題であり、今後の調査における一つの方向性を示すものである。また、土壌サンプルの理化学分析は、遺構の性格解明を目的とした一つの試みであり、今後もデータを蓄積していく必要がある。昨年度に続き実施した放射性炭素年代測定の結果については、可能性の一つと捉え今後十分に検討していきたいと考えている。

第13次調査では、埋没堀跡及び土塁裾部の調査を実施した。埋没堀跡の調査では、第2トレンチより北岸の一部を検出した。また上端ラインに沿って北西から南東方向に延びる暗渠状の石列を検出した。堀跡の西岸、南岸の検出を目的とした第1・5トレンチでは堀跡を検出するに至らず、これにより堀の南北幅は20m以上になることが確認された。今回の調査成果を元に、来年度以降堀跡の全容解明を目指して継続的に調査を進めていく予定である。また、土塁裾部の調査では、特に第4トレンチにおいて巽門跡から長沼へと続く石組側溝を良好な状態で検出した。これにより、現存する石列が石組側溝の一部である事が確認され、土塁南側の登城路は最大で1.5m程の削平を受けていることが明らかになった。土塁については、第3トレンチの断面観察により厚さ約3.5mの版築状の積み土を確認した。近年、巽門から清水門に抜けるルートを築城期の大手筋とする議論があり、仙台北城跡の解明にとって、第13次調査の実施は大きな意味を持つものである。

第14次調査として、石垣測量調査は3箇所で行った。城内各所には多くの石垣が残されており、その観察によって仙台北城跡における石積み技法の変遷を解明し得ると考えられる。

平成15年8月の国史跡指定を受け、仙台北城を史跡として整備していくため昨年3月仙台北城跡整備基本計画を策定した。発掘調査をはじめとする各種調査は、その基礎となるものである。仙台北城跡全体の解明のため、今後とも計画的に調査を進めていきたいと考えている。

参考文献

- 『仙台城の建築』小倉強 昭和5年 [1930]
- 『松島瑞巖寺と仙台城大広間』小倉強 仙台郷土研究第2巻第12号 昭和7年 [1932]
- 『仙台城大広間絵図について』小倉強 仙台郷土研究第12巻第11号 昭和17年 [1942]
- 『仙台城と仙台領の城・要害（日本城郭史研究叢書2）』小林清治編 昭和57年 [1982]
- 『伊達政宗』小林清治 昭和34年 [1959]
- 『仙台城居館の変遷とその構成・機能』『近世武士住宅』佐藤巧 昭和54年 [1979]
- 『仙台城の建築と姿絵図』佐藤巧 東北大学建築学年報第21号 昭和56年 [1981]
- 『建築技術史の謎を解く [続・工匠たちの知恵と工夫]』西和夫 昭和61年 [1986]
- 『図解古建築入門』西和夫 平成3年 [1991]
- 『仙台城沿革』第二師団司令部 大正15年 [1926]
- 『仙台城』仙台市教育委員会 昭和42年 [1967]
- 『仙台城三ノ丸跡』仙台市教育委員会 昭和60年 [1985]
- 『仙台城址の自然』仙台市教育委員会 平成2年 [1990]
- 『年報1～17』東北大学埋蔵文化財調査研究センター 昭和60～平成14年 [1985～2002]
- 『仙台城跡石垣修復等調査指導委員会 第1～9回資料』平成9～12年 [1997～2000]
- 『仙台城跡石垣修復工事専門委員会 第1～15回資料』仙台市建設局 平成13～16年 [2001～2004]
- 『仙台城跡調査指導委員会 第1～9回資料』仙台市教育委員会 平成13～16年 [2001～2004]
- 『仙台城－しろ・まち・ひと－』仙台市博物館特別展図録 平成13年 [2001]
- 『金色のかざり－金属工芸にみる日本美－』京都国立博物館 平成15年 [2003]
- 『仙台城本丸大広間の復原的研究』渡部薫 平成15年度神奈川大学建築学科西研究室卒業研究・修士論文梗概集 平成16年 [2004]
- 『奥州仙台城絵図』正保2・3年 [1645・1646] (齋藤報恩会蔵)
- 『仙台城下絵図』寛文4年 [1664] (宮城県図書館蔵)
- 『仙台城及び江戸上屋敷主要建物姿絵図』(仙台市博物館蔵・千田家資料)
- 『御本丸大広間地絵図』(齋藤報恩会蔵)
- 『青葉城御本丸之図』(仙台市博物館蔵)
- 『御本丸御家作御絵図』明治元年 [1868] (宮城県図書館蔵)
- 『仙台城旧御本丸御屋形図』明治26年 [1893] 遠藤允信追記 (仙台市博物館蔵)
- 『伊達治家記録』(貞山公治家記録)
- 『仙台古文記』慶長7年 [1602] (伊達家御給主 高梨家文書 平成5年 [1993] 所収)
- 『御本丸拝見覚書』安永4年 [1775] 安倍彦右衛門記 (仙台市史 昭和4年 [1929] 所収)
- 『仙台藩租尊皇事蹟』矢野顕藏 明治32年 [1899]
- 『伊達家史叢談卷之五』伊達邦宗 大正10年 [1921]
- 『能楽全書第四卷能の演出』東京創元社 昭和54年 [1979]
- 『東京大学コレクション 加賀殿再訪』西秋良宏編 東京大学出版会 平成12年 [2000]
- 『江戸のミクロコスモス加賀藩江戸屋敷』追川吉生 新泉社 平成16年 [2004]
- 『武家屋敷－尾張藩上屋敷－』甲崎光彦 季刊考古学53 平成7年 [1995]
- 『東大構内の遺跡から』成瀬晃司 季刊考古学53 平成7年 [1995]
- 『特別史跡彦根城跡表御殿発掘調査報告書』彦根城博物館 昭和63年 [1988]

報 告 書 抄 録

ふ り が な	せんだいじょうあと						
書 名	仙台城跡6						
副 書 名	－平成17年度 調査報告書－						
巻 次	6						
シ リ ー ズ 名	仙台市文化財調査報告書						
シ リ ー ズ 番 号	第297集						
編 著 者 名	渡部 紀・鈴木 隆						
編 集 機 関	仙台市教育委員会						
所 在 地	〒980-8671 仙台市青葉区国分町3丁目7-1 TEL.022-214-8544						
発 行 年 月 日	2006年3月31日						
ふ り が な 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地	調 査 地 点	コ ー ド		調 査 期 間	調 査 面 積	調 査 原 因
			市町村	遺跡番号			
			04100	01033			
			北緯	東経			
せんだいじょうあと 仙 台 城 跡	みやぎけんせんだいし 宮城県仙台市 あおばくかわうちちない 青葉区川内地内	大広間跡 (5次) [第12次調査]	38°15'02"	140°51'35"	2005.5.26 ～ 2005.10.19	446㎡	重要遺跡の 遺構確認 調査
		三の丸跡 (1次) [第13次調査]	38°15'07"	140°51'41"	2005.11.1 ～ 2005.12.22	86㎡	
		中門北側・ 広瀬川護岸石垣 [第14次調査]	38°15'12"	140°51'49"	2006.1.16 ～ 2006.1.20	627㎡	
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項		
仙台城跡	城館跡	江戸時代	礎石跡・雨 落ち溝跡・ 石垣・土塁・ 堀切	金属製品・ 瓦・陶磁器	第12次調査では、大広間跡に先行する礎石建物跡を検出した。また雨落ち溝の改修や暗渠状遺構の設置など、排水に関わる遺構の変遷が明らかになった。第13次調査では、近代に埋没した堀跡の一部や登城路北側の石組側溝を検出した。		

仙台市文化財調査報告書第297集

仙 台 城 跡 6

— 平成17年度 調査報告書 —

2006年3月

発行 **仙台市教育委員会**

仙台市青葉区国分町三丁目7-1

文化財課 022 (214) 8554

印刷 株式会社 **建設プレス**

仙台市青葉区折立三丁目2-10

TEL 022 (302) 0177

